秋田県文化財調査報告書第169集

味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

―― 袖ノ沢遺跡 ・ 横沢遺跡 ――

1988・3

秋 田 県 教 育 委 員 会

味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

―― 袖ノ沢遺跡 ・ 横沢遺跡 ――

1988・3

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

本県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されております。秋田県教育委員会では、文化財保護の立場から開発事業側と協議し、鋭意その保護に努めております。

このほど、秋田県農政部によって北秋田郡比内町味噌内地区で進められている農道整備事業に伴い、事前に計画路線内の埋蔵文化財の分布調査で判明している袖ノ沢遺跡と横沢遺跡の発掘調査を工事に先立って実施いたしました。

その結果、縄文時代の竪穴住居跡や平安時代の竪穴住居跡などが発見されました。

本書は、この発掘調査の成果をまとめたものでありますが、埋蔵文化財保護への御理解と大館、北秋田地方の郷土の歴史解明に御活用いただければ幸いです。

最後に、この調査に御協力いただきました秋田県農政部、北秋田農林事務所、比内町教育委員会はじめ関係機関各位、並びに調査及び本書作成に御協力いただきました関係者の方々に厚く御礼申しあげます。

昭和63年３月25日

秋田県教育委員会
教育長　斎藤　長

例　　言

1．　本書は、県農政部北秋田農林事務所が昭和59年度から４カ年継続事業として実施している味噌内地区農免農道整備事業の昭和62年度事業実施に伴い、北秋田郡比内町宿内袖ノ沢67―３外に所在する袖ノ沢遺跡と同町扇田字横沢３外に所在する横沢遺跡の一部が計画路線内にかかり消滅することから、記録保存を目的に発掘調査を実施した袖ノ沢遺跡と横沢遺跡の記録である。

2．　調査は、秋田県埋蔵文化財センターが袖ノ沢遺跡を昭和62年５月６日から５月30日まで、横沢遺跡を昭和62年５月６日から６月30日まで実施した。

3．　本書に掲載した地形図は、国土地理院発行５万分の１「大館」「大葛」「鷹巣」「米内沢」と北秋田郡比内町産業課から提供された２千５百分の１「比内町都市計画図」（昭和62年３月）である。

4．　遺跡付近の航空写真は、比内町産業課から提供された昭和61年10月撮影の密着焼写真を部分複写したものである。

5．　本遺跡の発掘調査・資料整理に際し、次の諸氏から御教示を賜わった。記して謝意を表する。（敬称略・順不同）

田村栄（県文化財保護指導員）、石田壮一（比内町教育委員会主事）、板橋範芳（大館市企画室市史編さん係主任）、佐藤信吉（比内町文化財保護審議委員）、秋元信夫（鹿角市教育委員会主任）、鎌田健一（十和田高校教諭）、小林清一郎（郷土史家）、羽賀一雄（町立扇田病院係長）

6．　本書の草稿執筆は、小畑と桜田が次のように分担した。

小畑　　遺跡の立地と環境のうち歴史的環境

横沢遺跡　第１章　発掘調査の概要

第２章　調査の記録のうち第１節遺跡の土層、第２節検出遺構と遺物、１．縄文時代

第３章　まとめのうち縄文時代

桜田　　はじめに

遺跡の立地と環境のうち自然的環境

袖ノ沢遺跡　第１章から第３章

横沢遺跡　第２章　調査の記録のうち第２節検出遺構と遺物　２平安時代

第３章　まとめのうち平安時代　時期不明の遺構

遺跡調査の成果と今後の課題

7．　横沢遺跡の竪穴住居跡と空堀の実測には、シン航空写真株式会社のケーブルリフティングシステムを使用した。また、袖ノ沢遺跡と横沢遺跡の地形測量と水準測量には㈲大館換地測量設計事務所の協力を得た。

凡　　例

1．　竪穴住居跡の柱穴及び柱穴様土坑に付した数字は、竪穴住居跡の場合は、床面からの深さ、柱穴様土坑の場合はプラン確認面からの深さを表わす。（単位cm）

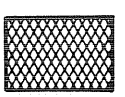
2．　各遺構に付している略記号は次の通りである。

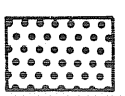
ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＫＩ……竪穴遺構　　ＳＫ……土坑　　ＳＫＦ……フラスコ状土坑　　ＳＫＴ……溝状土坑　　ＳＤ……空堀・溝状遺構

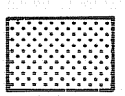
3．　遺構実測図中の遺物にRPまたはKRP、及びRNという略記号を付しているが、RPは遺構粗掘中に出土した土器・土製品、KRPはかまど精査中の土器・土製品、RNは炭化材である。

4．　遺跡の土層及び遺物の色調の記載は「新版　標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用したが、色相・明度／彩度の表記を省略したものがある。

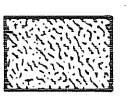
5．　遺構実測図中に使用したスクリントーン及びシンボルマークは次の通りである。

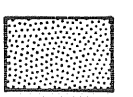

地山Ⅰ層

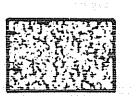

地山Ⅱ層


地山Ⅲ層

土　器


地山Ⅳ層


地山Ⅴ層


赤変部分

自 然 石

目　　次

序
例　言 …… ii
凡　例 …… iii
目　次 …… iv
はじめに …… 1
　発掘調査に至るまで …… 1
　調査の組織と構成 …… 2
遺跡の立地と環境 …… 2
　自然的環境 …… 2
　歴史的環境 …… 4

袖ノ沢遺跡

第1章　発掘調査の概要 …… 10
　第1節　調査の方法 …… 10
　　1　調査区の設定 …… 10
　　2　発掘調査方法 …… 10
　第2節　調査経過 …… 10
第2章　調査の記録 …… 11
　第1節　遺跡の土層 …… 11
　第2節　検出遺構と遺物 …… 12
　　1　竪穴住居跡 …… 12
　　2　土坑・溝状土坑 …… 21
　　3　柱穴様土坑群 …… 22
第3章　まとめ …… 23

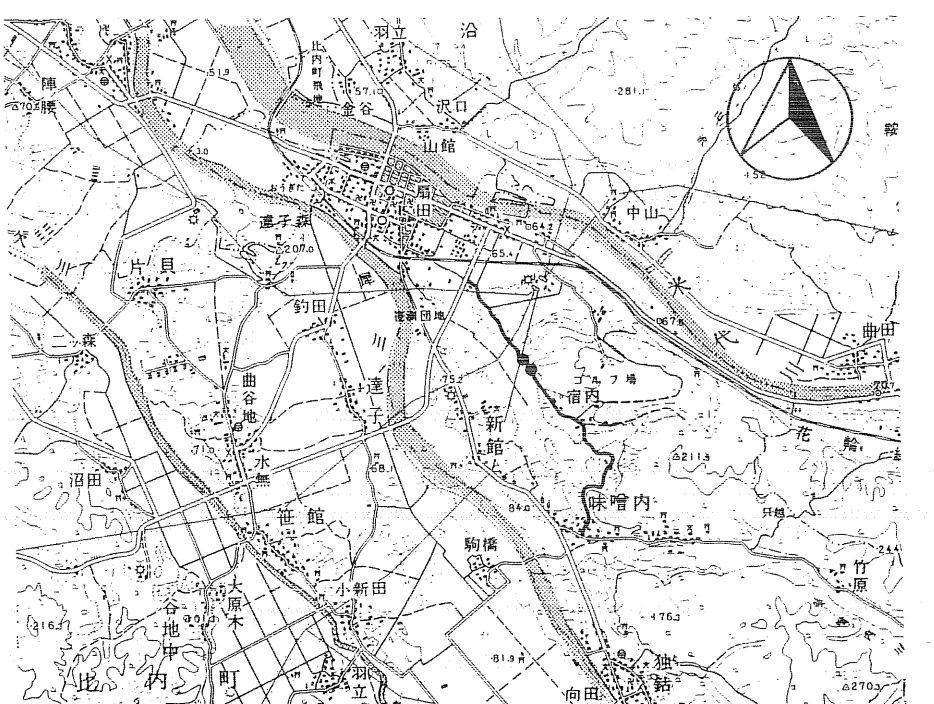
横沢遺跡

第1章　発掘調査の概要 …… 30
　第1節　調査の方法 …… 30
　　1　調査区の設定 …… 30
　　2　発掘調査方法 …… 30
　第2節　調査経過 …… 30
第2章　調査の記録 …… 32
　第1節　遺跡の土層 …… 32
　第2節　検出遺構と遺物 …… 32
　　1　縄文時代 …… 32
　　(1)　竪穴住居跡 …… 32
　　(2)　竪穴遺構 …… 35
　　(3)　フラスコ状土坑・土坑 …… 35
　　(4)　遺構外出土遺物 …… 56
　　2　平安時代 …… 59
　　(1)　竪穴住居跡 …… 59
　　(2)　竪穴遺構・土坑 …… 75
　　3　時期不明の遺構 …… 78
第3章　まとめ …… 80

はじめに

発掘調査に至るまで

昭和59年度から県農政部北秋田農林事務所の事業として実施される味噌内地区農免農道整備事業計画路線（延長約1.6㎞）内に埋蔵文化財が包蔵されている可能性があるとして、県知事から、県教育長へ埋蔵文化財調査についての依頼があった。昭和61年４月６日と９日の２日間、比内町教育委員会が横沢地内の計画路線の道路取付部分と台地全域を試掘調査（調査者：田村栄、出島雄蔵）し、５月15日、16日の２日間、県教育庁文化課　冨樫泰時学芸主事がその他の区域の試掘調査を行った。その結果、大岱遺跡（比内町扇田字南大岱19―１外）、横沢遺跡（比内町扇田字横沢３外）、袖ノ沢遺跡（比内町宿内袖沢67―３外）の３遺跡が計画路線内に存在することが明らかになった。



第１図　味噌内地区農免農道路線位置及び遺跡位置図

昭和61年５月22日付で、県知事から文化財保護法第57条の３の規定により「埋蔵文化財発掘の通知について」（北農―442）が県教育長あてに提出されたので県教育委員会は、横沢遺跡と袖ノ沢遺跡の２カ所については工事着工前に発掘調査、大岱遺跡については遺構等が検出さ

れなかったものの、工事着手の際立会調査を実施するよう通知した。〔昭和61年6月2日付、県教育長から県知事あて教文―169周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）〕。　北秋田農林事務所では、昭和61年度事業として袖ノ沢・横沢両遺跡の範囲を残して起点側と終点側の両方から工事に着工し、大岱遺跡の範囲については、冨樫学芸主事が立ち合った。残された袖ノ沢遺跡610㎡、横沢遺跡1,390㎡については、昭和62年度事業実施前に発掘調査し、記録保存することになった。

調査の組織と構成

調査主体者　　秋田県教育委員会

調査担当者　　小畑　　巌　（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）

　　桜田　　隆　（秋田県埋蔵文化財センター文化財主任）

総務担当者　　加藤　　進　（秋田県埋蔵文化財センター主査）

　　高橋忠太郎　（秋田県埋蔵文化財センター主事）

調査協力機関　　県農政部北秋田農林事務所　　比内町教育委員会　　比内町役場総務課

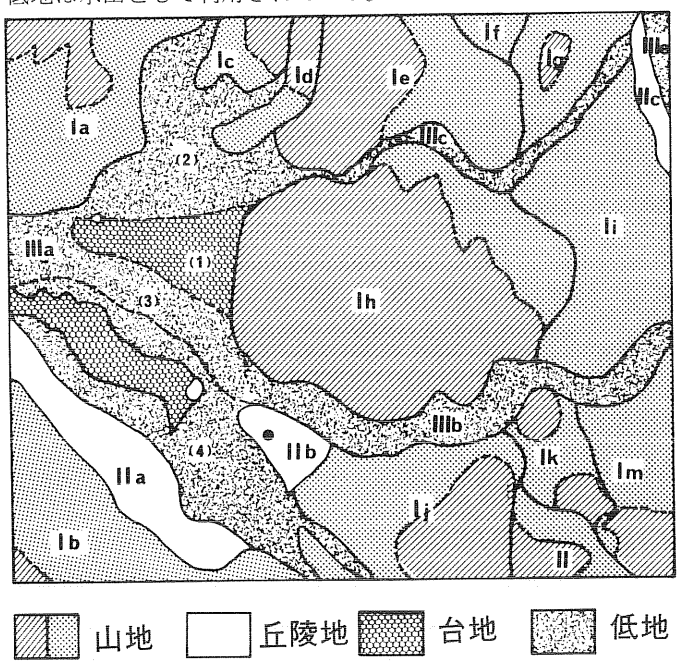
　　比内町役場産業課　　比内町史編さん委員会

遺跡の立地と環境

自然的環境

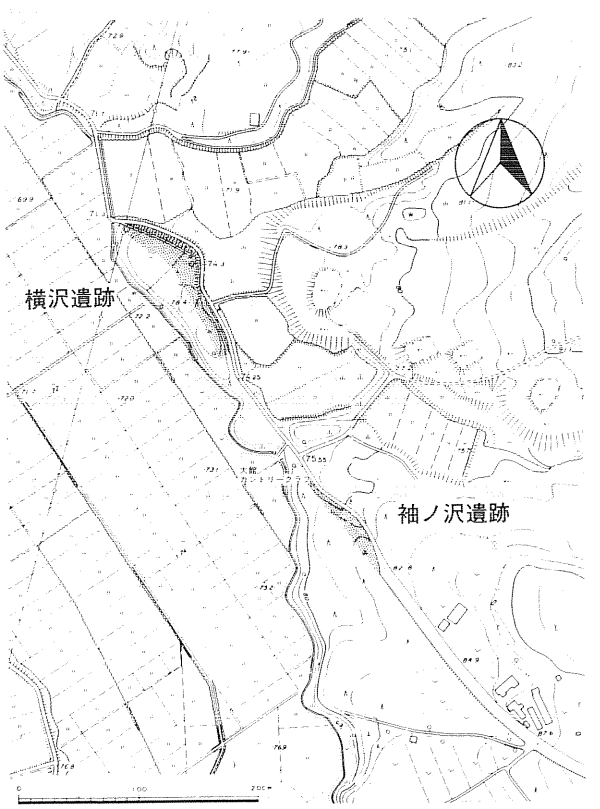
秋田県北部中央に位置する大館盆地は、奥羽脊梁山地の西縁の新第三紀、中新世のグリーンタフ地域に位置する。この構造性の山間盆地と接する四囲の山地は、一大断層によって画されていて、東よりの山地は海抜500ｍ内外の高度をもち早壮年期の地貌を呈する。西側山地は海抜高度200～300ｍを呈する。第2図は、遺跡周辺の地形区分図であるが、図幅の約⅔の東部地域は山地、約⅓の西部の大部分は盆地を形成している。大館盆地を東西に流れる米代川は南から引欠川、犀川を、北からは長木川、下内川を合わせ広く沖積低地をつくっている。それぞれの河間地には、上、中、下3段の段丘地形が発達し、これらの段丘は、半島状ないし紡錘状に東から西へ細長く発達している。遺跡は、北側米代川、南側の犀川に狭まれた味噌内丘陵地（Ⅱｂ）と呼ばれる、クサレ礫を含む河成礫層を赤黄色ローム層が覆い、一大波浪状面を呈する丘陵上に位置する。味噌内丘陵地のうち、遺跡付近は自然営力による大、小規模な開析と、戦後の開墾とゴルフ場建設により開削されている。袖ノ沢遺跡は丘陵の縁辺部に位置するが、横沢遺跡は、自然開析と人為開削からとり残されたような残丘地形を呈する。両遺跡の西側の

低地は水田として利用されている。



第２図　遺跡周辺の地形区分図

Ⅰ　山　　地
　Ⅰa　大山山地
　Ⅰb　比内山地
　Ⅰc　城ヶ森山地
　Ⅰd　高森山地
　Ⅰe　高倉山山地
　Ⅰf　羽保屋山山地
　Ⅰg　高地山山地
　Ⅰh　中央山地
　Ⅰi　松森山地
　Ⅰj　合窪山山地
　Ⅰk　三哲山山地
　Ⅰl　合津山地
　Ⅰm　尾去沢山地
Ⅱ　丘　陵　地
　Ⅱa　比内丘陵地
　Ⅱb　味噌内丘陵地
　Ⅱc　小坂丘陵地
Ⅲ　台地，低地
　Ⅲa　大館盆地
　　(1)大館段丘地
　　(2)長木川，下内川低地
　　(3)米代川低地
　　(4)犀川，引欠川低地
　Ⅲb　十二所先行谷低地
　Ⅲc　長木川峡谷低地
　Ⅲd　元山段丘地
　Ⅲe　小坂川谷低地



第３図　遺跡位置と周辺の地形

歴史的環境

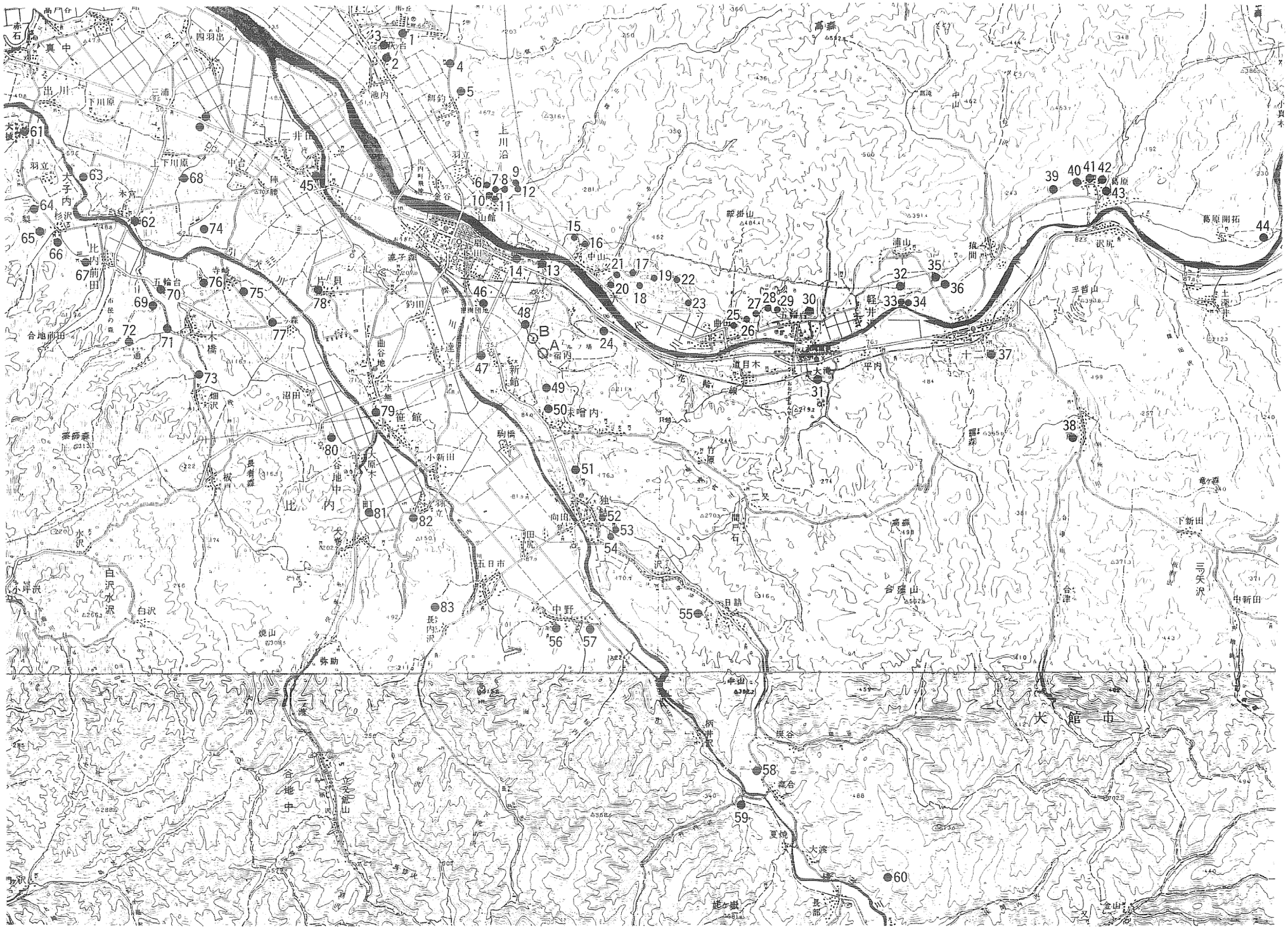
味噌内地区をその中に抱摂する比内町は、米代川流域、犀川流域、引欠川流域の３つに大別される。これまで確認されている遺跡を比内町を中心に概観してみると、米代川流域で46遺跡犀川流域で16遺跡、引欠川流域では24遺跡を数える（第４図）

これら80遺跡にのぼるもののうち、先土器時代のものはいずれの流域においてもこれまで確認されていない。縄文時代早期では、鳶ケ長根Ⅲ遺跡、鳶ケ長根Ⅳ遺跡等３遺跡に限られる。いずれも米代川流域に集中している。縄文時代前期では、大館市史編さん室が調査を行った上ノ山遺跡の第一次調査区において長軸が11ｍを超える大型の竪穴住居跡が検出されている。

昭和62年に秋田県教育委員会が調査を行った上ノ山Ⅰ遺跡では沢に廃棄された多量の円筒下層式土器と大型の竪穴住居跡が検出されている。また円筒土器が多量に出土する遺跡としては、池内Ｂ遺跡が知られている。縄文時代前期末から中期末にかけては、竪穴住居跡20軒のほか多量の土製品、石製品を検出した本道端遺跡が知られる。縄文時代晩期になると、引欠川流域で遺跡数が増える傾向を示し、寺崎Ⅰ・Ⅱ遺跡、二ツ森遺跡など９遺跡を数える。弥生時代に入ると遺跡数が激減し、鳶ケ長根Ⅳ遺跡を数えるにすぎない。奈良、平安時代においては米代川流域で１遺跡、犀川流域で３遺跡、引欠川で１遺跡が知られているが、中世以降急増してくる。

今回調査を行った袖ノ沢遺跡では平安時代の生活の跡が、横沢遺跡では縄文時代早期と中期、平安時代、中世に属する遺構、遺物が検出されているので、ここでは同時代の周辺遺跡を述べてみたい。縄文時代早期の遺跡は、先に述べたようにすべて米代川流域に集中し、野沢岱Ｃ遺跡、鳶ケ長根Ⅲ遺跡、鳶ケ長根Ⅳ遺跡が知られる。鳶ケ長根Ⅲ遺跡では尖底深鉢形土器が、また鳶ケ長根Ⅳ遺跡は、昭和54年に県教育委員会により調査が行われており、約5,000点にものぼる貝殻文土器片が検出されている。縄文時代中期のものとしては、本道端遺跡のほか上ノ山遺跡の第１次、第３次調査で竪穴住居跡、円筒上層ｅ式土器が出土している。桜殿遺跡では組石石棺状の遺構が確認されている。平安時代では、餌釣遺跡、大岱遺跡、平安末から中世以降のものでは、まず犀川流域の大日堂前遺跡があげられる。同遺跡は、縄文時代中期～晩期に営なまれた複合遺跡であるが、当期においては粘土紐巻上げ痕や輪積み痕を明瞭に残した土師器や底部外面に砂粒が付着した土師器が出土している点が注目される。

今回調査された横沢遺跡の竪穴住居跡からも同様の土師器が出土しており、両遺跡の関係について興味の持たれるところである。大日堂前遺跡の北西側、独鈷集落の東側の微高地には、浅利氏の本城であったとされる十狐城が位置する。十狐城から見て犀川を隔てた南の段丘上には中野城と中野八幡台館を望むことができる。犀川をもう少し下ると、真館と浅利勝頼の築城とされる長岡城が右岸段丘上に見ることができる。真館は、大規模農道（現国道282号）の整



第４図　周辺の遺跡　（Ａ：袖ノ沢遺跡　Ｂ：横沢遺跡）

備に伴い一部が消滅するために緊急調査が行われ、不整方形の竪穴群と掘立角柱列遺構(ママ)等が検出されている。引欠川流域では、上流から細越館（工場用地の整地作業のため消滅）、張り出し出入口を有する竪穴、柱穴列、焼土遺構等が検出された谷地中館、そして笹館城があげられる。

米代川流域では、昭和62年度に県教育委員会により調査が行われた山王岱遺跡をその一部に含む餌釣館がまずあげられる。調査では、火葬後そのまま遺体が埋葬されたと思われる土壙3基を含む7基の土壙と、空堀3条が検出されている。さらに米代川を遡ると山館、十二所城、葛原館などが段丘上に連なっている。

第1表　味　噌　内　周　辺　の　遺　跡

遺　跡　名	遺跡の種類	時　代	遺　構・遺　物
(1)萩の台遺跡	包含地	縄文中期	
(2)池内A遺跡		平安	住居跡、土師器
(3)池内B遺跡	包含地	縄文前・中・後期	円筒土器
(4)餌釣館(山王岱遺跡)	館跡	中世	空堀、火葬墓、井戸など
(5)餌釣遺跡	散布地	縄文中期、平安	
(6)山館	城館跡	中世	土師器、中世陶器、磁器片
(7)上ノ山遺跡(第1次)	集落跡	縄文前・中期	住居跡
(8)上ノ山遺跡(第2次)	集落跡	縄文晩期	住居跡
(9)上ノ山遺跡(第3次)	集落跡	縄文中・晩期	住居跡、フラスコ状土坑
(10)上ノ山Ⅰ遺跡	集落跡・捨て場	縄文前・晩期	住居跡、フラスコ状土坑、円筒土器
(11)上ノ山Ⅱ遺跡		縄文後・晩期	住居跡、土坑
(12)山館遺跡			
(13)市川遺跡	集落跡	中世	
(14)本道端遺跡	集落跡	縄文前・中期	縄文中期末の住居跡19軒、縄文前～中期の包含層、集石遺構、その他土坑、地床炉
(15)兎沢遺跡	散布地	縄文後期	
(16)竜毛岱遺跡	散布地	縄文中・後期、中世	
(17)桜殿遺跡	包含地	縄文中期	組石石棺状の遺構
(18)野沢岱A遺跡	包含地	縄文中・後期	
(19)野沢岱B遺跡	包含地	縄文、中世	
(20)野沢岱C遺跡	包含地		貝殻条痕文土器
(21)野沢岱D遺跡	包含地	縄文前期	
(22)冷水山根遺跡	包含地	縄文前期	
(23)下聖遺跡	包含地	縄文前期	
(24)横沢遺跡	包含地	縄文前期	
(25)山田堤遺跡		時期不明	
(26)沢口遺跡		縄文後期	
(27)鳶ケ長根Ⅰ遺跡			
(28)鳶ケ長根Ⅱ遺跡		縄文晩期	土坑7基
(29)鳶ケ長根Ⅲ遺跡		縄文晩期	住居跡6、土坑33基
(30)鳶ケ長根Ⅳ遺跡		縄文早・後期、弥生	住居跡(後期)1、土坑10、埋甕4、貝殻文土器片5,000点 天王山式に比定される弥生土器片300点
(31)大滝古館			
(32)萩峠A遺跡	散布地	縄文前期	
(33)萩峠B遺跡		縄文後期、中世	縄文住居跡10、土坑20、建物跡2

遺跡名	遺跡の種類	時代	遺構・遺物
(34)軽井沢館	館跡		
(35)軽井沢新館	館跡		
(36)館の上遺跡	散布地	不明	
(37)十二所城	館跡	中世	
(38)別所館	館跡？	中世	
(39)葛原館	館跡	中世	
(40)古館	散布地		土師器
(41)竹林遺跡	散布地	縄文前・中期、その他不明	
(42)根小屋遺跡	散布地		
(43)漆畑遺跡	散布地	縄文前・中期	
(44)柳堆遺跡		縄文前・中期	
(45)新田館	館跡	平安末～鎌倉	
(46)長岡城	館跡		
(47)真館	館跡	中世	
(48)大岱遺跡	散布地	縄文前期、平安	
(49)宿内中岱遺跡	包含地	縄文前期、後期	
(50)味噌内遺跡		縄文後期	配石遺構
(51)珠数掛遺跡	包含地	縄文晩期	
(52)十狐城	館跡	中世	
(53)大日堂前遺跡	住居跡	縄文中・後・晩期 中世(平安末～鎌倉)	縄文住居跡、平安終末～鎌倉時代住居跡
(54)独鈷遺跡	包含地	縄文中期	
(55)楽森遺跡	包含地	縄文後期	
(56)中野城	館跡	中世	
(57)中野八幡台館	館跡	中世	
(58)千年岱遺跡	包含地	縄文前期・中期	
(59)雪沢口遺跡	包含地	縄文後期	環状組石
(60)安間口遺跡	包含地	縄文後期	土偶
(61)大披館	館跡		
(62)本宮Ⅰ遺跡・本宮館	館跡	縄文中期、中世	土師器、須恵器、珠洲系陶器、中世陶器片
(63)本宮Ⅱ遺跡		縄文前・中期	
(64)太子内館	館跡	中世	
(65)薬師袋遺跡	包含地		土師器片、須恵器片
(66)杉沢館	館跡	中世	
(67)前田館	館跡	中世	住居跡、掘立柱建物跡、土師器、珠洲系手摺鉢、黒漆塗木製くりぬき皿など
(68)中台遺跡		縄文中期	
(69)五輪台Ⅰ遺跡		縄文晩期	
(70)五輪台Ⅱ遺跡		縄文晩期	
(71)八木橋場	館跡	中世	
(72)一通遺跡	包含地	縄文晩期	
(73)畑沢遺跡	包含地	〃	
(74)白狐沢遺跡		〃	
(75)寺崎Ⅰ遺跡		〃	
(76)寺崎Ⅱ遺跡		〃	
(77)二ツ森遺跡		〃	
(78)片貝遺跡		〃	
(79)笹館城	館跡	中世	
(80)細越遺跡	館跡	中世	
(81)谷地中館	館跡	中世(平安最終末～鎌倉？)	土師器、須恵器、珠洲系陶器
(82)小堤遺跡	包含地	縄文前期	
(83)長内沢遺跡	包含地	縄文前期	
(84)ケラキ森塚	一里塚		

そで　の　さわ　い　せき

袖ノ沢遺跡

遺跡略号　２ＳＳ

所在地　秋田県北秋田郡比内町宿内袖ノ沢67－３　外

調査期間　昭和62年５月６日～５月30日

調査面積　６１０㎡

調査担当者　桜田　隆

第1章　発掘調査の概要

第1節　調査の方法

1　調査区の設定

昭和61年5月15日、16日の2日間にわたり、試掘調査を実施した結果、北秋田農林事務所が打設した道路中心杭№41＋10～№44＋10の間の範囲が調査対象区域となった。未伐採の雑木、伐採木の根、ススキの株と共に表土を重機で除去後、路線の西側に打設されている側杭№42と№44を結ぶ直線に平行するように東側に約1m離して基準線を設定した。側杭№44の近くの基準線上に任意の基準点をとり、直交線を設定し、調査対象区域に4m×4mの方眼（グリッド）をつくるように杭を打設した。グリッド杭打設後、グリッド呼称を（X・Y）の方法で表示する関係から、基準交点（MA. 50）を決定し、縦軸方向（Y軸）に2桁のアラビア数字（43～63）、横軸方向（X軸）に2文字のアルファベット（LT～MC）を付し、両者の組み合せでグリッド名としているが、各グリッドは南東隅の杭の（X・Y）で表示している。グリッドY軸はN－28°30′－Wを計測する。

2　発掘調査方法

前年度の試掘調査で竪穴住居跡と思われる遺構が検出されていることから、遺物の出土状況をよく観察し、それが竪穴住居構築時の遺物（構築材）に転用か、住居の廃棄とともに廃棄された遺物か、住居廃棄後に投棄された遺物かを判断し、「共伴関係」を把握するよう努める。

遺構の実測は遣り方測量とし、実測の縮尺は、竪穴住居跡、土坑、溝状遺構等はそれらの土層断面実測も含め1/20とし、かまどは1/10とした。遺物の取り上げ方法は、その出土位置等を平面図にレベル、層位、種類（器種、部位）を記録して収納した。

第2節　調査経過

5月6日に埋蔵文化財センターから発掘器材を搬入して開始したが、作業員の確保が困難なため、表土層の除去は重機に頼らざるを得ず、5月7日から9日までの3日間、バックホーにより小径の雑木、伐採木残根、表土を除去し、4トン積みダンプトラックで約300m離れた排土地まで運搬した。5月13日にプラン確認作業と並行して、グリッド杭の打設を行った。方形の竪穴住居跡4軒（SI01～SI04）と溝状土坑1基（SKT01）、土坑1基（SK01）、多数の柱穴様土坑のプランを検出した。5月14日にプラン確認状況の写真撮影後、竪穴住居跡2軒（SI03、04）の掘り下げを開始した。SI03竪穴住居跡の東側壁には2基のかまどが構築されて

いるが、わずかに残る状況のため新・旧関係は不明であった。前年度北西側にある横沢遺跡の試掘調査を担当した田村栄氏が来跡した。５月15日に竪穴住居跡２軒（ＳＩ01、02）の掘り下げを開始したが、ＳＩ01竪穴住居跡には、重複している竪穴住居跡があることが判明した。ＳＩ05と名を付したがＳＩ05のかまどと思われる焼土の堆積部分を削平して、ＳＩ01の床面がつくられていることから、ＳＩ05よりもＳＩ01が新しい。調査区の略西側（MCライン）で土層堆積状況を観察したところ、竪穴住居跡のプランが現地表下15～20㎝で確認できることがわかった。竪穴住居跡は表土と同じ黒褐色土を黄橙色地山面まで掘り込んでつくられており、白色～黄橙色の浮石粒塊と黄橙色の地山粒塊が多量に混入する黒褐色～暗褐色土を埋土としていたため、バックホーによる表土除去時には「攪乱」と判断し、掘り下げてしまったので住居壁面の大部分を削平してしまった。５月18日には、柱穴様土坑群を半截して土層堆積状況を観察したが、柱痕等全く分層出来ないため完掘した。竪穴住居跡は、柱穴、壁溝の精査後、土層堆積状況を実測図化した。５月22日には、竪穴住居跡の平面図の作成を開始した。５月25日には、竪穴住居跡かまどの微細実測を開始した。土坑（SK01）と溝状土坑（SKT01）の掘り下げを開始した。５月28日には土坑（SK01）と溝状土坑（SKT01）の実測を完了した。５月29日には、竪穴住居跡の掘り込み面が確認できるＳＩ01、03の掘り込み断面を実測、図化した。遺構の完掘状況、遺跡全景の写真撮影を行った。５月30日に実測図面の点検と補足を行い、調査を終了する。

第２章　調査の記録

第１節　遺跡の土層

本遺跡は、杉林となっていたが戦後の一時期畑地として耕作していたと伝えられている通り表土は軟質で畑の「うね」がそのまま残っていた。堆積土が厚く良好な状態で残っているＳＩ01とＳＩ03の両竪穴住居跡付近の堆積状況を観察すると、表土（旧耕作土も含む）も含め地山面直上まで５層に分層することが可能である。現地表面から１層：15～20㎝の層厚をもつ旧耕作土で黒色～黒褐色を呈する。２層：３～８㎝の層厚をもち、大湯浮石が多量に混入し褐灰色を呈する層でザラザラしており粘性がほとんどない。部分的に堆積するのみ。３層：12～30㎝の層厚をもち黒褐色を呈する。４層：３層を細分した感じであるが、10～20㎝の層厚をもち３層より褐色味のある黒褐色を呈する。５層：10～20㎝の層厚をもち、下位の地山（黄橙色粘質火山灰土）の漸移層である。風化してボロボロしている。２層は部分的に堆積が確認されるにすぎないが、十和田火山起源の降下火山灰であり、遺構の年代推定の指標となる層である。

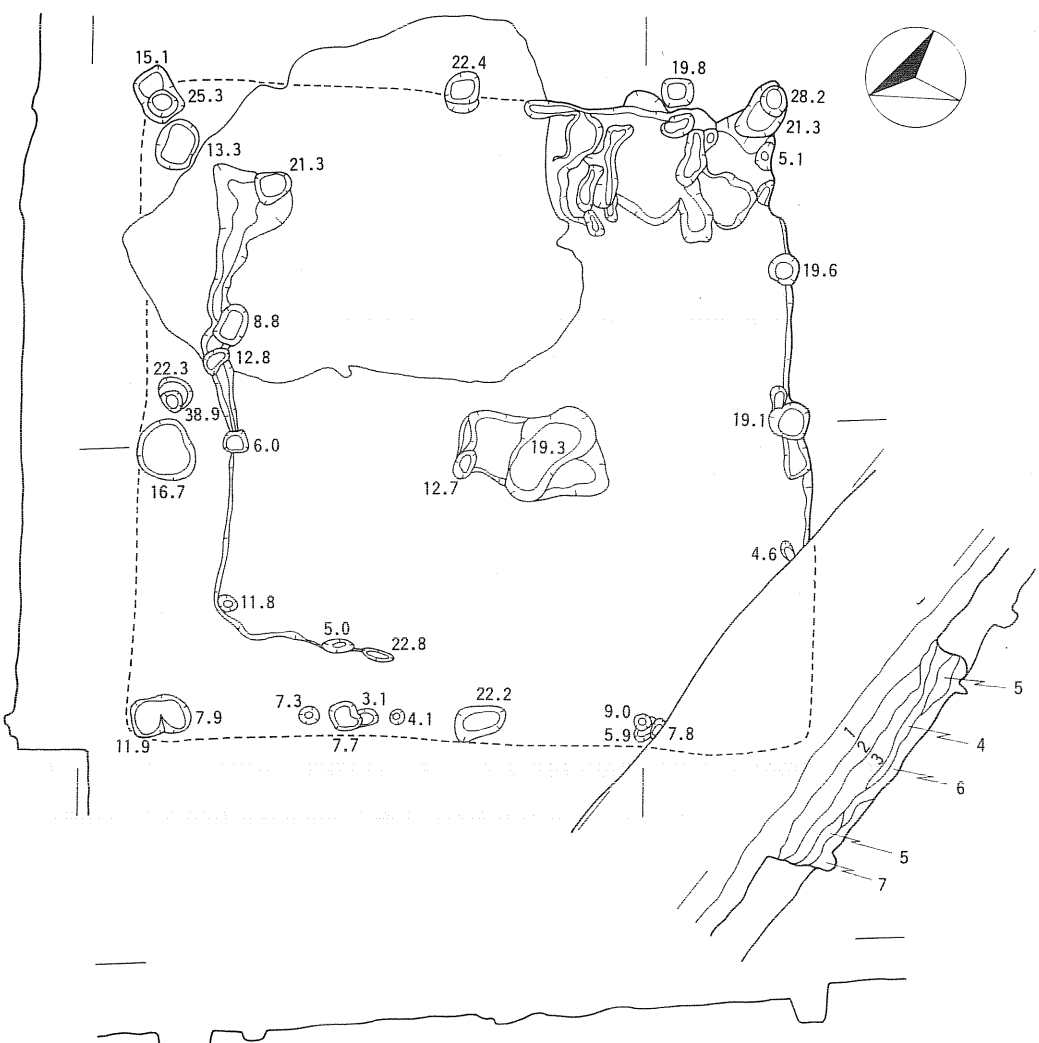
第２節　検出遺構と遺物

本遺跡では、遺構として古代の竪穴住居跡５軒と柱穴様土坑多数、時期不明の土坑１基、溝状土坑１基が、遺物として、古代の土師器、ふいご羽口片が出土した。以下これらの遺構と遺物について説明する。（付図）

１　竪穴住居跡

(1)　ＳＩ０１竪穴住居跡（第５図～第７図）

MA52、MB52、53、MC52、53グリッドに検出されたが、表土除去時に黒褐色土中に存在する壁体の大部分を削平してしまったため北東側と北西側の壁面を欠失する。西隅部が調査区域外に残



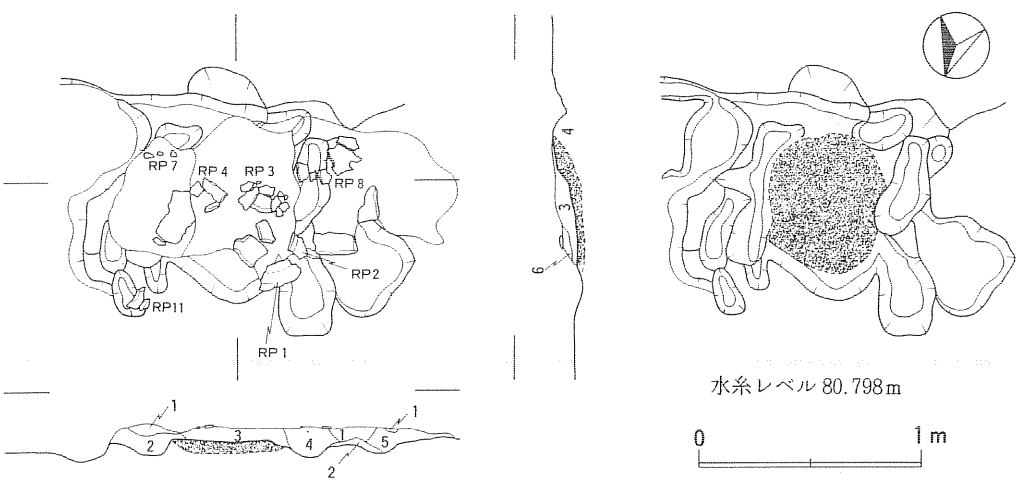
水糸レベル 81.000m　（土層図のみ 81.200m）

0　2m

第５図　ＳＩ01竪穴住居跡実測図

ったことから住居掘り込み面が遺跡標準層第３層黒褐色土上面であることがわかった。本住居跡は、東隅部側でSI05竪穴住居跡と重複しているが、SI05竪穴住居跡埋土中に貼床していることから、本住居跡の方が新しい。壁面を欠失してしまった北東側と北西側は、柱穴位置から、壁長を推定したが、北東側510㎝、北西側534㎝、南東側500㎝、南西側486㎝の略方形を呈する。南東側壁の中央から南隅寄りにかまどが付設されており主軸方位はS―68°―Eである。

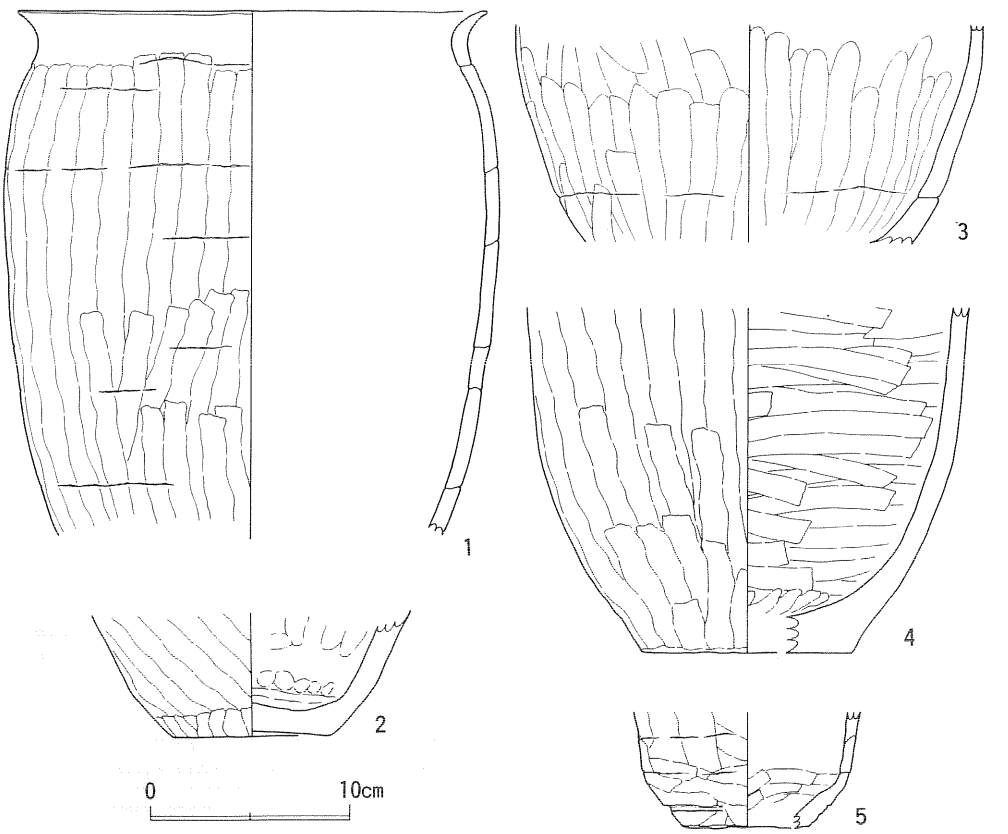
床面は、黄橙色粘質火山灰層をよく踏み固めたものであるが、北東側はSI05竪穴住居跡埋土上に貼床している。北隅部側で2.3～6.1㎝の段差が認められ、その段差に沿って比較的小径の柱穴様土坑が検出された。床面が２段となっていたものか、あるいは拡張等のため段差が生じたものなのか不明である。柱穴は各隅部と各壁面中央部床面に穿たれている。各隅部の柱穴が２個連続する形で検出されているので建て替えが行われた可能性がある。南西隅部に残る埋土の観察では７層に分層できた。１：黒色を呈する表土　２：多量の大湯浮石が霜降り状に混入する灰褐色土　３：多量の大湯浮石が霜降り状に混入し、一部粒塊となっている部位もある灰褐色土で炭化物が混入している　４：２に同じ　５：少量の大湯浮石が混入する黒褐色土　６：地山粒塊を混入する黒褐色土　７：黒褐色土



第６図　ＳＩ01竪穴住居跡かまど実測図

かまどの上半を削平してしまったので、下部構造が残るのみであるが、かまどの両袖部は長円形に掘りくぼめたあと粘質土を充塡、積み上げている。天井部と袖部に使用されたと思われる板状節理の自然石が散見される。かまど部分の構築土と埋土は６層に分層できた。１：明褐灰色粘土　２：地山粒塊が多く混入する黒褐色土　３：シルト質のにぶい橙色土　４：地山粒塊が粗に混入する黒褐色土　５：地山粒塊と炭化物粒が混入する黒褐色土　６：黒褐色土　このうち２・４は袖部構築の際埋め戻し充塡土として使用されたと思われる。火床面は住居床面と同一レベルであり、熱による地山面の赤変が顕著である。遺物はいずれも甕形土師器で住居

床面上から底部破片１点、かまど３層中から破片４個体分（RP１・３・４）、右側袖部粘土中から２個体分（RP２・８）、左側袖部粘質土中から小破片（RP７・11）が出土した。

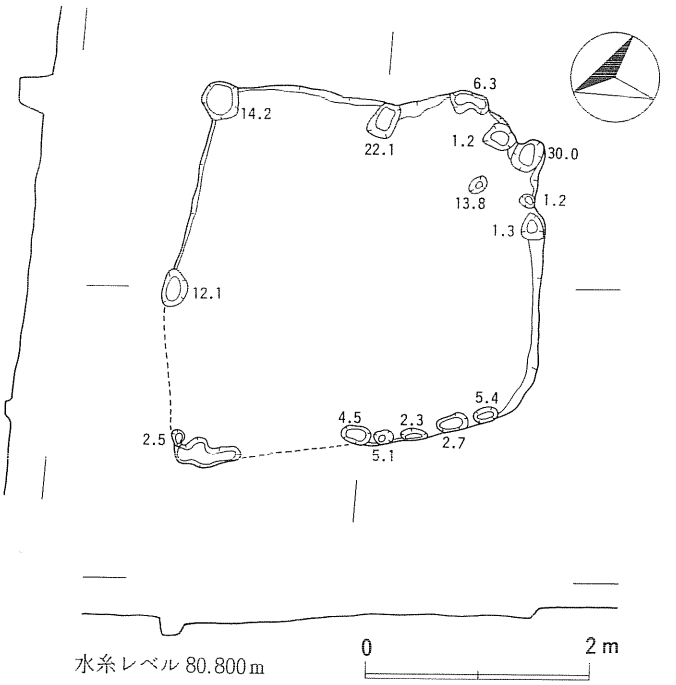


第７図 ＳI01竪穴住居跡出土土器実測図

１（RP4）は底部を欠失し、口径23.6㎝、現高25.5㎝で胴部上半に最大径（26㎝）を有する甕である。外面は箆削りしているが、砂粒を混入する粘土紐の巻上げ痕が認められる。浅黄橙色～橙色を呈する。２（RP3）は外面箆削りした甕の底部である。底面は平滑である。胎土に多量の砂礫を混入し、にぶい橙色を呈する。３（RP1）は多量の砂礫を混入する粘土紐の巻上げ痕が認められる甕の胴部で、外面に箆削り、内面に強い指なでをしている。明褐～褐灰色を呈する。４（RP3）は底部に砂粒の付着する甕の胴部下半である。外面箆削り、内面は箆なでしている。胎土に砂粒を混入し、灰白～にぶい黄橙色を呈するが、外面に赤斑が認められる。５も底面に砂粒が付着し、粘土紐巻上げ痕の認められる甕の底部である。外面箆削り、内面は箆なでしている。焼成良好で、明褐灰～にぶい橙色を呈する。

⑵ ＳＩ０２竪穴住居跡（第８図）

LT51・52、MA51・52のグリッドにまたがり検出された。長軸方位がＳ－65°－Ｅ、壁長は北側344㎝、東側304㎝、南側296㎝、西側327㎝で台形を呈する平面プランをもつ竪穴住居跡であ



第８図　ＳＩ02竪穴住居跡実測図

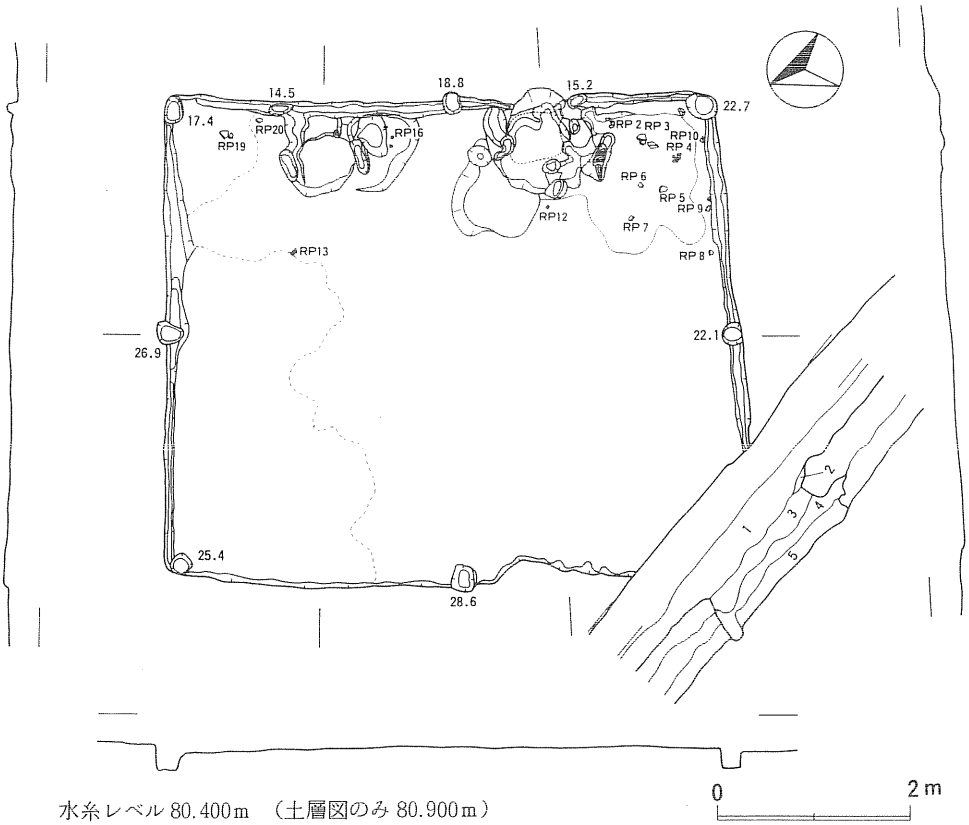
る。南側壁中央からやや南東隅寄りの床面の一部に径約20㎝の薄い焼土堆積が見られたことから、ここにかまどが付設されていた可能性がある。プラン確認面から床面までの深さは北側壁で0～2.7㎝、東側壁で1.9～4.4㎝、南側壁で1.2～9.4㎝、西側壁で0～10.1㎝をはかる。床面は地山面を踏み固めたものであるが、掘り下げ時の凹凸が激しく、凹部には黒褐色土を充塡していた。主柱穴は各壁隅部と中央部に穿たれており、西側壁と東南隅部に副次的な柱穴が穿たれている。遺物は出土しなかった。

(3)　ＳＩ０３竪穴住居跡（第９図～第12図）

ＭＡ55～57、ＭＢ55～57、ＭＣ55・56の各グリッドにまたがり、方形プランを呈し、東側壁に２つのかまどが付設されている竪穴住居跡である。西側隅部は路線外であることと、立木（杉）の根元であるため調査しなかった。主軸方位が、Ｓ―67°―Ｅで壁長は東側560㎝、北側498㎝、西側検出部490㎝、南側検出部364㎝である。西側隅部の土層断面観察では、プラン確認面から床面まで47～60㎝の深さがあるが、土圧のためか壁が内傾（オーバーハング）している。埋土は５層に分層された。

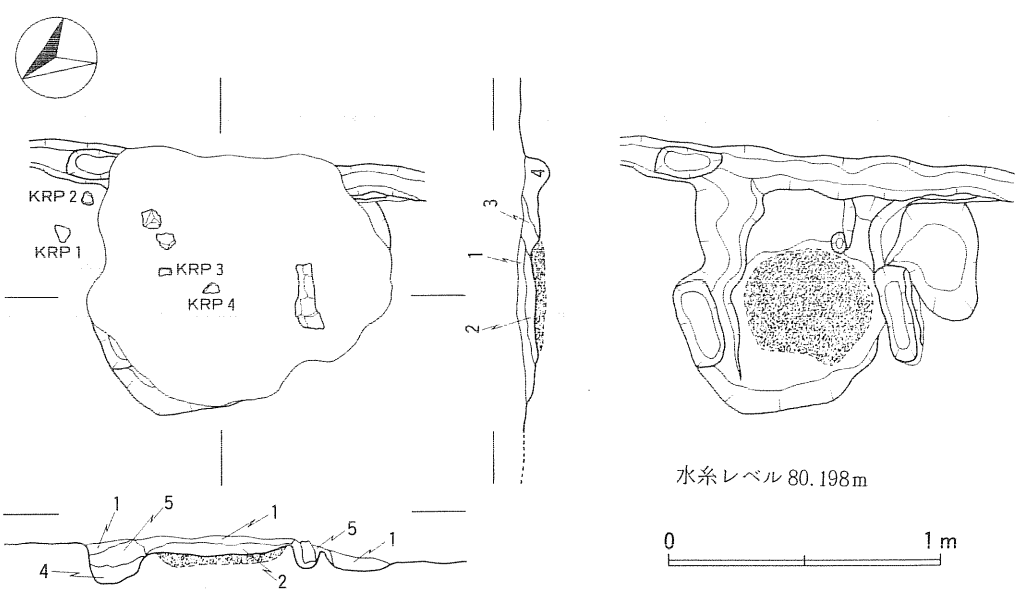
１：黒色～黒褐色の表土　２：多量の大湯浮石を混入しているため、ザラザラして粘性のほとんどない褐灰色土　３：多量の大湯浮石と少量の黄橙色地山塊が混入する黒褐色土　４：大きな黄橙色地山塊を多く混入する黒褐色土。２層の褐灰色土と住居跡の先後関係は、一見住居跡が古いように観察されるが、オーバーハングによる土層の移動によるものであり住居跡の方が新しい。

調査区内のプラン確認面から、床面までの深さは、東側壁で3.1～6.8㎝、北側壁で6.6～8.1㎝、西側壁で3.4～7.9㎝、南側壁で1.5～3.7㎝である。床面は地山面を踏み固めたものであるが、北側壁下方と南側隅部床面は15㎝～20㎝掘り込み、その土を再び埋め戻し（貼床）たもので、他の部分に比べて軟弱である。柱穴は、各壁隅部と各壁中央部に穿たれている。西側壁下を除



水糸レベル 80.400m （土層図のみ 80.900m）

第９図 ＳＩ03竪穴住居跡実測図

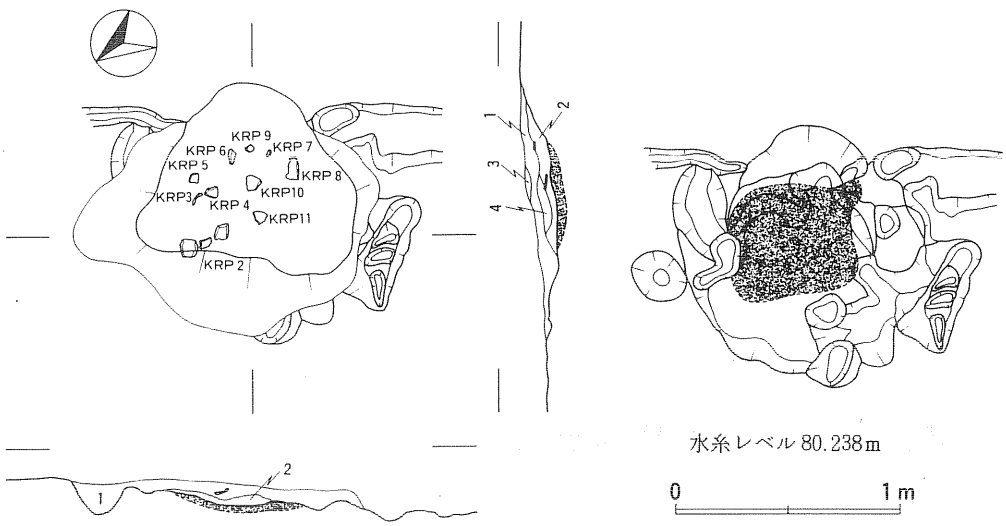


水糸レベル 80.198m

第10図 ＳＩ03竪穴住居跡東側かまど実測図

き、深さ2.0～14.8㎝の壁溝が認められる。２カ所付設されているかまどのうち東側のかまどは、構築時に壁溝を埋めていることから、西側のかまどより新しいと判断された。西側かまどは住居構築時に付設予定部分の床面を掘り込み、両袖部を更に長円形に掘りくぼめている。かまどの部分の構築土と埋土は４層に分層できた。

１：焼土と炭化物粒を混入する黒褐色土、２：焼土と炭化物粒を混入するシルト質のにぶい橙色土、３：灰白色粘土塊、４：粘土塊と焼土を混入するシルト質の橙色土である。

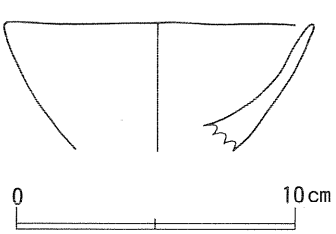


第11図　ＳＩ03竪穴住居跡西側かまど実測図

東側のかまどは、構築予定部分の床面を掘り込んでいるが、壁溝部分とその手前部分は埋め戻してかまどの床面としているのが確認された。両袖部は長円形あるいは溝状に掘り込んでおり、右側の掘り込み部には芯材として使用したと思われる自然石（角礫）を検出した。かまど部分の構築土と埋土は５層に分層できた。

１：焼土と炭化物を混入する黒褐色土　２：焼土を混入するシルト質のにぶい橙色土　３：地山塊を混入する暗褐色土　４：大きな地山塊を混入するにぶい黄褐色土　５：地山塊を混入する灰褐色粘土である。

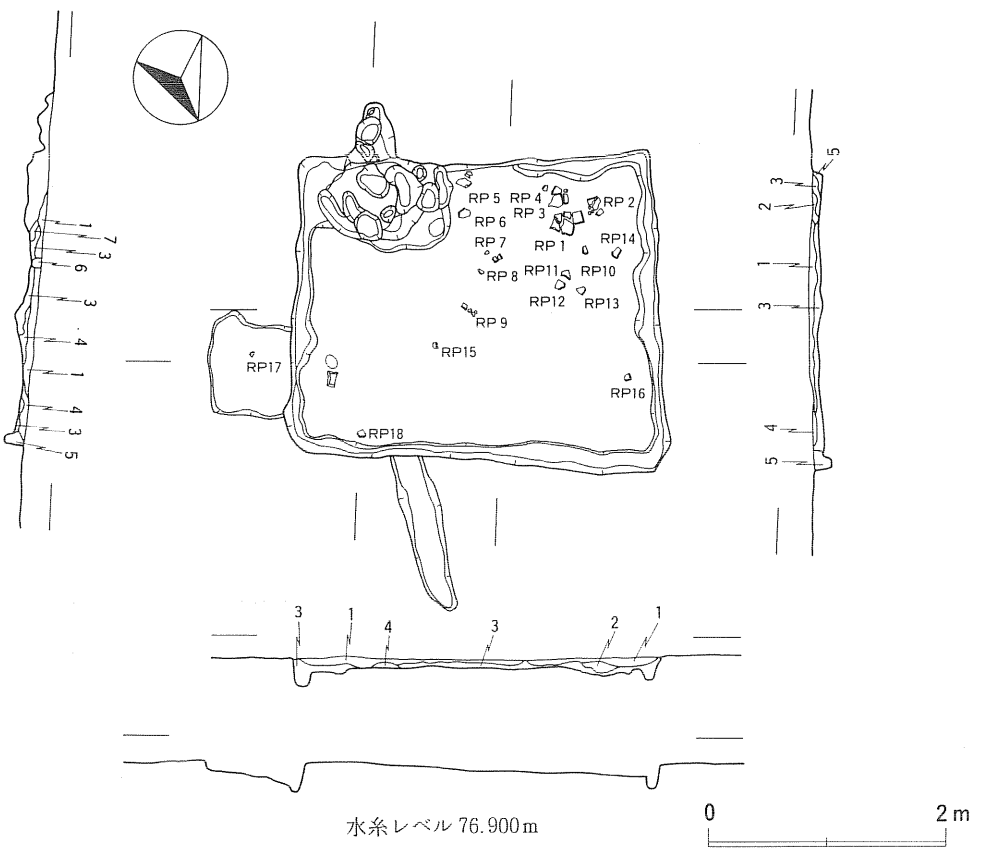
遺物は、床面上と、埋め戻し部分、西側かまど２層中、東側かまど上面から坏形土師器、甕形土師器、鍋形土師器の破片が出土したが、図化できたものは坏1点（西側かまどＫＲＰ３）のみである。推定口径11.2㎝、現高4.6㎝で底部を欠失する。再調整されておらず、両面ともにぶい黄橙色を呈する。鍋は巻上げ痕を有する口縁部小破片である。



第12図　ＳＩ03竪穴住居跡出土土器実測図

(4) ＳＩ０４竪穴住居跡（第13図～第15図）

LT55・56、MA55・56の各グリッドにまたがり検出された。方形プランを呈し、南側壁の南東隅部よりにかまどが付設され、南側壁の北東寄りに方形の張り出し部をもつ竪穴住居跡である。北側壁中央からやや東側に溝状の攪乱がある。主軸方位は、Ｓ―25°―Ｗで壁長は南側300㎝、西側260㎝、北側312㎝、東側250㎝である。プラン確認面から床面までの深さは、南側壁で5.0～11.4㎝、西側壁で2.8～7.1㎝、北側壁で1.6～11.2㎝、東側壁で9.5～12.6㎝をはかる。

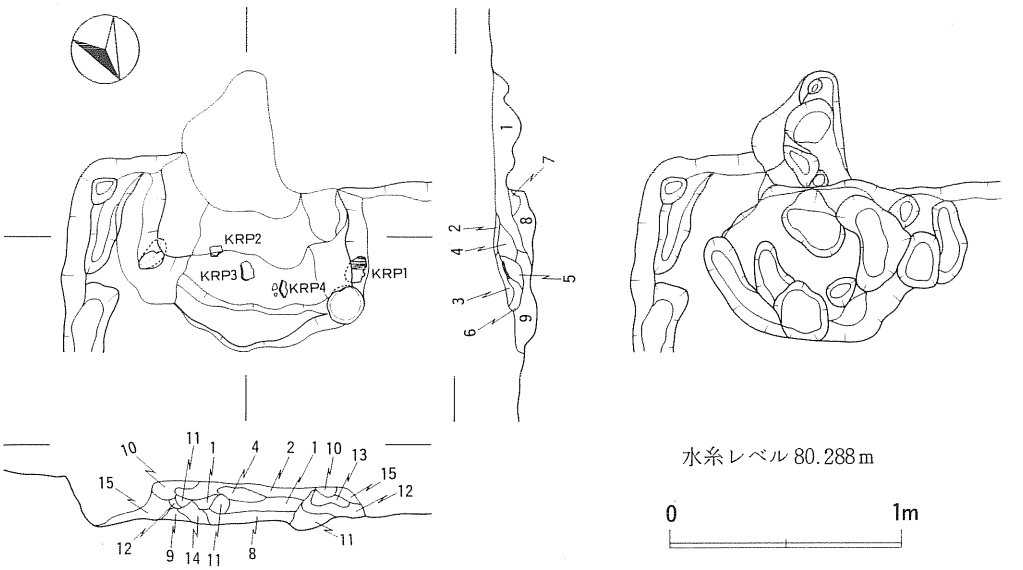


第13図　ＳＩ04竪穴住居跡実測図

床面は、よく踏み固められている。特にかまどの前面がかたい。各壁下には、4.2～18.6㎝の深さの壁溝が巡っているが、柱穴は、住居内には検出できなかった。張り出し部は幅78㎝、奥行66㎝で、住居床面より浅く掘りくぼめられている。埋土は、７層に分層された。

１：大湯浮石粒と砂粒を多く混入する黒色土　２：地山塊を多く混入する黒褐色土　３：地山粒塊を多く混入するシルト質の黒褐色土　４：地山粒を多量に混入する明黄褐色土　５：３より小さい地山粒塊を少量混入するシルト質の黒褐色土　６：攪乱　７：かまどから流れた赤褐色粘土である。南側壁の南東隅部寄りに付設されているかまどは、構築予定部分の底面を掘

りくぼめた後、粘質土で構築している。右袖部は、長円形に掘りくぼめられているのが、左袖部には、対応する掘り込みがない。かまど部分の構築土と埋土は15層に分層できた。

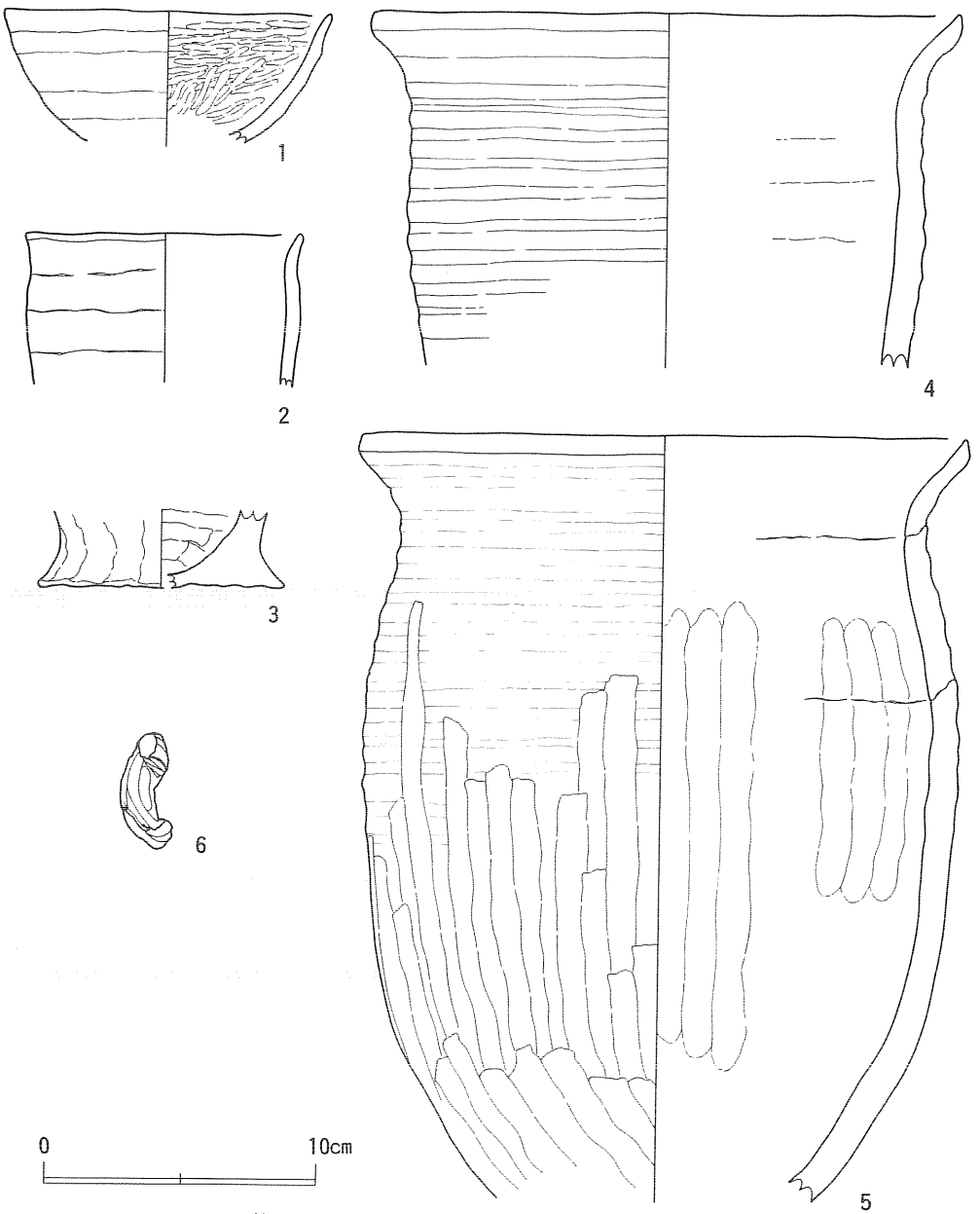


第14図　ＳＩ04竪穴住居跡かまど実測図

１：地山粒塊を混入する黒色土　２：炭化材片と地山粒塊を混入する橙色粘土　３：白色粘土塊と炭化材を混入する橙色粘土　４：シルト質の明褐色粘土　５：塼質化した橙色粘土　６：赤変粘土塊を混入する橙色粘土　７：白色粘土塊を混入する赤灰色土　８：焼土、粘土及び地山塊を混入する暗赤褐色土　９：粘土塊を混入する暗褐色土　10：浅黄色粘土　11：地山塊を混入する黒褐色土　12：粘土塊・地山塊を混入するにぶい褐色土　13：塊状の灰白色粘土　14：赤変粘土塊と地山粒塊を混入する暗褐色土　15：地山粒塊を混入する暗褐色土である。７層と８層は、構築時に、埋め戻しのために使われた可能性がある。遺物は、床面からやや浮き上った状態で出土したものが多い。図化できた６点のうち、１（RP11）は、内面黒色処理された坏形土師器である。推定口径12㎝、現高4.8㎝で底部を欠損しているが、ロクロ上で成形されたものである。外面浅黄橙色を呈する。

２（RP15）は、細砂粒を多く混入し、粘土紐巻げ痕が残る甕形土師器である。にぶい橙色～浅黄橙色を呈する。３（RP７）は、下端が外に大きく張り出す甕形土師器の底部破片である。底外面は指なでされている。灰白色～灰黄褐色を呈する。４（KRP１）は、かまど右袖粘土中から出土した甕形土師器である。外面は、強く横方向になでているので凹凸が激しい。口辺部両面に糊状炭化物が付着している。胎土に砂粒を多量に混入している。浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈する。５（RP１＋３＋４＋12）は、口径22.4㎝、現高23㎝の底部を欠失する甕形土師器である。粘土紐巻上げ後、胴部外面を強く横方向になでたあと、下半を箆削りしている。内面には、

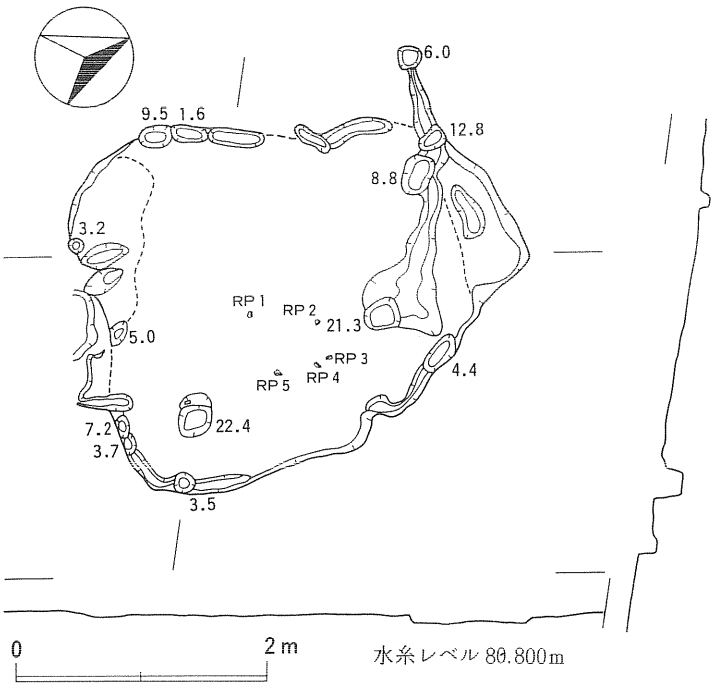
縦方向に指頭の押し引き痕がのこっている。胎土に多量の砂礫を混入している。にぶい橙色を呈する。頸部外面に紐らしい圧痕が1個認められる。6は、床面上から出土した、右撚りの粘土紐焼成品の破断品である。全容、用途は不明である。



第15図　SI04竪穴住居跡出土土器実測図

(5)　ＳＩ０５竪穴住居跡（第16図）

MA52・MB52のグリッドにまたがり、SI01竪穴住居跡と重複して検出した。長軸方位は、S—10°30′—Wで大部分がSI01構築時に削平されているので明確ではないが、壁長は南側 260㎝、



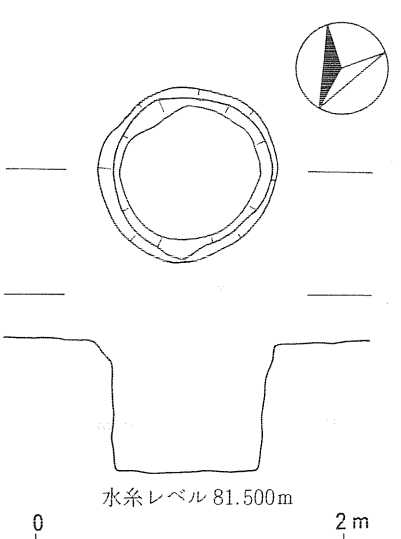
第16図　ＳＩ05竪穴住居跡実測図

西側 284 ㎝、北側 236 ㎝、東側 246 ㎝で不整な台形プランを呈する。床面は踏み固められている。南東隅部と西側壁下に壁溝がみられる。柱穴様土坑をいくつか検出したが、主柱穴かどうか明確ではない。南側壁の中央から、南西隅よりの床面に赤変部分が認められたが、かまどの火床かどうか不明である。遺物は、甕形土師器の胴部小破片が出土したにとどまる。

２　土坑・溝状土坑

⑴　ＳＫ０１土坑（第17図）

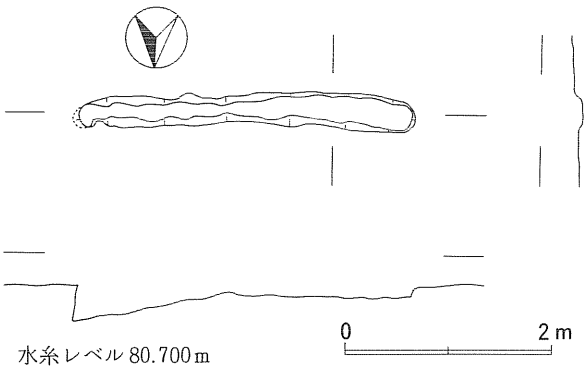
MC44・45のグリッドにまたがり検出された土坑である。前年度の工事施工の際、排水路が掘られた場所の下方にプランが確認されたので、当初排水路工事に伴うものと考えていたため、土層断面図を作成せずに掘り上げてしまった。長軸方位Ｎ－27°－Ｅ、開口部長径117㎝、短径90㎝、下底長径90㎝、短径80㎝、深さ80～85㎝の土坑である。遺物は出土しなかった。



第17図　SK01土坑実測図

⑵　ＳＫＴ０１溝状土坑（第18図）

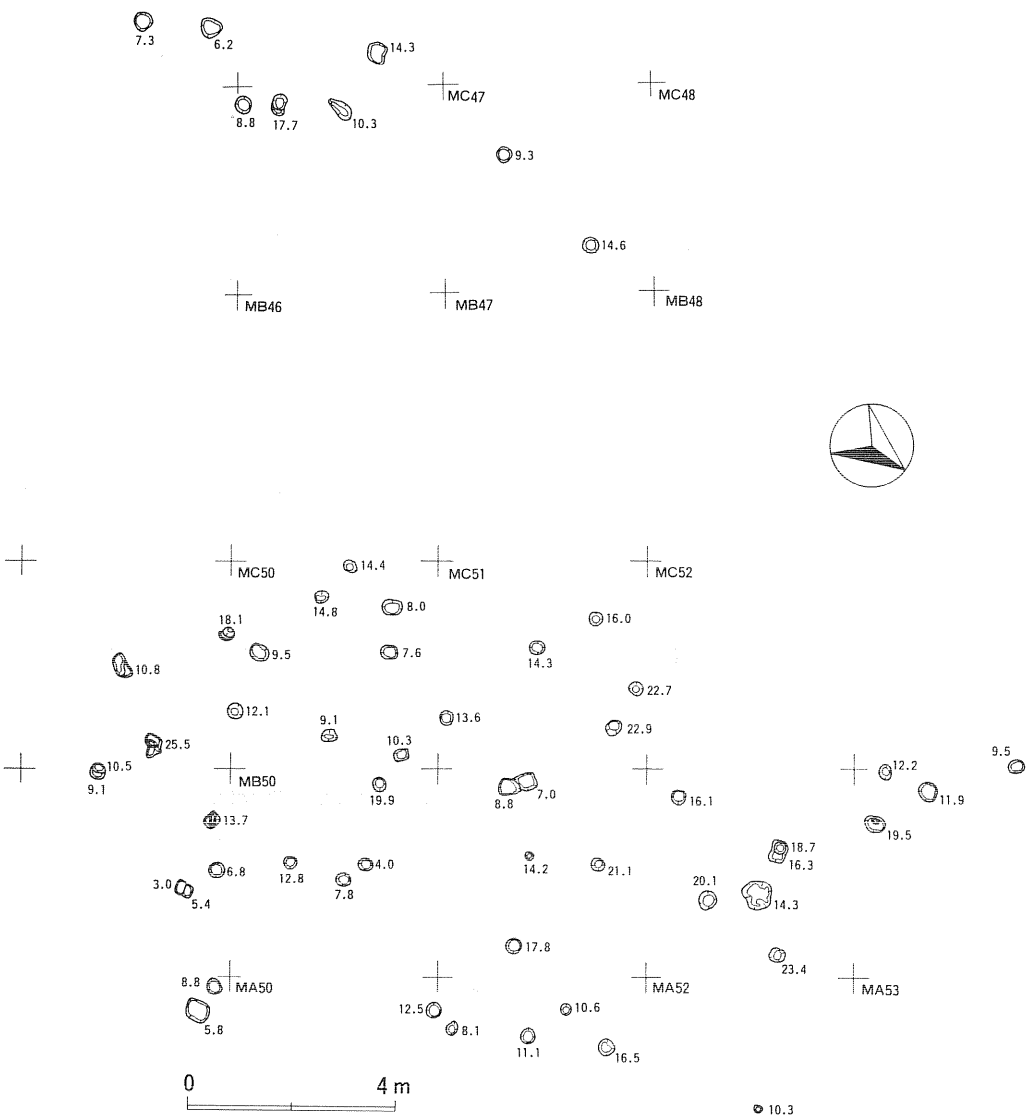
LS52、LT52・53にまたがり、長軸方位Ｎ－85.5°－Ｗ、長さ328㎝、幅23～26㎝をはかり、プラン確認面から坑底までは2.8～32.1㎝である。遺物は出土しなかった。



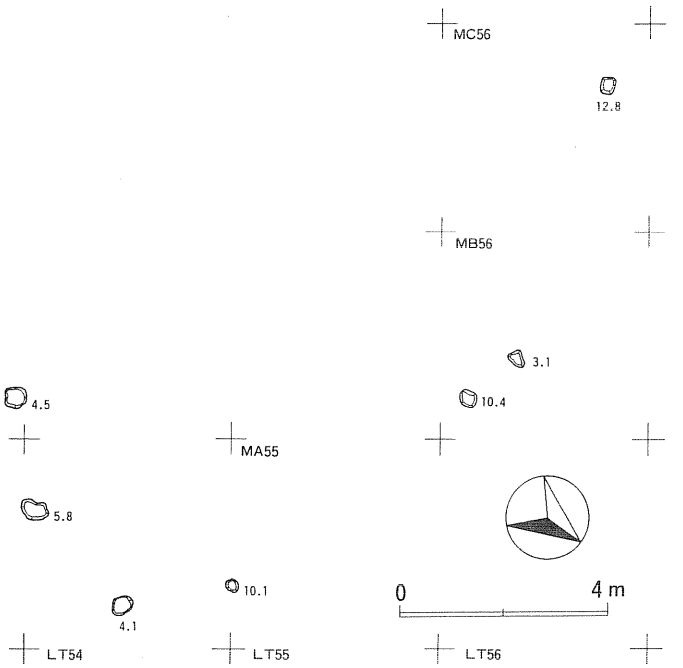
第18図　SKT01溝状土坑実測図

3　柱穴様土坑群（第19図・第20図）

45ライン～57ラインまでの間で竪穴住居跡等の遺構外に柱穴様土坑を63カ所検出したが、掘立柱建物跡等の遺構を推定復原するに至らなかった。



第19図　柱穴様土坑群実測図　(1)



第20図　柱穴様土坑実測図　(2)

第３章　ま　と　め

袖ノ沢遺跡の調査では、既述のとおり、表土除去の際に、遺構上部を削平してしまうミスを犯したが、古代の竪穴住居跡５軒、時代・時期不明の土坑１基、溝状土坑１基、柱穴様土坑多数を検出・精査した。５軒の竪穴住居跡のうちSI01とSI03は、他の３軒に比べて規模が大きく、各壁下に壁溝を巡らし、柱穴も四隅部と各壁中央部に配置され、かまどの付設される壁が南東側で、その当初位置が南隅部寄りである。他方、SI02・04・05の３軒は、SI05を除いて柱穴を検出できないこと、SI04では、かまど付設が南側壁の南東隅部寄りの位置にあり、大きな違いが認められる。

遺構配置図（付図）で竪穴住居跡の配置をみると、重複関係にあるSI05を除くと、SI01と02、SI03と04が対をなすとみることも出来るし、規模の大・小が時間差を反映しているとみることもできる。いずれにしても路線内という限定された範囲での調査のため明確にできない。SI01・03・04の３軒の竪穴住居跡埋土には、十和田火山起源の降下火山灰である大湯浮石（広域テフラ名では十和田ａ）が霜降り状に混入しており、火山灰との先後関係が問題となってくる。SI03の土層断面観察では大湯浮石の堆積層を掘り込んでいることが確認されていることから、

竪穴住居構築時に掘り上げられた大湯浮石が、住居廃棄後に他の掘り上げた土と一緒に流入したものと判断される。

古代の竪穴住居跡の出入口が県内で検出され、公表されているのは山本郡八森町土井遺跡で検出されたSI002・003・005の3軒の竪穴住居跡のみである。(註1) 土井遺跡例は、いずれもかまどに隣接して階段をもち、外部に張り出す出入口である。プラン確認面から床面までの深さにかかわらず階段をつくる土井遺跡例に比して、本遺跡SI02竪穴住居跡例は若干粗末なつくりのように見られるが、米代川上・中流域では初見であり注目される。このような方形の張り出し部は、ともすると出入口以外の用途を想定しかねないが、「住い」の必須条件である出入口との想定も積極的に加えるべきであろう。

遺物は、僅少であるため分類等は行い得ないが、SI04から出土した土器群は鹿角市一本杉遺跡第13号竪穴住居跡出土土器群に比定できる。(註2)

次に、SI05竪穴住居跡から出土した鍋形土師器についてふれてみたい。8世紀後半に甑形土師器が消滅したあと、粘土紐の巻上げ痕が残る甕形土師器と軌を一にして、津軽海峡以南・岩手県北部北上川上流域と米代川流域以北の地域に出現し、形状と整形技法に変遷を辿りながら羽釜・内耳土器の出現まで存在する。この甑形から鍋形への変化を、強飯食から姫飯食への変化、かまどにおける熱効率に対する器形変化等が考えられる。今後更に考究しなければならない器種の1つである。

註1　秋田県教育委員会　『土井遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第111集　1984（昭和59年）

註2　a　秋田県教育委員会　「一本杉遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』　秋田県文化財調査報告書第99集　1983（昭和58年）

b　桜田　隆　「鹿角盆地に於ける古代土器群の様相（Ⅰ）」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号　1987（昭和62年）

横沢遺跡（よこさわいせき）

遺跡略号　2ＹＳ

所在地　秋田県北秋田郡比内町扇田字横沢３　外

調査期間　昭和62年５月６日～６月30日

調査面積　1,390㎡

調査担当者　小畑　巌　桜田　隆

第1章　発掘調査の概要

第1節　調査の方法

1　調査区の設定

調査区は、南北に細長く弓なりになった道路予定部分であるため、基準線を路線に沿って設定することになった。任意の仮基準点と基準線を設定し、直交線を求め、調査対象区域に4m×4mの方眼（グリッド）をつくるよう杭を打設した。グリッド杭打設後、グリッド呼称を（X・Y）の方法で表示する関係から基準交点（MA50）を決定し、縦軸方向（Y軸）に2桁のアラビア数字（33～65）、横軸方向（X軸）に2文字のアルファベット（LO～MN）を付し、両者の組み合せでグリッド名としているが、各グリッドは南西隅の杭の（X・Y）で表示している。グリッドY軸はN－37°－Wを計測する。

2　発掘調査方法

トレンチによる試掘調査の結果、調査区内は、畑地として利用されほぼ地山面まで耕作が及んでいるため黒土中での遺構の確認は期待できないと判断された。また、黒土中に包含される遺物量も僅少であったため、バックホーにより耕作土の除去を行うこととした。

遺構の調査は、四分法または二分法に依った。ただし、遺構の状況によっては、断面観察用のベルトをその他に任意に設定するものとした。なお、本遺跡ではいわゆるフラスコ状土坑を検出しているが、これらについては、作業の安全と能率を重視して二分法によって片側を精査し、平面図を作成した段階で、底部から20cmの高さまで大きく掘り下げてしまうこととした。

調査の記録は、図面による記録と写真による記録の2つの方法に依った。前者においては、断面図、遺物出土状況図、平面図を作成することにして、遺構については縮尺1/20、遺構配地図については1/200の縮尺とした。ただし前述の縮尺で不都合な場合には、任意とした。実測方法としては水糸で1m×1mの方眼を作っておこなう支距法を原則としたが、必要に応じて平板を使用することとした。また、検出遺構数が多くなったことから、一部の遺構については写真測量を導入した。

写真による記録については、調査の過程をできるだけ順を追って記録することとし、遺構の断面、遺物出土状況、完掘の状態など記録にとどめることにした。

第2節　調査経過

5月6日から調査を開始した。調査区の一部は、人力による表土除去を行い、残りの区域を

のり切りバケットをつけたバックホーで表土除去を行った。翌日には、グリッド杭の打設作業に着手し、プラン確認作業を進めた。プラン確認作業の結果、平安時代と考えられる方形の竪穴住居跡、縄文時代と考えられる円形の土坑と、時期不明の溝、土坑、竪穴遺構等があることがわかった。遺構プラン検出状況の写真撮影を行い、遺構の調査に着手した。調査区北西端に位置する方形プランの竪穴住居跡（SI01）とその周辺にある土坑から調査が行われた。５月11日北鹿新聞記者来跡取材。快晴の日が続き、土の乾燥を防ぐため、調査終了時に遺構にシートの被覆をすることにした。５月12日レベル原点を移動し、SI01の土層断面図の作成に着手。５月14日県文化財保護指導員の田村栄氏来跡。土坑と思われた円形プランの遺構のうち、これまで着手したもののほとんどがフラスコ状土坑であることが判明。残りの同種の遺構もフラスコ状土坑と推定されたため、調査方法を再検討した。５月19日調査区を南北に分断する「くぼみ」の調査に着手し、SD02とした。SI02、SI03の土層観察用ベルトを除去。SD02については、当初比較的浅い溝と思われていたところ、調査を進めるにしたがい、幅３ｍ最深部４ｍの規模を有する空堀であることが判明した。

天候に恵まれ、調査は大いに進展した。

６月１日SKI03の床面精査を行った。貯蔵穴と思われる方形の掘り込みと、壁溝を一部検出したのみで、柱穴、カマド等は検出されなかった。

６月４日扇田小学校６学年児童80名が見学のため遺跡を訪れた。LQ53グリッド杭を中心とするあたりで、縄文時代の竪穴住居跡が新たに検出され、SI14とする。さらに、フラスコ状土坑８基、竪穴遺構１基を検出した。

６月10日から空中写真による遺構実測を平安時代の竪穴住居跡で実施する。

６月12日LQ57グリッド黒色中に貝殻文を施文した尖底土器の底部破片が出土した。周囲を精査したものの、他の破片、関連する遺構は検出されなかった。

６月16日住居跡カマドの実測に着手する。フラスコ状土坑の土層断面図、平面図の作成も続行。６月24日方形の土坑SK06埋土中に粉状火山灰が２～３㎝の厚さで堆積しているのが観察された。白頭山起源のいわゆる苫小牧火山灰と推測された。

遺構の完掘写真、遺跡の全景写真等を撮影して、６月30日に調査を終了した。

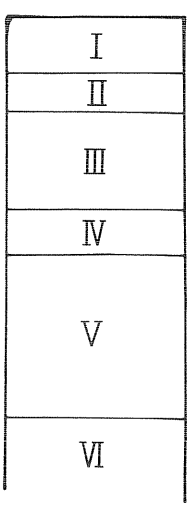
第２章　調 査 の 記 録

第１節　遺跡の土層

本遺跡の基本的な層序としては、上位から耕作土、地山の漸移層、地山層に大別される。地山層は黄色又は黄橙色の軽石を含むシラスが主体をなす層と、灰白色又は青白色をなす粘土層に分けることができる。

この地域に特徴的な大湯浮石が、一部遺構のくぼみに堆積しているのが確認されるだけであった。また、白頭山起源のいわゆる苫小牧火山灰が、方形の土坑の覆土中で確認されたもののそれ以外の地点では検出されなかった。

以下に掲げる土層模式図は、フラスコ状土坑を断面観察のため大きく半截した際に、観察、記録したものである。



Ⅰ層 耕　作　土

Ⅱ層 黒褐色土層　粒子の粗い黄褐色土粒混入（地山漸移層）

Ⅲ層 明黄褐色土層　多量のシラス土、軽石を含む硬質土層

Ⅳ層 黄橙色土層　シラスブロック多量に堆積

Ⅴ層 灰白色粘土層

Ⅵ層 浅黄色土層　軽石、黒褐色土混入

第21図　基本土層図

第２節　検出遺構と遺物

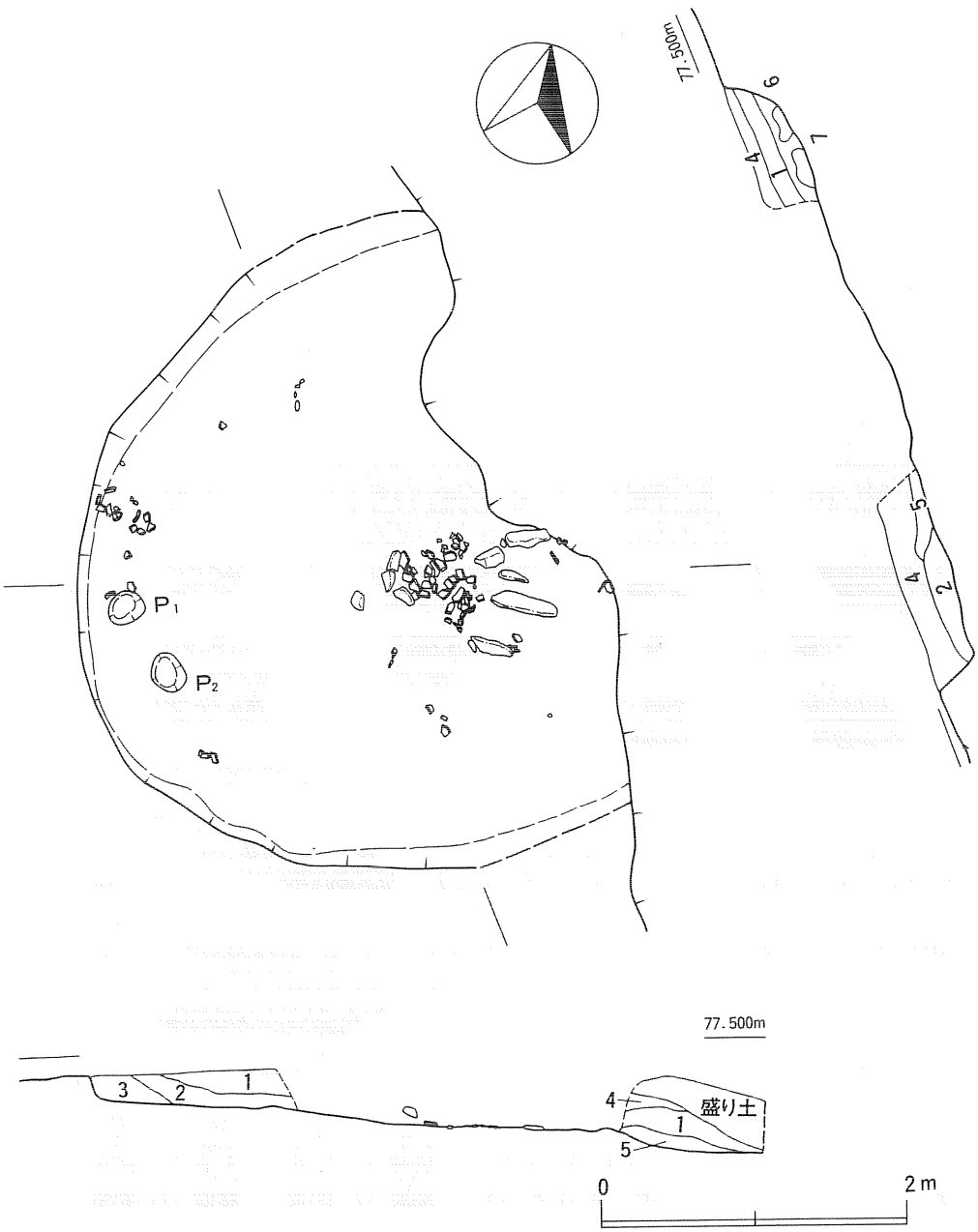
１　縄文時代

縄文時代の遺構として竪穴住居跡１軒、竪穴遺構１基、土坑６基、フラスコ状土坑25基が検出されている。また遺物は、縄文時代の所産である前記遺構の他に平安時代の遺構中から出土したものもある。それらについては、遺構外の出土遺物として把えることとした。

(1)　竪穴住居跡

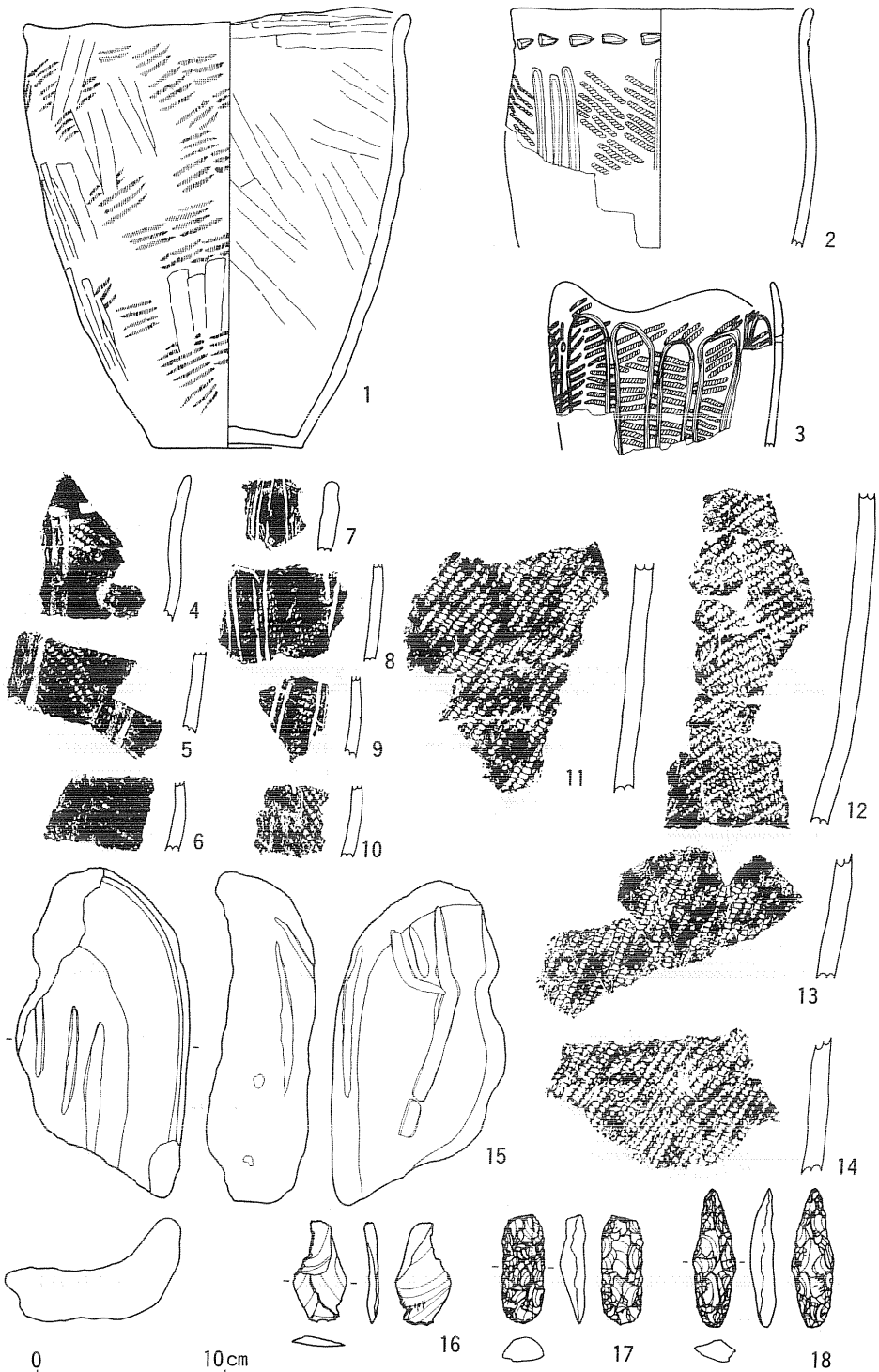
ＳＩ１４竪穴住居跡（第22図・第23図・図版４）

本遺構はLQ52・53、LP52・53グリッドにまたがって検出された。北東側は、台地下を通っている農道開削の際に半分近くが失われている。杉の根による攪乱が多い台地縁辺部の遺構確認のためトレンチ調査した際、住居の壁を掘り抜き、石囲炉が検出されて初めて存在が確認された。



ＳＩ 14竪穴住居跡土層註記
１：黒色土　黄褐色土粒少量混入　　２：黒褐色土　微細黄褐色土粒多量に混入　　３：暗黄褐色土　微細黄褐色土粒、やや大粒の黄褐色土粒混入　　４：黒色土　小軽石粒やや多量に混入　　５：黒色土層　黄褐色土小ブロック少量混入
６：黒褐色土　微細黄褐色土粒、同小ブロック混入　　７：黄褐色土ブロック

第22図　ＳＩ14竪穴住居跡実測図



第23図　ＳＩ14竪穴住居跡出土遺物実測図

平面形は、楕円形と推定される。規模は、推定長軸515㎝、短軸427㎝を測る。地山を20～25㎝掘り込んで床面としている。床面は東側にやや傾斜している。壁溝は検出されなかった。柱穴は、西側の壁際に検出されたが、いずれも浅く、10～15㎝である。それぞれの規模はP_1が径25×20㎝、P_2が径28×22㎝を測る。埋土は、黄褐色土粒と軽石粒を混入する黒色土を主体とする。中央部からやや南東寄りに石囲炉が設置されている。平面形は馬蹄形を呈する。西側にまとまって土器１個体分（RP2…2）が出土したが、出土地点には掘り込み等は確認されなかった。炉の東側は削られており、掘り込み、またはくぼみ等があったものか明確でない。また石囲炉中とその周辺の床面から焼土や熱変化部分は確認できなかった。出土遺物は縄文土器（１～14）と石皿１点（15）、石槍１点（18）、掻器１点（17）、剥片３点（うち１点16）である。１（RP１）は西側の壁際に正立で出土した深鉢である。器高23.4㎝、口径20.6㎝、底径８㎝。無節（Lr）の縄文を施文しているが、箆状工具で内外面をなでている。底部はやや上げ底である。口縁部から胴部上半にかけて煤が付着している。２～６・10は同一個体である。頸部には半截竹管による連続刺突列が、胴部にはLR縄文施文後、沈線が３条１単位で垂下している。３・７～９は同一個体で、LR縄文の上に逆U字状の沈線文が施文されている。11～14は大型の深鉢の破片と思われる。

(2)　竪穴遺構

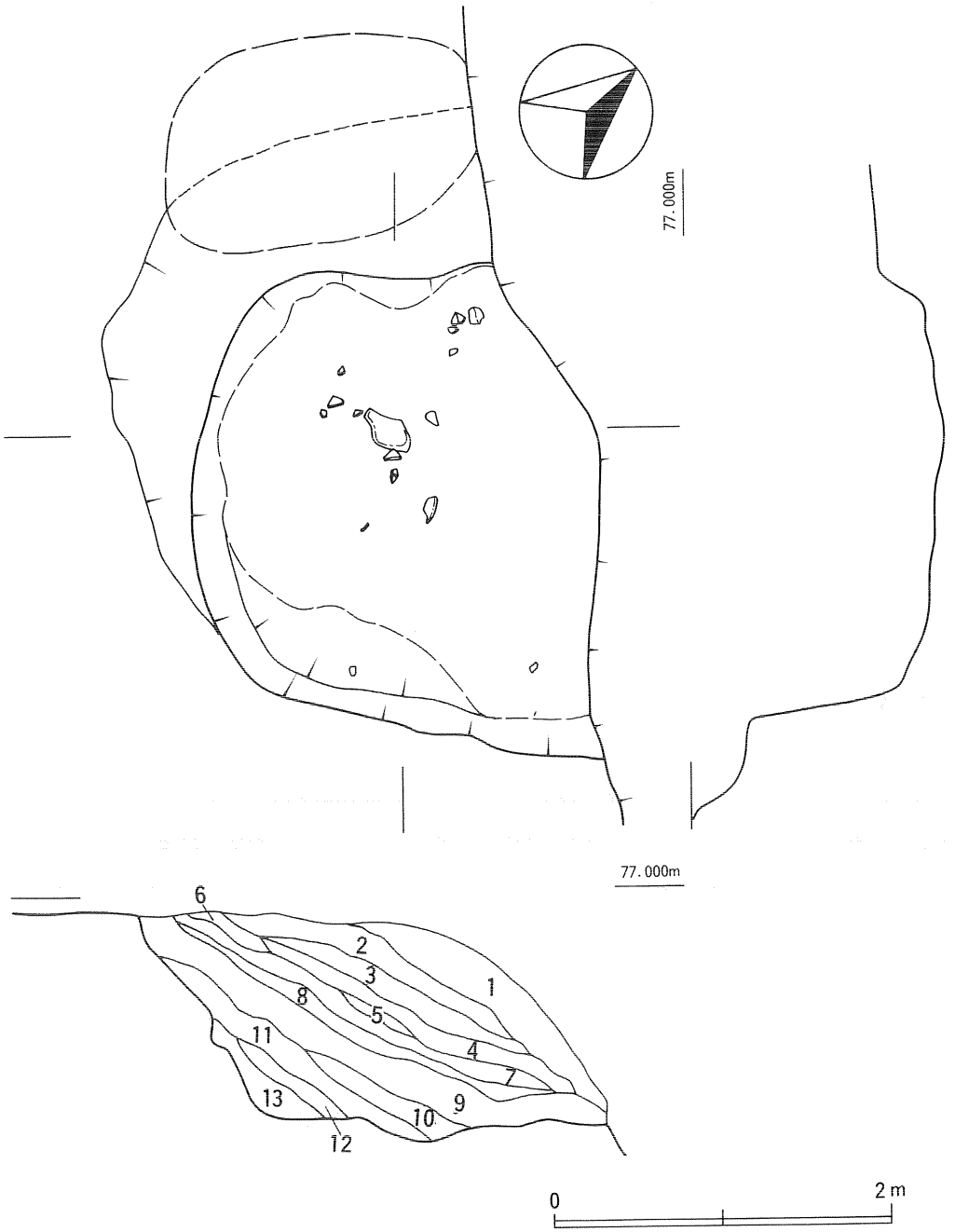
ＳＫＩ１５竪穴遺構（第24図・第25図）

LQ55とLP55の2つのグリッドにまたがり検出したが、北東側は農道開削時に欠失している。平面形は円形ないし、楕円形と推定される。西から北西にかけての壁は、ゆるやかに傾斜した後、急角度で床面に達する。木根による攪乱を受けているため不明確であるが、このゆるやかな傾斜面は西から東に向かっても傾斜している。出入口としてのスロープとも思われる。遺存部分の規模は、東西方向が288㎝を測るが床面での規模は、東西方向225㎝、南北方向で253㎝を測る。柱穴、壁溝、炉跡等は検出されなかった。埋土は、黄褐色土粒と軽石粒を含む黒褐色土を主体とする。また、大湯浮石層も観察される。出土遺物は、縄文土器片６点、掻器１点（７）、剥片４点（８～11）である。掻器の表面にはアスファルトと思われる付着物が観察される。頁岩製。

(3)　フラスコ状土坑・土坑

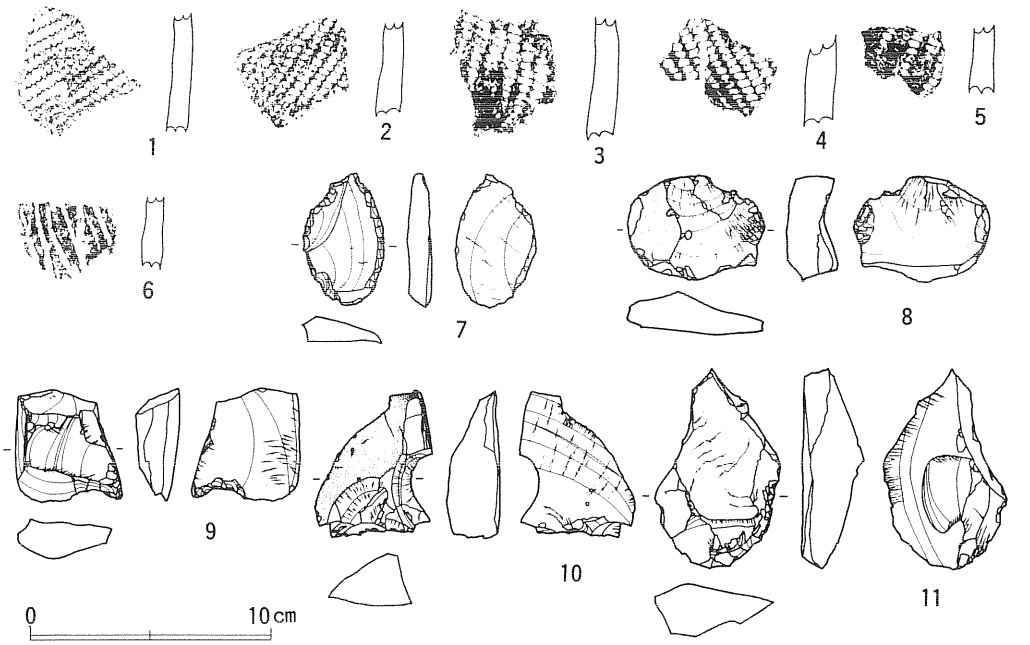
ＳＫＦ０１フラスコ状土坑（第26図）

MA60グリッドで検出した。平面プランは、楕円形を呈する。断面形は袋の口を少ししめたような頸部を有するいわゆるフラスコ形であるが、開口部径に対し浅いため、上下に押し潰された印象を受ける。北東側の頸部から胴部上半にかけては、埋土の状況から廃棄後に崩落したものと推定される。規模は、口径204×188㎝（推定）、深さ91㎝、底径246×203㎝、頸部径176×132㎝（推定）を測る。埋土は、５層に分層された。遺物は出土しなかった。



ＳＫＩ 15竪穴遺構土層註記
1：黒色土　草木の根が無数に入いり、木の葉等が腐食して混じり合い、ボソボソした土となっている　2：黒色土　黄褐色土粒、微小軽石粒を少量含む。乾燥して表面が白く浮いてくる。　3：黒褐色土　少量の黄褐色土粒、同ブロック混入　4：黒色土　微細黄褐色土粒少量混入。最も黒色味が強い　5：黒褐色土　微細黄褐色シラス粒やや多量に混入　6：黒褐色土　微細黄褐色土粒混入　7：暗黄褐色土　多量の黄褐色シラス粒から成る。いわゆる大湯石層　8：黒褐色土　褐色土粒少量混入。やや赤味を帯びる　9：黒色土　黄褐色土粒やや多量に混入　10：黒褐色土　黄褐色土粒、同小ブロック土混入　11：暗黄褐色土　黄褐色土粒多量に混入　12：黄褐色土　黄褐色土、同ブロックから成る　13：灰白色粘質土

第24図　SKI15竪穴遺構実測図



第25図　SKI15竪穴遺構出土遺物実測図

ＳＫＦ01フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　黄褐色土粒、少量の軽石を含む　２：黒色土　１層より軽石の混入やや多い　３：黒色土　黄褐色土粒、軽石粒ほとんど混入せず　４：褐色土　少量の黄褐色土粒、焼土粒、炭化物混入　５：褐色土　褐色土粒多量に堆積　６：黒褐色土　黄褐色土粒少量混入　７：黒褐色土　６層より黄褐色土粒の粒子大きくなる　８：暗黄褐色土　黄褐色土粒、少量の同小ブロック混入　９：黄褐色土　多量の黄褐色土粒、同大・小ブロック混入　10：黒色土　若干の黄褐色土粒を含む　11：黒褐色土　黄褐色土小ブロック少量混入　12：黒色土　しまり良い　13：黒色土　黄褐色土ブロック少量含む　14：黒色土　少量の黄褐色土粒、灰白色土粒混入　15：黄色土　16：暗黄褐色土　やや大粒の黄褐色土粒、多量の黒色土混入　17：黄褐色土　細かい黄褐色土粒子から成る　18：黒褐色土　細かい黄褐色土粒子やや多めに混入　19：黒褐色土　黄褐色土大ブロック少量混入　20：黒褐色土　６層＋少量の軽石粒

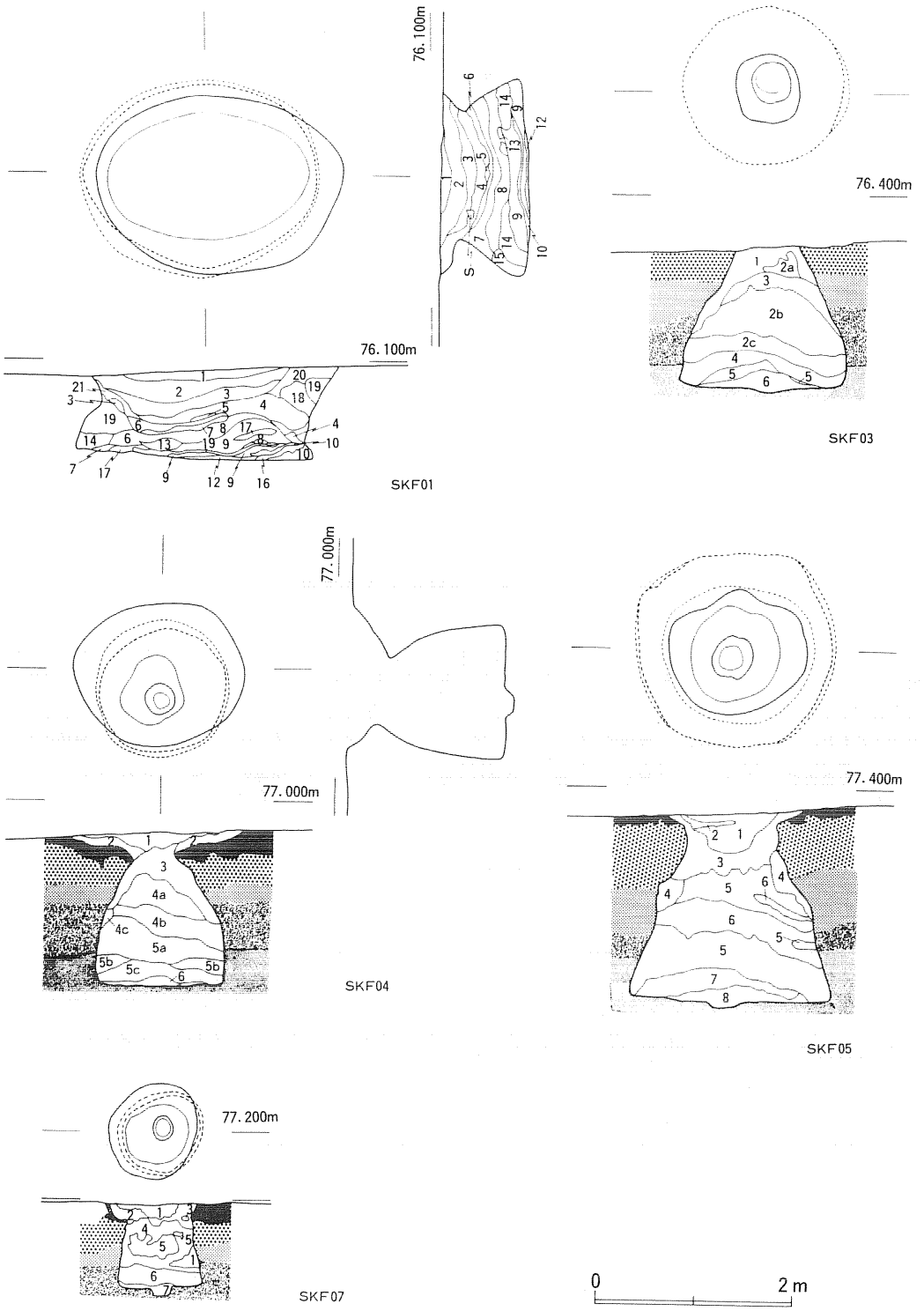
ＳＫＦ０３フラスコ状土坑　（第26図・図版５・図版６）

調査区北西端に位置するSI01のプラン確認中に、SI01とSD01に挟まれたLT62グリットで検出した。円形プランを呈し、断面はフラスコ形を呈する。側壁は、やや外側に膨みを有する。底面のほぼ中央にピットをもつ。規模は、開口部径71×66㎝、深さ147㎝、底径165×161㎝。ピットは、上径43×39㎝、深さ16㎝、底径31×27㎝を測る。埋土は、９層に分層された。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ03フラスコ状土坑土層註記
１：黒褐色土　黄褐色土粒子少量混入　２ａ：灰白色粘質土、黒褐色土粒若干混入　２ｂ：灰白色粘質土　２ａ層のように黒褐色土を含まない　２ｃ：灰白色粘質土　２ｂ層＋白色粘土ブロック　３：黒褐色土　灰白色粘質土粒混入　１層より黒味強い　４：黄橙色土　粒子が荒く、しかも硬質　５：黒褐色土　黄橙色土粒、同ブロック混入　６：黒色土

ＳＫＦ０４フラスコ状土坑（第26図）

LT57グリッドで検出された。側壁に膨らみがあるため、フラスコ形よりつり鐘形という形容がふさわしい。底面はほぼ平坦で中央部にピットが穿たれている。開口部径176×146㎝、深さ



第26図　SKF01・SKF03～05・SKF07フラスコ状土坑実測図

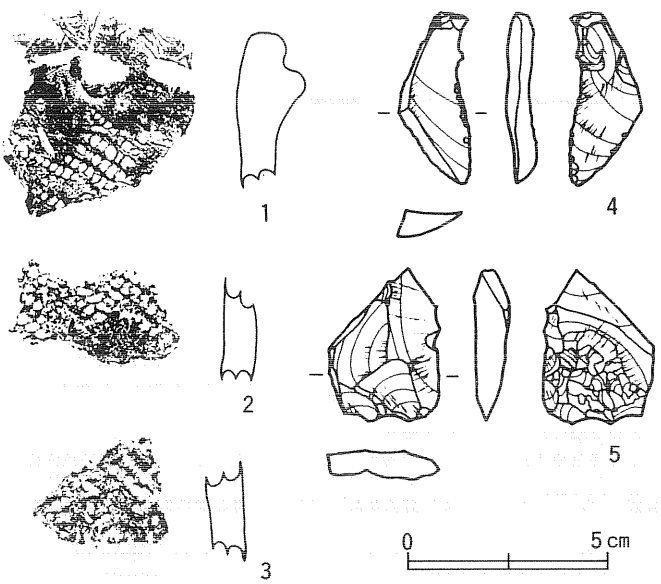
159㎝、底径131×127㎝、頸部径71×66㎝を測る。底面に穿たれたピットは、上径32×31㎝、深さ15.9㎝、底径16㎝である。埋土は、９層に分層された。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ04フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　灰白色粘土粒少量混入　２：黒褐色土　暗褐色土粒、黄褐色土粒混入　３：黒褐色土　少量の黄褐色土粒、多量の灰白色粘土粒、同ブロック混入　４ａ：灰白色土　白色粘土ブロック少量混入　４ａ：灰白色土　４ａより白色粘土ブロック多量に混入　４ｃ：灰白色土　黒色土粒混入　５ａ：黄橙色土　黄橙色ブロック土、少量の白色粘土ブロック混入　５ｂ：黄橙色土　５ａより橙色土粒の混入多く、やや暗い色調を帯びる　５ｃ：黄橙色土　黒色土粒の混入多く、５層中で最も暗い色調を帯びる　６：黒色土　微細黄褐色土粒混入

ＳＫＦ０５フラスコ状土坑

（第26図・第27図・図版５）

LR54グリッドで検出された。フラスコ形で、しっかりした頸部を有する。側壁は上半に肩部を有し、内湾して底部に達する。底面はほぼ中央にピットが穿たれている。規模は、開口部径141×128㎝、深さ194㎝、底径198㎝、頸部径96×90㎝。底面のピットは、開口部径44×43㎝、深さ12㎝、底径24㎝を測る。埋土は、８層に分層された。遺物は、土器片３点、石器２点が出土した。１は、深鉢の口縁部で隆帯による渦巻文が口縁部に施文され、その下方はRL縄文を施している。褐色を呈する。４・15はフレイク（頁岩）である。



第27図　ＳＫＦ05フラスコ状土坑出土遺物実測図

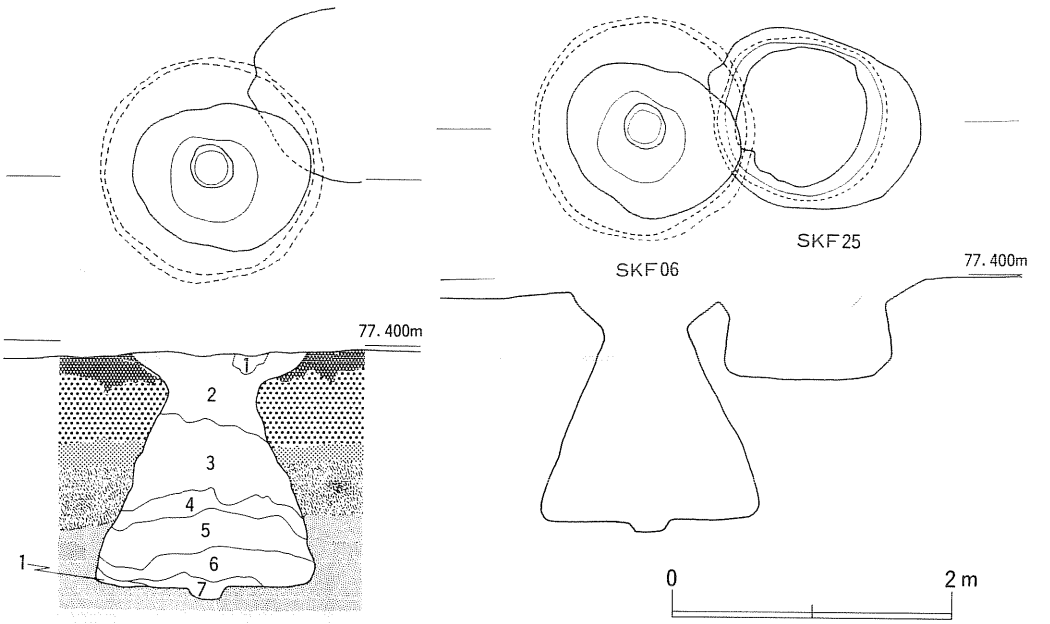
ＳＫＦ05フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　黄褐色土粒少量混入　２：暗褐色土　微小軽石粒少量混入　３：黒色土　黄褐色土粒、灰白色粘質土粒混入　４：黒褐色土　黄褐色土粒、同ブロック、灰白色粘質土粒多量に混入　５：灰白色粘質土　白色粘土ブロック少量混入　６：黒褐色土　４層と構成土粒同じであるが黄褐色土粒の混入多い　７：黄橙色土　黄橙色大小ブロック土多量に堆積、砂粒も全体に混入　８：黒色土　１層よりやや多量の黄褐色土粒混入

ＳＫＦ０６フラスコ状土坑（第28図・図版５～図版７）

LS53グリッドで検出され、東側でSKF25と重複している。プラン確認時に、SKF25は確認できなかったので新旧関係は不明である。底面はほぼ中央にピットが穿たれている。規模は、開口部径129×107㎝、深さ167㎝、底径152×151㎝、頸部径63×58㎝。底面のピットは、上径31㎝、深さ４㎝、底径24×23㎝を測る。埋土は、７層に分層された。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ０７フラスコ状土坑（第26図・図版５・図版６）

MA51グリッドで検出した。平面形は円形で断面形はフラスコ形であるが、頸部のくびれが弱い。底面のほぼ中央にピットが穿たれている。規模は、開口部径98×90㎝、深さ86㎝、底径79



第28図　SKF 06フラスコ状土坑実測図

ＳＫＦ06フラスコ状土坑土層註記
１：浅黄橙色粘土　２：黒褐色土　黒色土を主体として、少量の黄褐色土粒、浅黄橙色粘土粒混入　３：黒褐色土２層＋黄褐色土ブロック　４：浅黄橙色粘質土　浅黄橙色土粒＋浅黄橙色粘土ブロック　５：灰白色砂　少量の浅黄橙色粘土ブロック混入　６：灰白色砂　５層より浅黄橙色粘土ブロック小粒　７：黒色土　黄褐色土粒少量混入

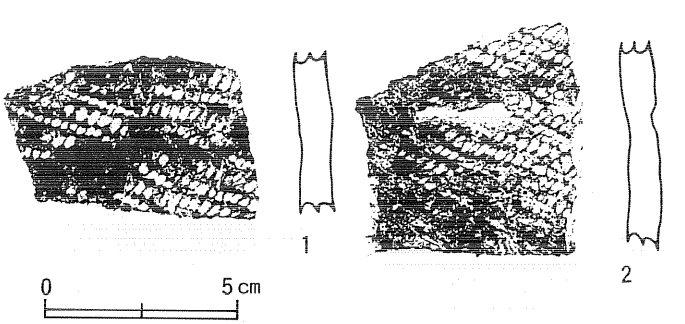
cm、頸部径65×61cmである。底面のピットは、開口部径25×21cm、深さ９cm、底径19×15cmを測る。埋土は、７層に分層された。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ07フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　黄褐色土粒少量混入　２：黒褐色土　黄褐色土粒、同小ブロックやや多量に混入　３：黄褐色土ブロック　４：黒褐色土　黄褐色土粒、灰白色粘質土混入　５：灰白色粘質土　６：黒色土　黄褐色土粒、灰白色粘質土混入　７：黒色土　黄褐色土粒の混入ほとんど観察できない

ＳＫＦ０８フラスコ状土坑

（第29図・第30図・図版５・図版７）

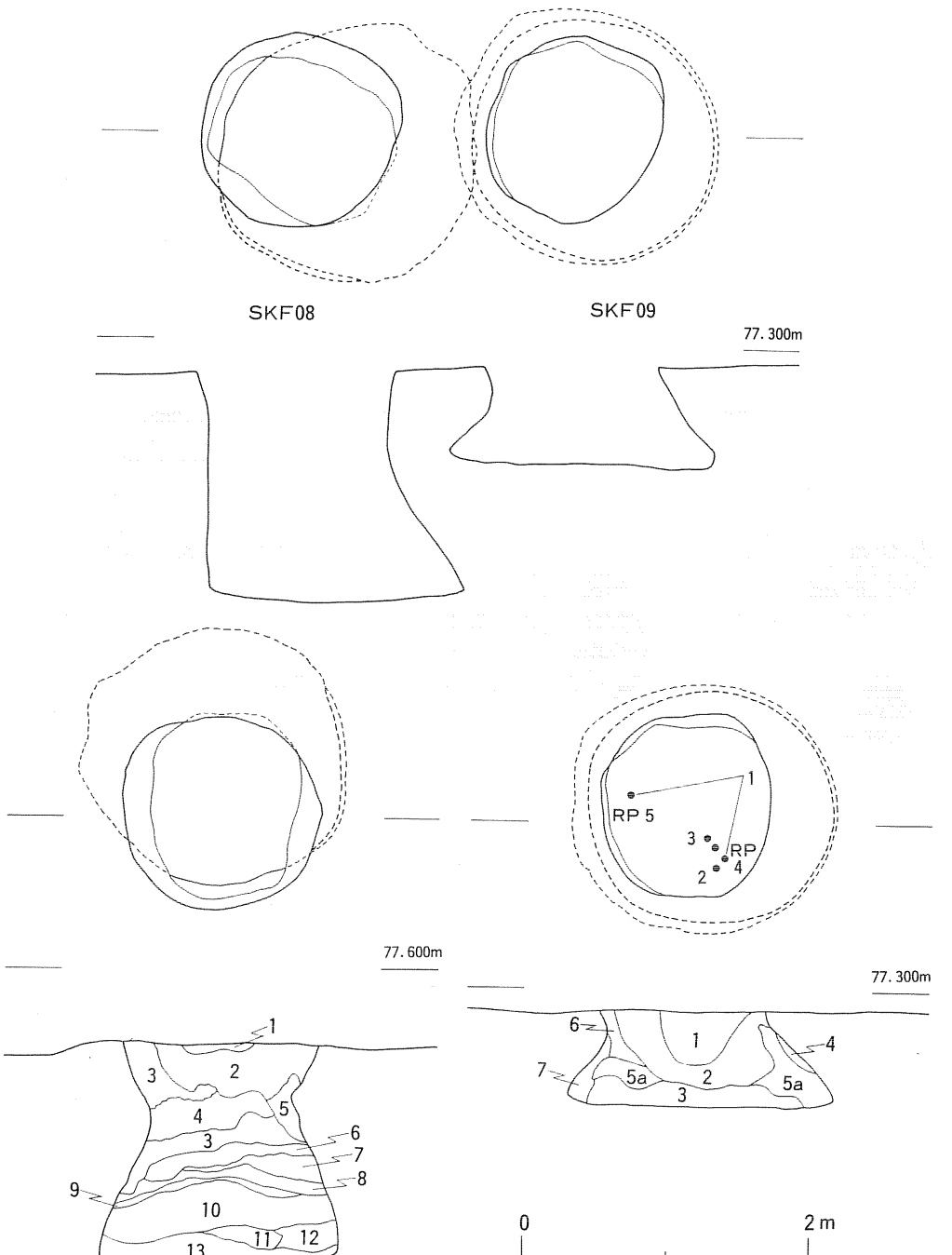
ＭＡ50グリッドで検出した。平面形は円形であるが、開口部の中心と底部の中心にずれがあり、同心円を描かない。規模は、開口部径138×135cm、深さ156cm、底径181×180cm、頸部径120×104cmを測る。埋土は、13層に分層された。黒色土のほか、灰白色粘土、黄橙色土を主体とする。遺物は、土器片２点である。１、２は、同一個体と思われる。縄文原体はLRの異条縄文である。浅黄橙色から黄橙色を呈する。



第29図　SKF08フラスコ状土坑出土土器拓影

ＳＫＦ08フラスコ状土坑土層註記
１：灰白色粘質土　黄褐色土粒混入　２：黒色土　黄褐色土粒、同小ブロック、軽石粒少量混入　３：黒褐色土　黄

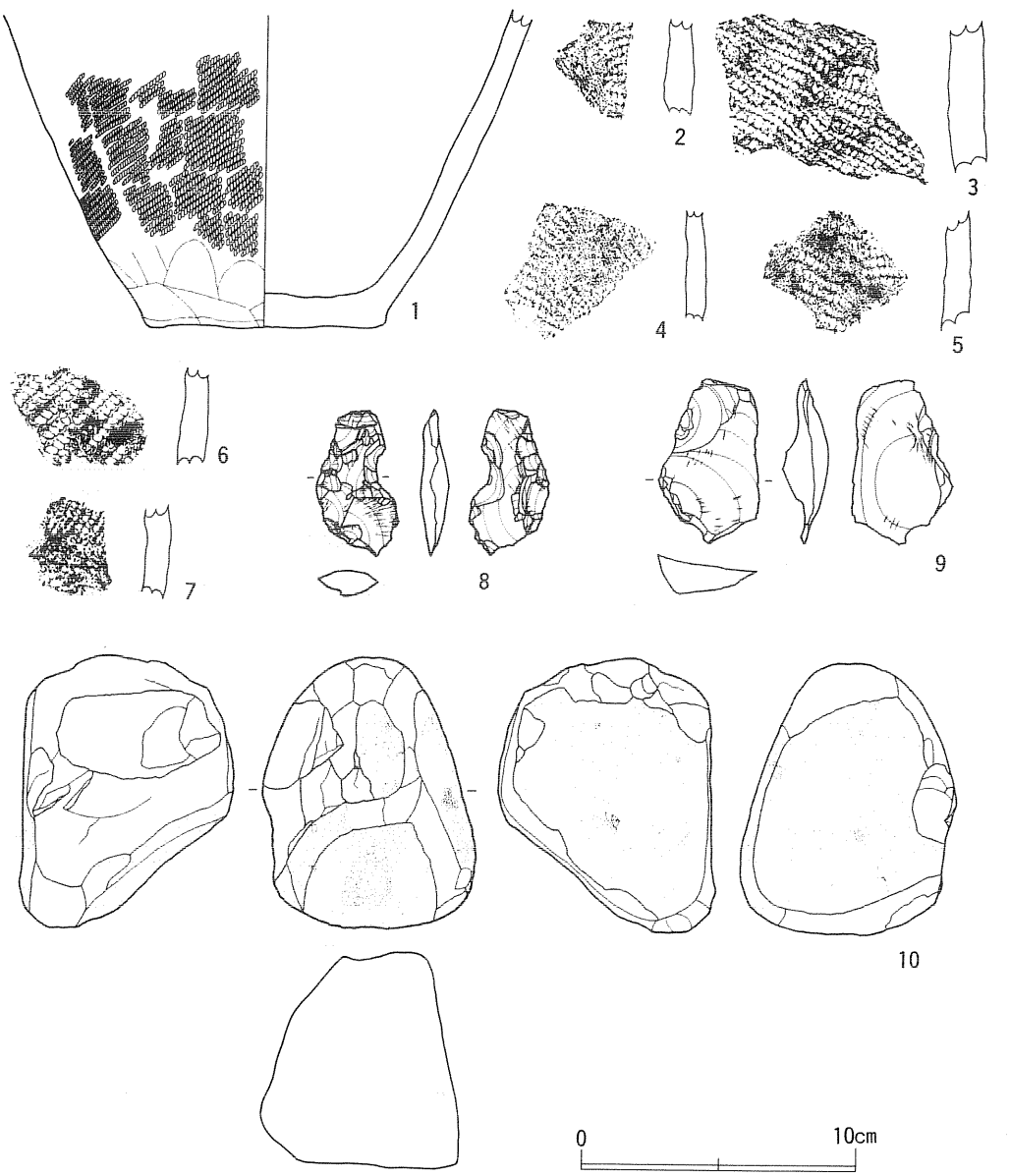
褐色土粒、同ブロック、黄橙色土粒混入　4：黄橙色土　少量の黒色土粒、軽石、灰白色粘土混入　5：黒褐色土　多量の黄褐色土粒、少量の同ブロック混入　6：灰白色粘質土　白色粘土粒少量混入　7：黄橙色土　4層と混入粒子は同じだが、粒子が荒くボソボソしている　8：暗黄橙色土　黒色土粒の混入が著しく、一部分ボソボソしている　9：黒色土　黒色腐植土と黄褐色土粒混入　10：黒褐色土　3層とほぼ同じだが、ブロックがいずれも小粒である　11：暗黄褐色土　黒色土粒、黄橙色小ブロック混入　12：黒褐色土　黄橙色土粒混入　13：黒褐色土　10層よりも黒色の色合いが強い



第30図　SKF 08・09フラスコ状土坑実測図

ＳＫＦ０９フラスコ状土坑（第30図・31図）

SKF08の北側２ｍのMA51の杭の下で検出した。平面形は円形を呈し、断面形はフラスコ形であるが、口径に比して深さがないため寸づまりの印象を受ける。規模は、開口部径128×118㎝、深さ66㎝、底径172×163㎝、頸部径119×114㎝を測る。埋土は、８層に分層されたが壁体の崩落と推定される黄褐色土が観察された。出土遺物は、底部破片を含む土器片７点と剥片２点、礫１点である。１は、RP4とRP5の接合した深鉢胴部下半から底部にかけての資料で、２層と５ａ層から出土した。LRの縄文が底辺部まで施文されている。



第31図　SKF 09フラスコ状土坑出土遺物実測図

ＳＫＦ09フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　少量の黄褐色土粒と炭化物を含む　２：黒色土　やや多めの黄褐色土粒、少量の同小ブロック　３：黒褐色土　黄褐色土粒、微量の焼土粒混入　４：黒褐色土　黄褐色微粒子を多量に含む　５ａ：暗黄褐色土　多量の黄褐色土粒と少量の同ブロック、炭化物を含む　５ｂ：暗黄褐色土　多量の黄褐色土粒ブロック状に堆積　６：黒褐色土　全体に黄褐色土粒均一に混入　７：黒褐色土　６層よりさらに黄褐色土粒多量に混入

ＳＫＦ10フラスコ状土坑（第32図・図版５・図版７）

LS55グリッドで検出した。開口部から頸部にかけては、北側を除いて、内側へのテラス様張り出しが観察される。側壁はやや膨らんでいる。底面は平坦で、ほぼ中央にピットが穿たれている。規模は、開口部径125×118㎝、深さ163㎝、底径165×160㎝、頸部径90×80㎝を測る。底面のピットは、開口部径39×36㎝、深さ15㎝、底径23㎝である。埋土は、７層に分層された。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ10フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　黄褐色粘土粒、同ブロック、炭粒少量混入　２：黒色土　黄橙色ローム粒、炭粒、軽石少量混入　３：黄褐色シラス　軽石、灰色粘土粒、同ブロック少量混入　４：黄褐色シラス　３層よりも灰色粘土の混入が多い　５：黄褐色粘質土　粘性の強いシラス＋灰白色粘土ブロック混入　６：暗褐色シラス　やや粘性あり　７：黒色土　暗褐色土粒若干混入

ＳＫＦ11フラスコ状土坑（第32図・図版５・図版７）

MG41グリッドで検出した。開口部の中心と底部の中心にずれがあり、きれいな同心円を描いていない。断面形はフラスコ形であるが、東西方向の土層断面では左右対称ではない。頸部上方にテラス様の段を有する。また底面中央部にピットが穿たれている。規模は、開口部径97×79㎝、深さ116㎝、底径159×156㎝、頸部径66×56㎝を測る。底面のピットは、開口部径38×36㎝、深さ10㎝、底径29㎝を測る。埋土は、７層に分層された。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ11フラスコ状土坑土層註記
１：暗黄褐色土　黒色土粒、黄褐色土粒、同ブロック混入　２：黒色土　黄褐色土粒少量混入　３：黒色土　やや多量の黄褐色土粒、少量の同ブロック混入　４：黒色土　少量の黄褐色土ブロック混入　５：黒褐色土　微細黄褐色土混入　６：黒色土　同小ブロック土少量混入　７：灰褐色粘質土

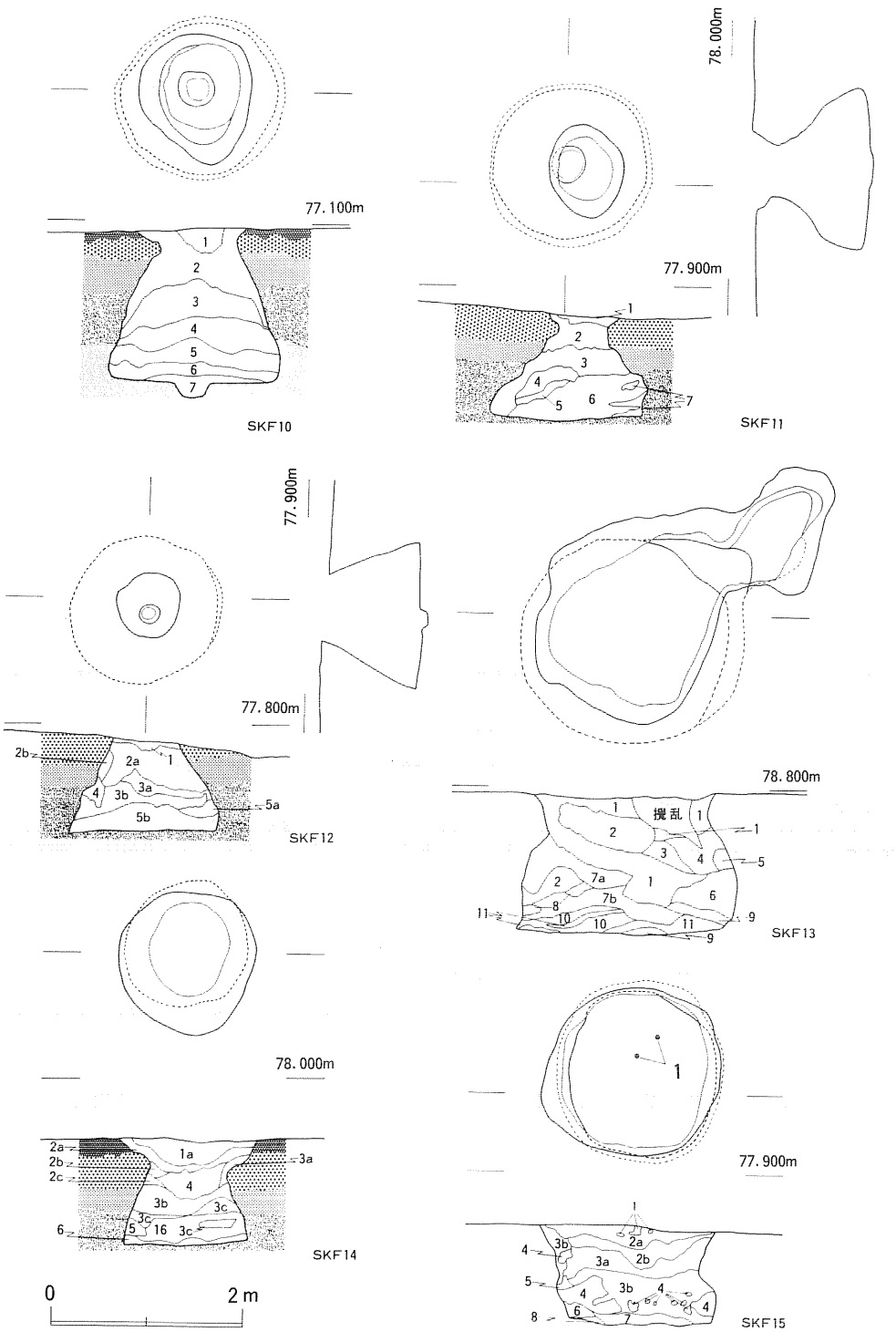
ＳＫＦ12フラスコ状土坑（第32図・図版６）

MF41グリッドで検出した。断面形はフラスコ形であるが、頸部が明確でないSKF 03のタイプに近い。東西方向の土層断面で見る限りでは、左右対称でない。底面のほぼ中央部にピットが穿たれている。規模は、開口部径が69×67㎝、深さ100㎝、底径157×153㎝を測る。底面のピットの規模は、開口部径20㎝、深さ８㎝、底径14㎝を測る。埋土は８層に分層された。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ12フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　黄褐色土粒をほとんど含まない　２ａ：黒色土　黄褐色土粒、同小ブロック、灰白色粘質土粒混入　２ｂ：黒色土　黄褐色土粒少量混入　３ａ：灰白色粘質土　黒色土粒の混入著しい　３ｂ：灰白色粘質土　黒色土粒の混入少なく、灰白色土粒、同ブロック混入　４：黒褐色土　黒色土粒、灰白色粘質土粒混入　５ａ：黒色土　灰白色粘質土粒少量混入　５ｂ：黒色土　黄褐色土粒、同ブロック、灰白色粘質ブロック少量混入

ＳＫＦ13フラスコ状土坑（第32図・第33図）

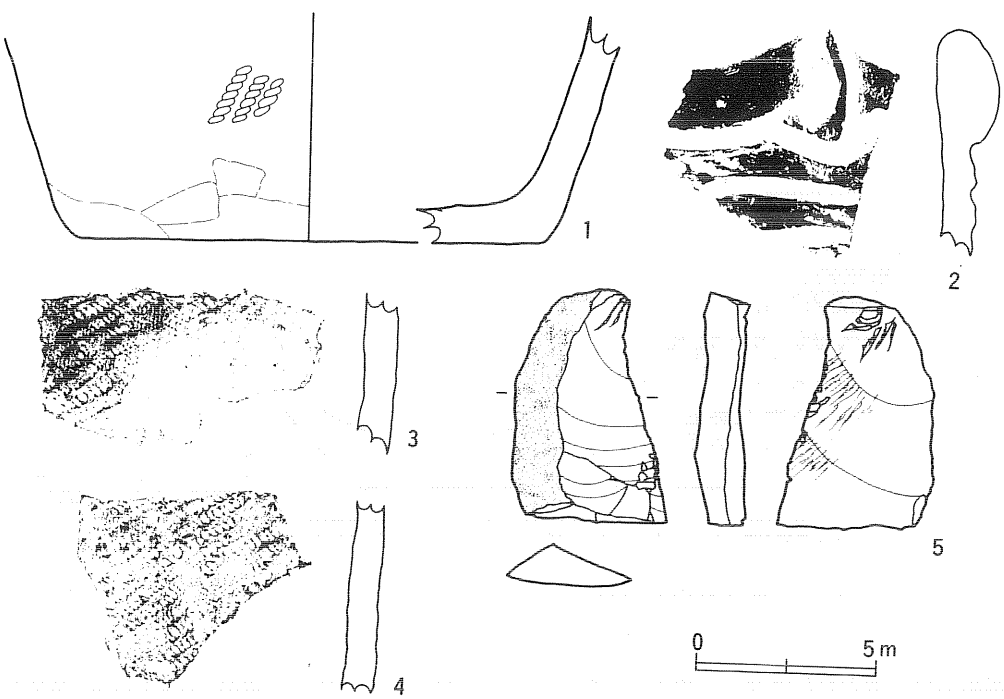
MF39グリッドで検出した。東南側が攪乱されている。側壁は外側に膨らんでいるが木根のため、凹凸が著しい。規模は、開口部径165（推定）×162㎝、深さ156㎝、底径231×213㎝、頸



第32図　SKF10～SKF15フラスコ状土坑実測図

部径165（推定）×163㎝を測る。本遺跡で検出されたフラスコ状土坑のうち、本土坑の底径が最大規模を有し、3.6～4.2㎡の底面積ををもつ。埋土は、12層に分層されたが暗黄褐色土、黄褐色土を主体とする。遺物は、口縁部と底部資料それぞれ１点を含む土器片とフレイク１点である。１は深鉢底部で内面に帯状に煤状炭化物が付着している。２は、折り返し口縁の突起部である。

ＳＫＦ13フラスコ状土坑土層註記
１：暗黄褐色土　多量の黄褐色土粒子、少量の同ブロック混入　２：黄褐色土ブロック　３：暗黄褐色土　やや多量の黄褐色土粒、少量の灰白色粘土ブロック混入　４：黒褐色土　黄褐色土粒子やや多量に混入　５：暗黄褐色土　黄褐色粒子、同ブロック混入　６：黒褐色土　やや多量の黄褐色土粒子、少量の炭化物混入　７ａ：暗黄褐色土　黄褐色土ブロック多量に堆積、黒色土の混入量もかなり多い　７ｂ：暗黄褐色土　７ａ層より黒色土粒の混入少ない　８：黄橙色土ブロック　９：黒色土　少量の黄褐色土粒混入　10：黒褐色土　少量の黄銅色土粒、同ブロック混入　11：暗黄褐色土　多量の黄銅色土粒、同ブロック混入



第33図　SKF13フラスコ状土坑出土遺物実測図

ＳＫＦ14フラスコ状土坑（第32図・図版６・図版７）

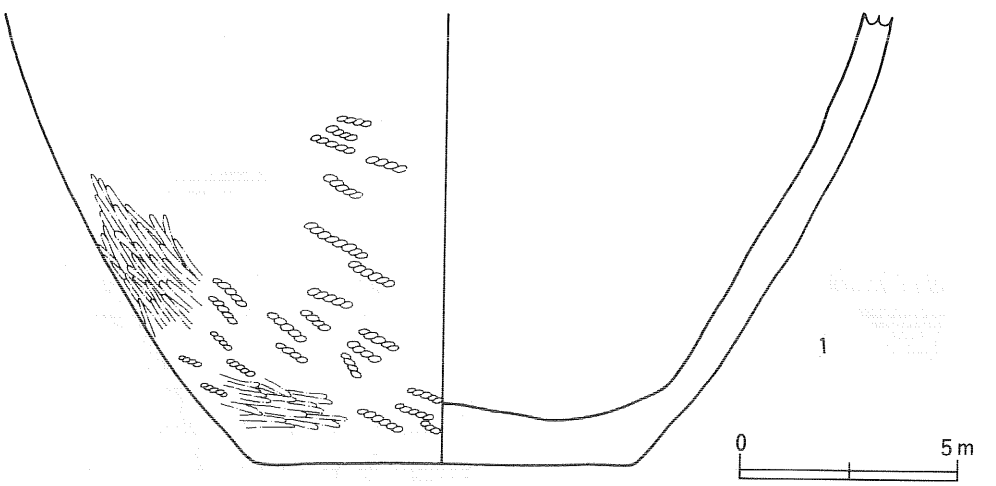
LR52グリッドで検出した。断面はあまり明瞭でないが、口頸部上方にテラス様の段をもつフラスコ形である。規模は、開口部径149×144㎝、深さ112㎝、底径132×129㎝、頸部径99×83㎝を測る。開口部が底部よりやや大きい。埋土は11層に分層されたが黒色土、黒褐色土、灰白色粘質土、暗黄褐色土に大別される。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ14フラスコ状土坑土層註記
１ａ：黒色土　黄褐色土粒混入　１ｂ：黒色土　１ａより黄褐色土粒多量に混入　２ａ：黒褐色土　黄褐色土粒、灰白色粘質土少量混入　２ｂ：黒褐色土　灰白色粘質土少量混入　２ｃ：黒褐色土　２ｂより灰白色粘質土混入少ない　３ａ：黒褐色土　微細黄褐色土粒混入　３ｂ：黒褐色土　黄褐色土粒多量に混入　３ｃ：黒褐色土　大粒の黄褐色土粒多量に混入　４：灰白色粘質土　軽石粒を多量に含む　５：暗灰白色土　灰色粘土粒、黄褐色土粒混入　６：暗黄褐色土　黄褐色土粒、少量の灰色粘土粒混入

ＳＫＦ15フラスコ状土坑（第32図・第34図）

LR51グリッドで検出した。本土坑の東側にはSK01土坑が位置する。開口部北側の一部が崩落している。開口部径と底径がほぼ同じであるが、わずかに内側に張り出した頸部により、フラスコ形を保っている。規模は、開口部径175×162（推定）㎝、深さ105㎝、底径172×165㎝、頸部径156×137（推定）㎝を測る。埋土は、10層に分層された。出土遺物は、土器片４点であるが１（RP２＋３）は深鉢の底部破片である。

ＳＫＦ15フラスコ状土坑土層註記
１：灰白色粘質土ブロック　２ａ：黒色土　黄褐色土粒、炭化物混入　２ｂ：黒色土　２ａより黄褐色土粒大粒で炭化物を含む　３ａ：黒褐色土　黄褐色土粒やや多量混入、少量の炭化物含む　３ｂ：黒褐色土　多量の黄褐色土混入、炭化物もやや多め　４：黄褐色土ブロック　５：暗黄褐色土　黒色土＋黄褐色土ブロック　６：黄橙色土　黄橙色土粒、黄褐色土粒、白色粘土小ブロック混入　７：黒色土　黄褐色土小ブロックやや多量混入　８：黒褐色土　灰白色粘土少量混入



第34図　SKF15フラスコ状土坑出土土器実測図

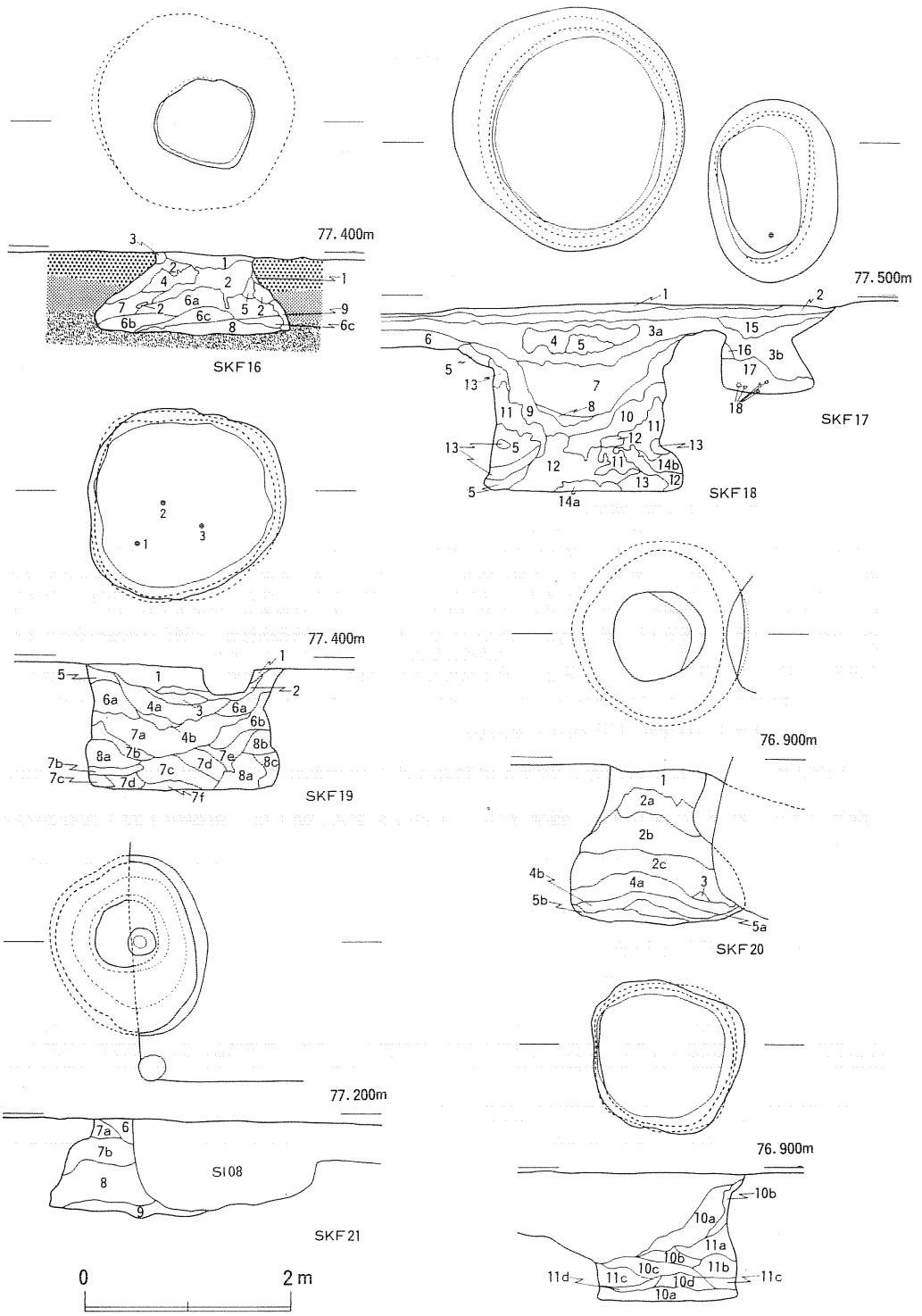
ＳＫＦ16フラスコ状土坑（第35図・図版６）

MC47グリッドで検出した。断面形は、SKF09に酷似するフラスコ形を呈するが、東西方向の土層断面では左右対称でない。規模は、開口部径97×85㎝、深さ80㎝、底径191×190㎝、頸部径92×82㎝を測る。埋土は、12層に分層された。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ16フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　少量の黄褐色土粒、軽石粒混入　２：黒褐色土　やや多量の黄褐色土粒、少量の同ブロック、灰白色粘質土粒混入　３：黄橙色土　壁の崩壊土　４：灰褐色土　灰褐色粘質土粒、同砂粒、軽石粒混入　５：暗黄褐色土　黒色土粒、黄褐色土粒混入　６ａ：黄橙色土　黄橙色土粒、同ブロック混入　６ｂ：黄橙色土　黄橙色ブロック土６ａ層より少ない　６ｃ：暗黄橙色土　６ａ層＋黒褐色土　７：暗黄褐色砂質土　８：黒褐色土　少量の黄褐色土、同ブロック混入　９：暗黄褐色土　黄褐色ブロック土、黒褐色土粒混入

ＳＫＦ17フラスコ状土坑（第35図・第36図）

LQ52グリッドで検出した。東側は農道をつくる際に掘削され、急な崖になっている。規模は開口部径178×127㎝、深さ82㎝、底径136×87㎝、頸部径80×78㎝を測る。埋土は上面に大湯浮石と思われる微細軽石粒を多量に含む層があり、黒色土、暗黄褐色土が順次堆積している。本土坑とSKF18との新旧関係は木根による攪乱のため不明である。出土遺物は、土器底部破片



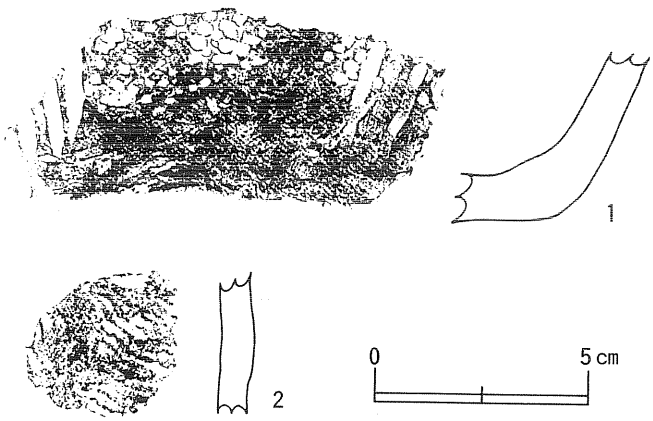
第35図　SKF16～SKF21・SKF24フラスコ状土坑実測図

1点と胴部破片1点である。

ＳＫＦ18フラスコ状土坑

（第35図）

SKF17に近接して、ＬＲ52グリッドで検出した。明瞭な頸部は認められず、胴部にくびれをもつビーカー形である。規模は、開口部径238×226㎝、深さ140㎝、底径205×163㎝を測る。埋土は、17層に分層できたが黄褐色土粒と炭化物が混入した黒褐色土が主体をなし、壁際に黄褐色土を主体とする土が堆積している。



第36図　SKF 17フラスコ状土坑出土土器拓影

ＳＫＦ17、18フラスコ状土坑土層註記
1：黒色土　軽石粒をやや多量に含む、乾燥すると表面は灰色に変化　2：黒色土　軽石粒を多量に含む、大湯浮石の二次堆積と思われる　3ａ：黒色土　黄褐色土粒、少量の同小ブロック混入　3ｂ：黒色土　黒褐色土粒の混入が3ａ層より多い　4：黒褐色土　黄褐色土粒、多量の同大ブロック混入　5：黄褐色土　黄褐色土粒、多量の同ブロック混入　6：黒褐色土　黄褐色土ブロック少量混入。木の根の攪乱を受けたものと推定される　7：黒色土　黄褐色土小ブロック少量混入　8：黒褐色土　微小黄褐色土粒やや多量に混入　9：黒褐色土　黄褐色土粒、同小ブロック混入　10：黒褐色土　多量の黄褐色土粒、やや多量の同大小ブロック混入　11：暗黄褐色土　10層より多量の黄褐色土粒、同小ブロック混入　12：黄橙色土ブロック　13：浅黄橙色粘質土　14ａ：黒色土　黄褐色土粒ほとんど含まない　14ｂ：黒色土　黄褐色土粒若干混入　15：黒色土　微小黄褐色土粒少量混入　16：黒褐色土　やや大粒の黄褐色土粒少量混入　17：暗黄褐色土　多量の黄褐色土＋同ブロック＋黄褐色砂粒＋少量の黒色土粒　18：灰白色粘土ブロック

ＳＫＦ19フラスコ状土坑（第35図・第37図）

LQ54グリッドで検出された。わずかに頸部が張り出す形状を呈し、開口部径192×183㎝、深さ124㎝、底径175×169㎝、頸部径167×159㎝を測る。埋土は、黄褐色土粒と炭化物粒が混入する黒褐色土が主体をなすが、壁際には黄褐色土を主体とする土が堆積している。遺物は縄文土器片と石器剥片が出土している。深鉢形土器胴部破片（３）はRL縄文施文後、沈線で区画し、内部をすり消している。

ＳＫＦ19フラスコ状土坑土層註記
1：黒色土　黄褐色土粒少量混入　2：暗黄褐色土　黄褐色土粒やや多量に混入　3：暗黄褐色土　黄褐色土ブロック、少量の黄褐色土粒混入　4ａ：黒色土　黄褐色土粒、炭粒混入　4ｂ：黒褐色土　4ａ＋灰褐色土粒混入　5：暗黄褐色土　多量の黄褐色土粒、少量の同小ブロック混入　6ａ：黒褐色土　多量の微細黄褐色土粒、少量の同小ブロック混入　6ｂ：黒褐色土　6ａ層より大粒の黄褐色土粒多量に混入　7ａ：明黒褐色土　やや多量の灰褐色土粒、黄褐色土粒、同ブロック混入　7ｂ：明黒褐色土　灰褐色土粒若干混入　7ｃ：灰褐色土　7ｄ：明黒褐色土　7ａ層とほぼ同じだが、灰褐色土の混入多い　7ｅ：明黒褐色土　7ｂ層とほぼ同じだが、黄褐色土粒の混入多い　7ｆ：灰褐色土　黒色土粒の混入顕著　8ａ：暗黄褐色土　多量の黄褐色土ブロック、黒褐色土粒混入　8ｂ：暗黄褐色土　8ａ層もり黒色土粒の混入多い　8ｃ：暗黄褐色土　微細黄褐色土粒、黒色土粒混入

ＳＫＦ20フラスコ状土坑（第35図）

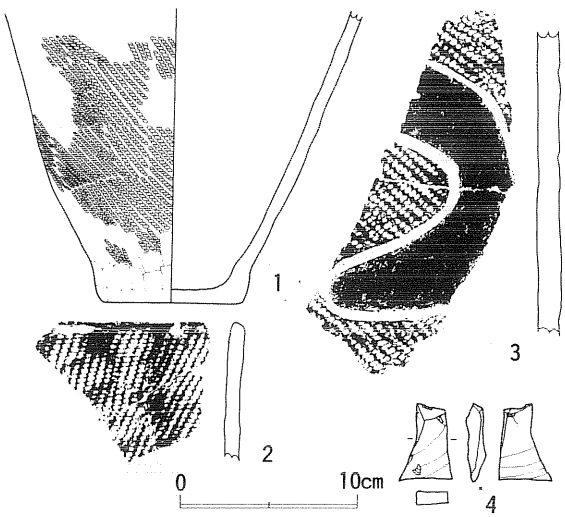
LQ56・57のグリッドにまたがり検出した。北東側の一部は、開削されて消滅していた。側壁には、若干の凹凸があり、底面も平坦ではない。規模は、開口部径90×87㎝、深さ157㎝、底径167×139㎝、頸部径87×77㎝を測る。埋土は、９層に分層されたが、粘質土を含む黄褐色土、

黄橙色土、黒褐色土を主体とする。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ20フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　黄褐色土粒少量混入　　２ａ：明黄褐色土　浅黄色のブロックを含むシラス　　２ｂ：明黄褐色土　黄褐色と浅黄色のブロックを含むシラス　　２ｃ：灰黄色土　灰黄色ブロックを含むシラス　　３：黄橙色土　　４ａ：黄橙色土　黄橙色と灰白色のブロックを少量混入　　４ｂ：暗黄橙色土　　５ａ：黒褐色土　黄橙色土粒混入　　５ｂ：黒色土

ＳＫＦ21フラスコ状土坑（第35図）

MB50グリッドで検出した。平安時代のSI08竪穴住居跡構築の際、本土坑の北半分が掘り込まれている。住居跡の掘り込みが本土坑よりも浅いため、底部については、かろうじて遺存している。断面形は、肩がすこし張るフラスコ形と思われる。底面のほぼ中央にピットが穿たれている。規模は、開口部径65㎝（推定）、深さ91㎝、底径165×135㎝、頸部径76㎝（推定）を測る。



第37図　SKF 19フラスコ状土坑出土遺物実測図

底面のピットの規模は、開口部径28×27㎝、深さ７㎝、底径12㎝である。埋土は、５層に分層できた。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ21フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　少量の軽石粒、黄褐色土粒混入　　２ａ：黒褐色土　微小黄褐色土粒多量に混入　　２ｂ：黒褐色土　２ａ層よりやや粒子の大きい黄褐色土混入　　３：黒色土　少量の黄褐色土粒、同小ブロック混入　　４：黒色土　黄褐色土をほとんど含まない

ＳＫＦ22フラスコ状土坑（第39図・図版６・図版７）

LR54グリッドで検出した。南東側にSKF23が近接して位置する。頸部の張り出しは弱い。底面ほぼ中央にピットが穿たれている。規模は、開口部径91×84㎝、深さ157㎝、底径135×131㎝、頸部径76×71㎝を測る。底面のピットの規模は、開口部径26×25㎝、深さ４㎝、底径16×14㎝である。埋土は、８層に分層された。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ22フラスコ状土坑土層註記
１：黒褐色土　黄褐色土粒、灰黄色土粒混入　　２ａ：灰黄色土　黄橙色シラス土の混入見られる　　２ｂ：灰黄色土　灰白色粘土ブロック、灰黄色土ブロック混入　　３ａ：黄橙色土　黄橙色土粒、浅黄色土粒混入　　３ｂ：暗黄橙色土　３ａ層＋黒色土多量に混入　　４：黒褐色土　１層＋灰黄色土粒（多量）　　５：浅黄色土　黄橙色土粒少量混入　　６：黒色土

ＳＫＦ23フラスコ状土坑（第39図・図版６・図版７）

SKF22の南東に近接して、LR53グリッドで検出した。底面ほぼ中央にピットが穿たれている。規模は、深さを除いてSKF22に近似し、開口部径100×83㎝、深さ141㎝、底径129×143㎝、頸部径85×65㎝を測る。底面のピットの規模は、開口部径30×28㎝、深さ５㎝、底径16×13㎝である。埋土は、８層に分層され、黒色土、黒褐色土を主体とする。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ23フラスコ状土坑土層註記
１：黒色土　黄褐色土粒やや多量に混入　　２ａ：黒色土　黄褐色土小ブロック少量混入　　２ｂ：黒褐色土　２ａ層より黄褐色土小ブロック多量に混入　　３ａ：黒色土　少量の黄褐色土粒、灰褐色土粒混入　　３ｂ：黒褐色土　多量の灰褐

色土粒混入　3ｃ：黒褐色土　灰褐色土粒の混入３ｂ層より減少するが、同ブロック少量混入　3ｄ：黒褐色土　灰褐色土粒、同ブロック土の混入３ｃ層より増大　4：黄橙色土ブロック

ＳＫＦ24フラスコ状土坑（第35図・図版４）

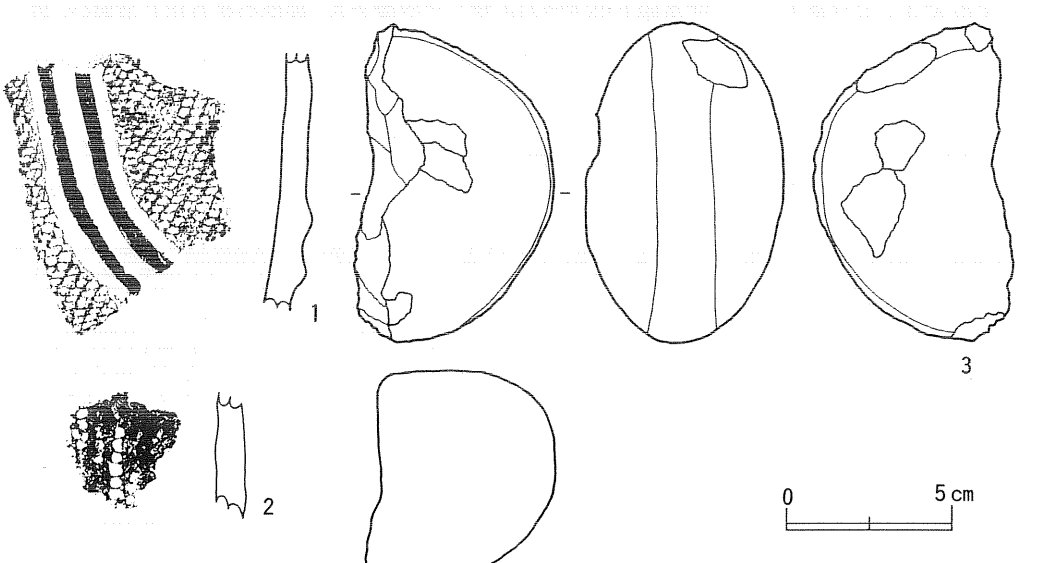
LS56・57グリッドで検出した。上半部が攪乱を受けて欠失している。断面形は頸部の張り出しが弱いフラスコ形と推定される。規模は、開口部径150㎝（推定）、深さ126㎝、底径135×133㎝を測る。埋土は、９層に分層され、粘質土の混入した黒色土を主体とし、壁際にブロック土を含む暗黄褐色土が観察される。遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ24フラスコ状土坑土層註記
1ａ：黒色土　少量の黄褐色土混入　1ｂ：黒色土　少量の黄褐色土粒、同小ブロック混入　1ｃ：黒色土　少量の黄褐色土小ブロック混入　1ｄ：黒色土　灰白色粘質土少量混入　1ｅ：黒色土　微細黄褐色土やや多めに混入
2ａ：黒褐色土　少量の黄褐色土粒、やや多めの同大小ブロック混入　2ｂ：暗黄褐色土　黄褐色土大ブロック多量に混入　2ｃ：暗黄褐色土　2ｂ層より混入量減少　2ｄ：暗黄褐色土　2ｃ＋灰白色土粒

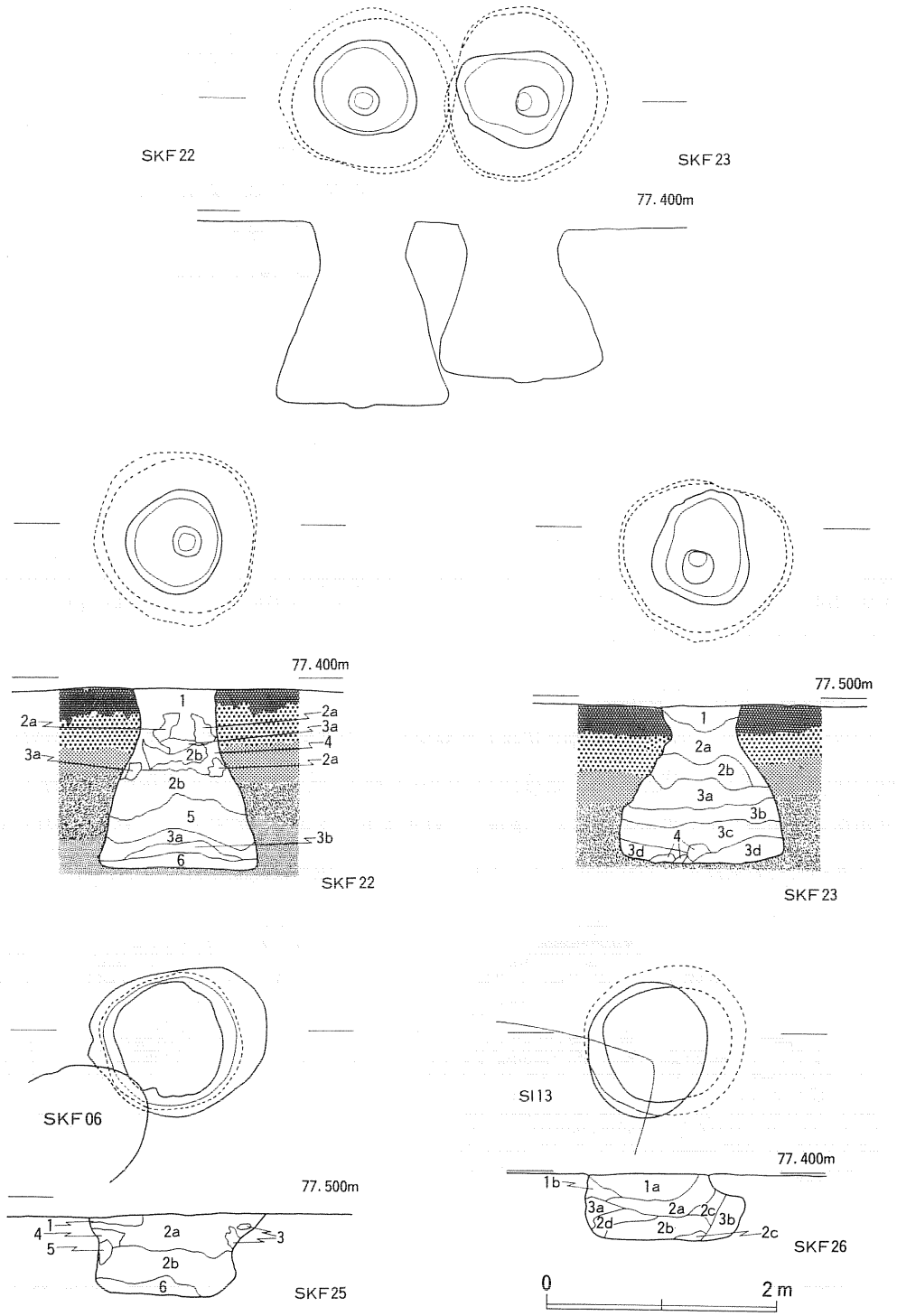
ＳＫＦ25フラスコ状土坑（第38図・第39図）

SKF16の東側に近接して、LS53、LR53グリッドで検出した。本土坑は周囲の土との乾燥状態が異なったことから、調査終了間際に確認された。断面形は、頸部の張り出しが弱い、フラスコ形を呈する。規模は、開口部径158×126㎝、深さ75㎝、底径100×91㎝、頸部径118×108㎝を測る。埋土は、７層に分層されたが、黄褐色土粒混入黒色土と暗黄褐色土が主体をなす。出土遺物は、縄文土器片２点とすり石１点である。１は、地文にRL縄文を施し、２条の隆帯を平行に貼り付けている。

ＳＫＦ25フラスコ状土坑土層註記
1：黄褐色土　カクランを受けている不自然な層　2ａ：黒色土　黄褐色土粒、同小ブロック土やや多量に混入　2ｂ：黒色土　2ａ層より黄褐色土粒、同小ブロック多目　3：黄褐色土ブロック　4：灰オリーブ色土　5：明黄褐色土　明黄褐色ブロック混入　6：暗黄褐色土　黄褐色土粒、同小ブロック土混入



第38図　SKF25フラスコ状土坑出土遺物実測図

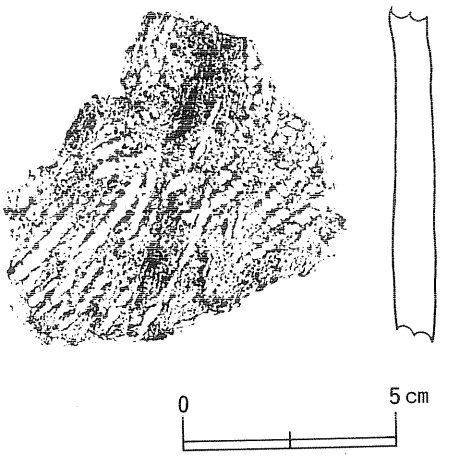


第39図　SKF22・23・25・26フラスコ状土坑実測図

ＳＫＦ26フラスコ状土坑

（第39図・第40図・図版４）

MC47・MD47グリッドにまたがり検出した。平安時代のSI13竪穴住居跡が、本土坑南側の一部を掘り込んで構築している。開口部の南西側半分は、崩落してややいびつな平面形を呈している。また、断面形も口頸部が崩落しているが、SKF09と同形のフラスコ形であったと思われる。規模は、開口部径70㎝（推定）、深さ58㎝、底径113×99㎝を測る。埋土は、９層に分層され黄褐色土粒の混入する黒色系の土を主体とし、壁際に黄褐色系の土が堆積している。出土遺物は、縄文土器片１点である。

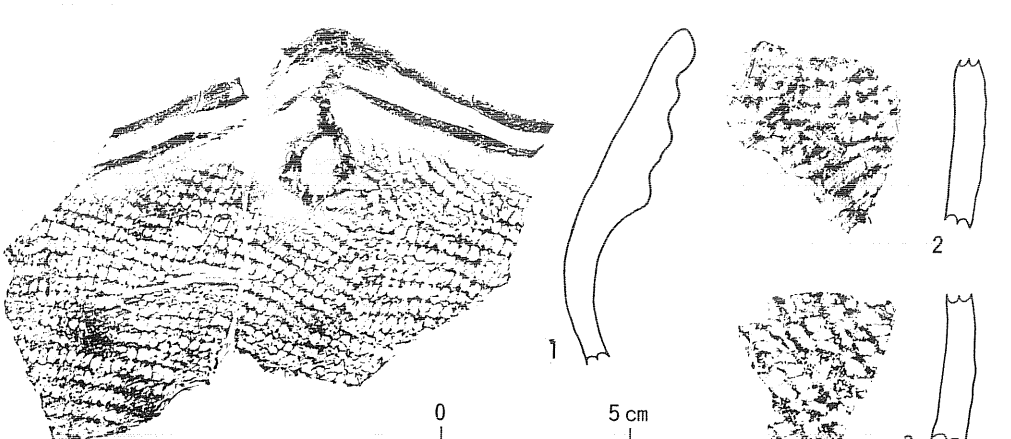


第40図　SKF 26フラスコ状土坑出土土器拓影

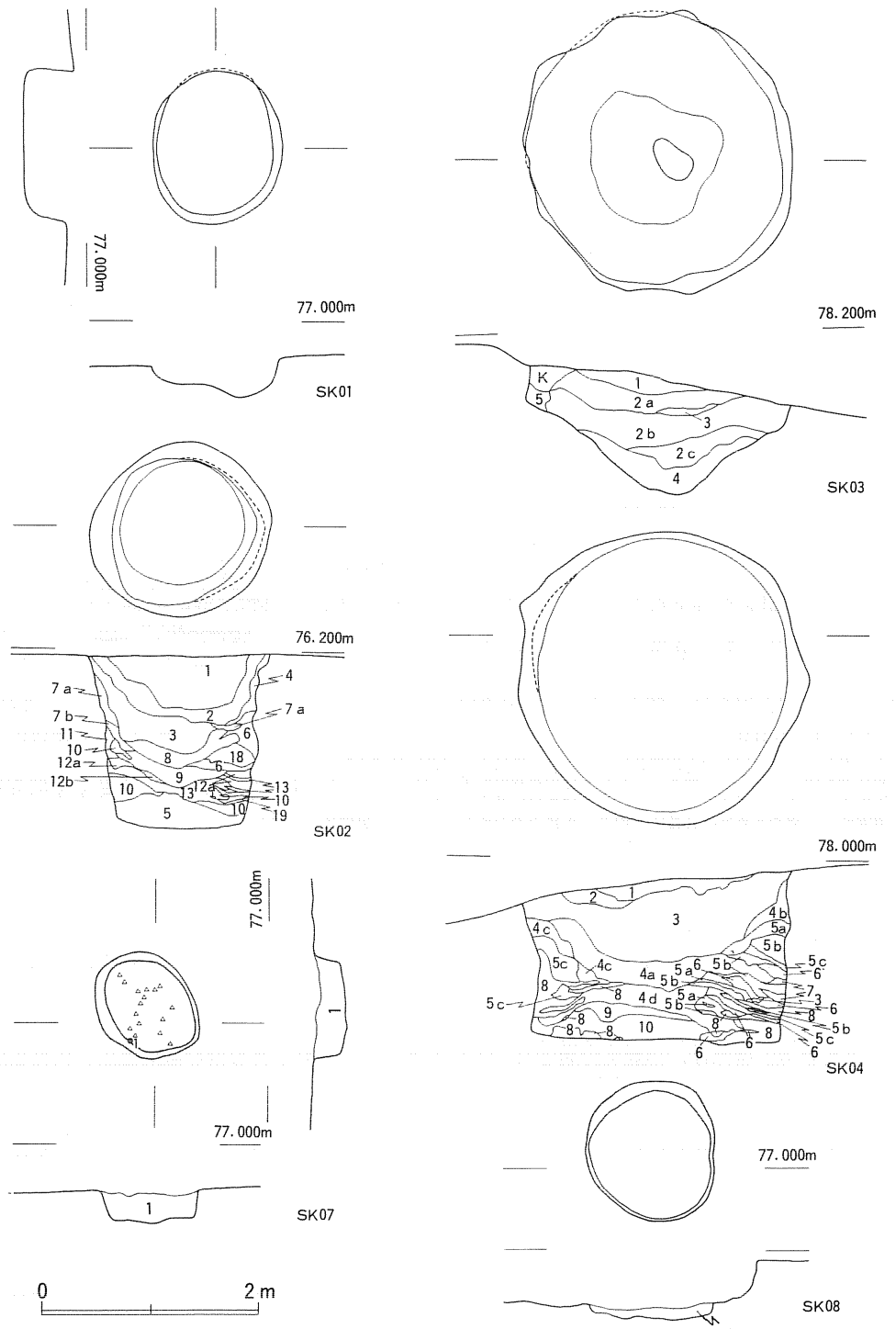
ＳＫＦ26フラスコ状土坑土層註記
１ａ：黒褐色土　黄褐色土粒、少量の炭化物混入　１ｂ：黒褐色土　微細黄褐色土粒の混入が１ａ層より多く　１ａ層より黄褐色味が強い　２ａ：黒色土　黄褐色土粒少量混入　２ｂ：黒色土　黄褐色土粒の混入２ａ層より減少　２ｃ：黒色土　２ａ層より黄褐色土粒の混入が多い　２ｄ：黒色土　２層中黄褐色土粒の混入最も多い　３ａ：暗黄褐色土　多量の黄褐色土粒、若干の同ブロック混入　３ｂ：暗黄褐色土　３ａ層よりも黄褐色土ブロック多量に混入

ＳＫ01土坑（第41図・第42図）

LR51グリッドで、SKF15の東側に近接して検出した。平面形は、楕円形を呈する。規模は、開口部径142×120㎝、深さ35㎝、底径134×109㎝を測る。底面には若干の凹凸がある。埋土は、黄褐色土粒が混入する黒色土である。遺物は、縄文土器片３点出土しており、１は、波状口縁の頂部からつり輪状にした粘土紐を貼り付け垂下させ、口縁部では沈線を巡らせている。



第41図　SK01土坑出土土器拓影



第42図　SK01～SK04、SK07、SK08土坑実測図

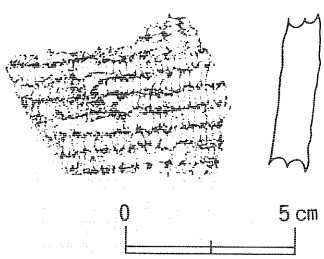
ＳＫ02土坑（第42図）

MA59グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、断面形はビーカー形であるが、いずれの壁面も大小の凹凸が観察される。これは本土坑を掘り下げる時に用いた工具の痕跡というよりは、使用中、又は廃棄後の剥落と推定される。規模は、開口部径168×163㎝、深さ160㎝、底径117×114㎝を測る。埋土は21層に分層され軽石、黄褐色土粒を含む黒色土、黒褐色土、黄褐色土小ブロックを含む黒色土に大別されるが、壁際に壁面の剥落したものと思われる黄褐色土、同ブロック等の堆積が観察される。遺物は出土しなかった。

ＳＫ02土坑土層註記
１：黒色土　若干の黄褐色土粒、軽石を含む　２：黒色土　少量の黄褐色細粒、若干の炭化物、軽石を含む　３：黒色土　少量の黄褐色土小ブロック、軽石粒混入　４：黒褐色土　やや多量の黄褐色細粒、少量の黄褐色土粒混入　５：黒色土　黄褐色小ブロック少量混入　６：暗黄褐色土　多量の黄褐色土粒、同小ブロック混入　７ａ：暗黄褐色土　やや多量の黄褐色土粒混入　７ｂ：暗黄褐色土　７ａ層より多量の黄褐色土粒混入　８：黒色土　やや大きめの黄褐色土ブロック少量混入　９：黒褐色土　やや多量の黄褐色土粒混入　10：黄褐色土ブロック　11：黒褐色土　黄橙色土粒やや多量に混入　12a：暗黄褐色土　黄褐色土粒、黄橙色土粒多量に混入　12b：暗黄褐色土　黄褐色土粒、黄橙色土ブロックを含む　13：黒褐色土　９層より黄褐色土粒混入量少ない　14：黒色土　黄褐色土粒をほとんど含まない　15：暗黄褐色土　６層とほぼ同じだが黄褐色土粒の混入少ない　16：黒色土　少量の黄褐色土小ブロック混入、軽石粒含まず　17：黒褐色土　少量の黄褐色土大ブロック、黄褐色土粒混入　18：暗黄褐色土　６層よりさらに多量の黄褐色土粒混入、　19：暗褐色土　硬質

ＳＫ03土坑（第42図・第43図）

調査区南端近くのMH34・35グリッドで検出した。平面形は円形で、すり鉢形の断面形を呈する。規模は、開口部径265×246㎝、深さ115㎝、底径46×26㎝を測る。埋土は、８層に分層された。出土遺物は、縄文土器片２点である。



第43図　SK03土坑出土土器拓影

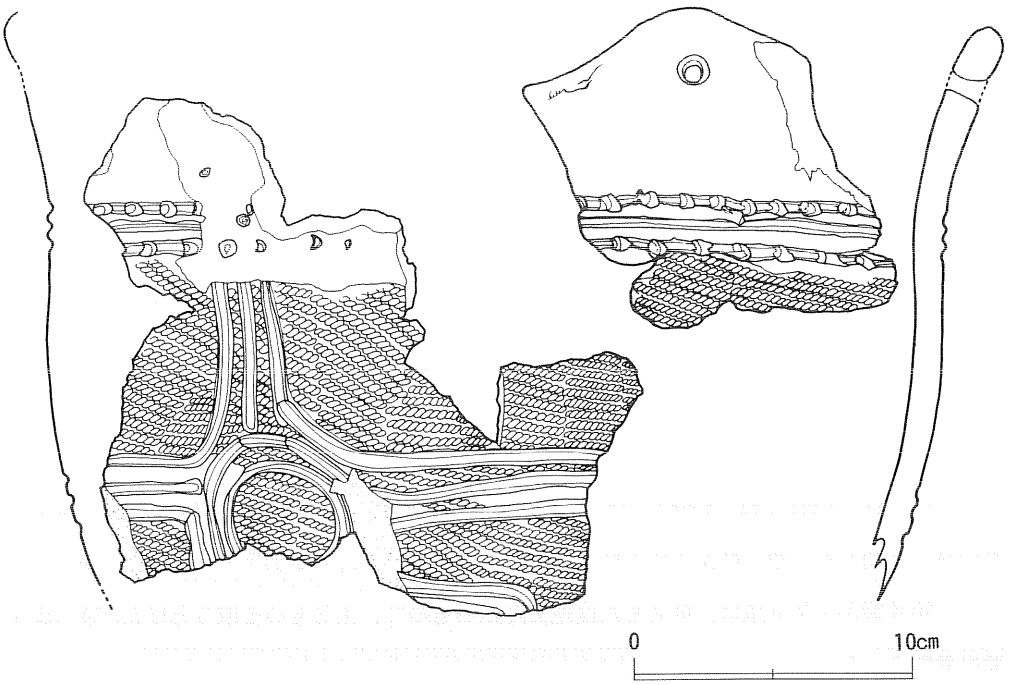
ＳＫ03土坑土層註記
１：黒色土　黄褐色粒子を少量含む　２ａ：黒色土　少量の黄褐色粒子炭化物を含む　２ｂ：黒色土　やや多量の黄褐色粒子、少量の同小ブロック混入　２ｃ：黒褐色土　ブロックを含まない黄褐色土粒子混入　３：黒褐色土　やや大きめの黄褐色土粒子、少量の炭化物混入　４：暗黄褐色土　多量の黄褐色土粒、同大小ブロック混入　５：黒褐色土　黄褐色土大ブロック混入

ＳＫ04土坑（第42図・第44図）

調査区南端のMH33、MK33グリッドで検出した。平面形は、円形を呈する。規模は、開口部径273×269㎝、深さ158㎝、底径256×236㎝を測る。ほぼ平坦な底部から立ち上がる壁には凹凸が見られる。埋土は、15層に分層され、黄褐色土粒と同ブロックを含む黒褐色土、黄橙色土を主体とする。出土遺物は、縄文土器１個体である。口縁は波状を呈し、波頂部下に穿孔している。穿孔は、両側からなされている。口縁部と胴部は半截竹管の押し引きと沈線により区画され、胴部はLR縄文を施文後、沈線で文様が描かれる。口縁部の文様は、半截竹管文のほか、断面が円形の工具による刺突と思われる痕跡も観察される。

ＳＫ04土坑土層註記
１：黒褐色土　黄褐色土粒少量混入　２：暗褐色土　微細褐色土粒やや多量に混入　３：黒色土　少量の黄褐色土粒同小ブロック土やや多量に混入　４ａ：黒褐色土　黄褐色土大小ブロックやや多量に混入　４ｂ：黒褐色土　４ａ＋黄褐色土粒　４ｃ：黒褐色土　４ｂ層にさらに微細黄褐色土粒混入　４ｄ：黒褐色土　４ａ層より黄褐色土大小ブロックの混入が減少　５ａ：暗黄褐色土　黄褐色土ブロック（大・小）混入。５層中で黒色土の混入量最も多い　５ｂ：暗

黄褐色土　多量の黄褐色土粒、同ブロック混入　　５ｃ：暗黄褐色土　５ｂ層よりやや黒色土の混入多め　　６：明黄褐色土　砂粒を含む硬質土層　　７：褐色土　色調はやや暗い　　８：褐色粘質土　色調は７層より明るい　　９：黄橙色土　黄橙色ブロックやや多量に混入　　10：黄橙色硬質土　成分は６層に近い

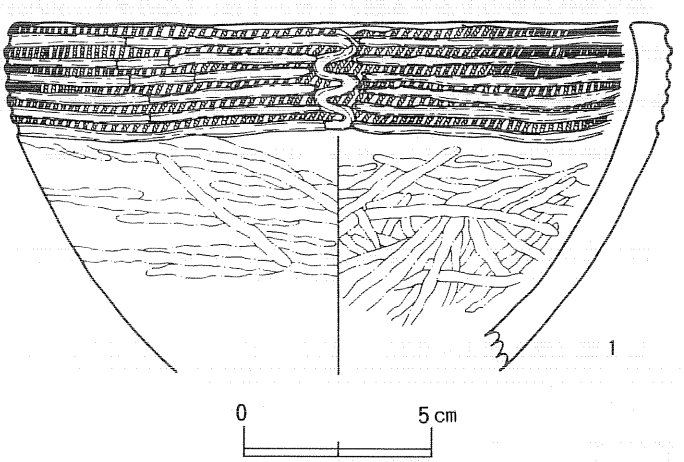


第44図　SK04土坑出土土器実測図

ＳＫ07土坑

（第42図・第45図・図版４）

LT53グリッドで検出した。上半部は平安時代のSI07竪穴住居跡の構築時に失われている。平面形は楕円形を呈する。遺存している部分の規模は、開口部径112×89㎝、深さ28㎝、底径98×74㎝を測る。埋土は、黄褐色土粒、焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土である。浅鉢形土器破片と自然石が出土した。１は口縁部文様帯にLR縄文を施文した後、Ｓ字状の沈線を垂下させ、さらに横位に沈線を巡らせている。内外面ともよく研磨されている。



第45図　SK07土坑出土土器実測図

ＳＫ07土坑土層註記
１：黒褐色土　少量のローム粒子、焼土粒と炭化物混入。

ＳＫ08土坑（第42図・図版４）

MB51グリッドで検出した。上半部は平安時代のSI08竪穴住居跡構築時に失われている。平面形は円形を呈する。遺存部分の規模は、開口部径132×120㎝、深さ21㎝、底径116×114㎝を測る。埋土は、軽石を含む黄橙色土である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ08土坑土層註記
１：黄橙色土　ややしまりに欠け、軽石を含む

(4)　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物としては、縄文土器片、土製品、石器・石器剥片などである。縄文土器片は90点以上出土したが、地文のみのものが大部分を占め、何らかの文様を有するものは10数点を数えるのみである。土製品としては、板状土偶の胴部片１点。石器・石器剥片は合計６点出土しており、凹石１点が含まれる。

縄文土器片

出土地点は、LS56・58、LQ56・57、LT53、LR51の各グリッドである。これらを第１類から第10類に分類した。第１類から第５類までは、時期が特定されるものまたは文様を有するものとし、第６類から第９類は、無文または地文のみのもので、主なものを取りあげた。第10類は、底部資料とした。

第１類（第46図１）

縄文時代早期の土器を本類とした。１は、LQ57グリッド内の黒色土中から出土した。尖底部は乳頭状を呈しており、貝殻腹縁文が押圧施文されている。外面は丁寧なナデにより平滑に調整されているが、内面はやや粗い調整で凹凸が著しい。胎土には、石英粒と砂粒が混入している。現高9.4㎝、器厚1.5～２㎝、尖底部の厚さ4.6㎝を測る。

第２類（第46図２・３）

隆線または沈線により渦巻文などの文様が描かれるものである。大木8b式に比定されると思われる。

第３類（第46図４～９）

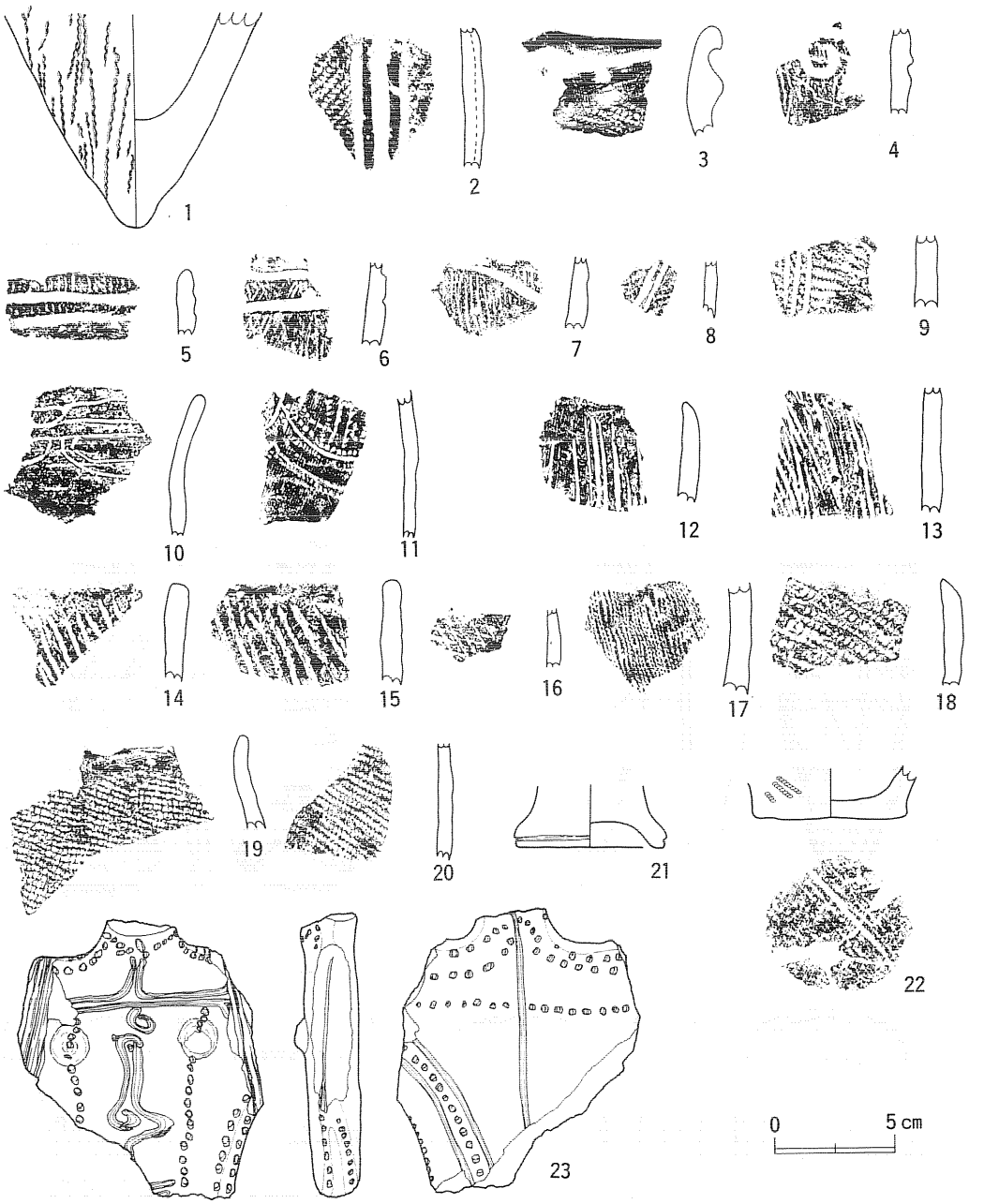
沈線により直線または曲線を描くものである。５～７は地文にＬの撚糸文が施されており、煤が付着している。

第４類（第46図10）

細い沈線により口縁部文様帯が構成されるもので、十腰内Ｉ式に含まれると思われる。

第５類（第46図11）

沈線と刺突文により文様が構成されるものである。刺突文は、棒状工具により押し引きの手法で施文されている。11は大きな突起の両側に粘土を貼り付けて二又状の小突起とし、そこか



第46図　遺溝外出土遺物実測図　(1)

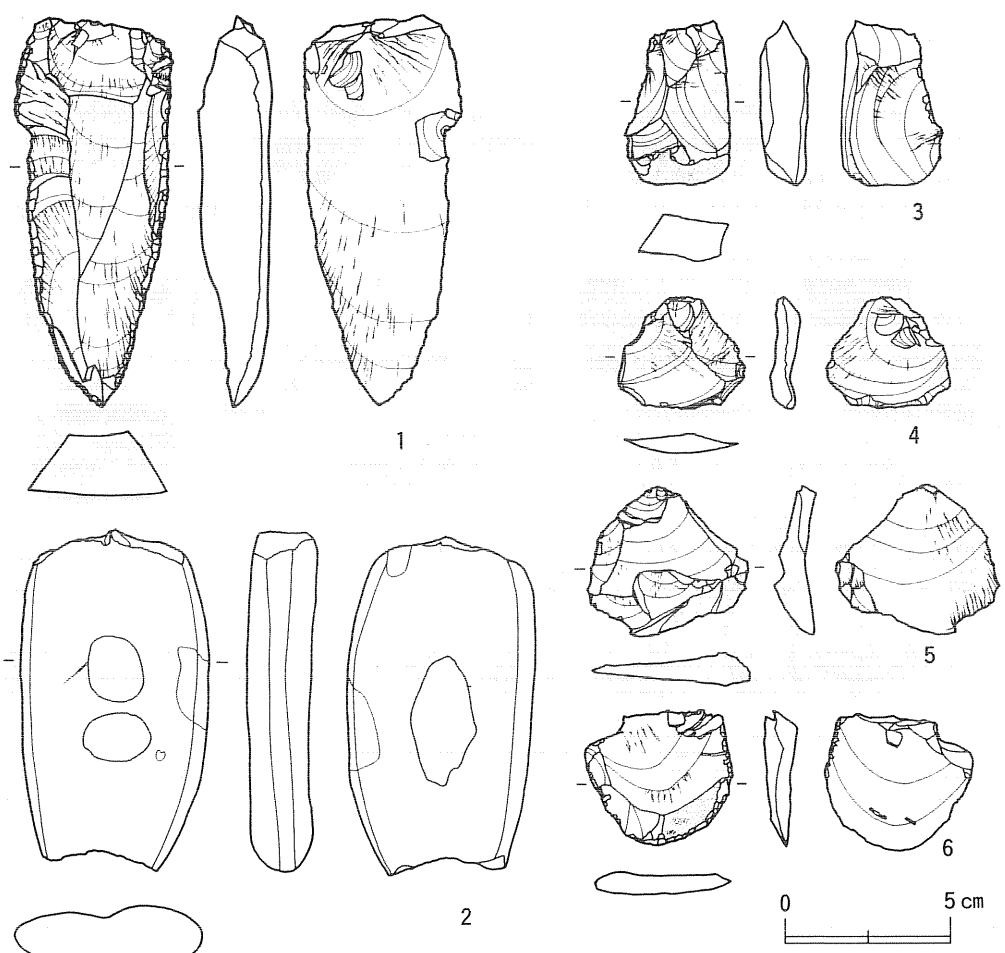
ら沈線を孤状に描き、それに沿って刺突文が施されている。さらに大突起から同様の刺突文を垂下させている。

第６類（第46図12、13）条痕文を施文するものである。第７類（第46図14～17）撚糸文を施文するものである。第８類（第46図18）異条縄文を施文するものである。第９類（第46図19、20）RLの縄文を施文するものである。第10類（第46図21、22）底部資料を一括した。21は台付

鉢の高台部分で下部に１条の沈線が巡る。22は、笹の葉と思とわれる葉脈痕が観察される。

土製品（第46図23・図版８）

板状土偶１点である。出土地点は、MB51グリッド内平安時代の竪穴住居跡（SI08）の床面である。住居埋没過程で粉れ込んだものであろうか。頭部、両腕、両足が欠失しており、遺存部分は胴部のみで板状である。最大長11.7㎝、最大幅10.4㎝、最大厚 2.4 ㎝を測る。胸部に粘土を貼り付けて乳房を表現しているほか、全体を沈線と棒状の工具による点列刺突で飾っている。沈線は、首から胸部にかけて直線的に引かれ、胸部から腹部にかけては曲線的に引かれている。点列の刺突は、首の前面と肩にかけて、そして胸部の左右の乳房のやや上方の沈線で区画された所から腰部にかけて、さらに脇の下から下方に見られる。背中については、首筋から背骨に沿って１条の沈線が引かれ、左の肩甲骨の下あたりから腰部にかけて２条の弧状の沈線



第47図　遺構外出土遺物実測図　(2)

が引かれ、その間を点列刺突で埋めている。刺突は首筋から肩口に２列の弧状に穿たれ、さらに左の肩甲骨から右の肩甲骨のあたりに向かって背骨に直交するように穿たれている。沈線の断面は、「Ｕ」字形を呈している。刺突のほうは、棒状工具を用いて押し引きの手法で点列させている部分と、比較的垂直方向から入れて回転させている部分が観察される。前者は首のまわりと背中に認められ、後者は胸部から腹部にかけての刺突に認められる。刺突痕の断面形は、円形のものと正方形に近い方形のものに分けられる。種類の異なる工具を用いたものか、同一の工具の用い方で上記の違いが出てくるのかは不明である。両腕はすでに欠失しているが、その腕の付け根部分の断面の胎土を観察すると、煤が付着したように黒変している。この黒く変色している部分をよく観察すると、肩口から脇の下にかけて数条の「溝」が走っているのが認められる。この部分の胎土の粒子は、粗くなく平滑であることから「溝」は燃成前にすでにあったことが窺われる。

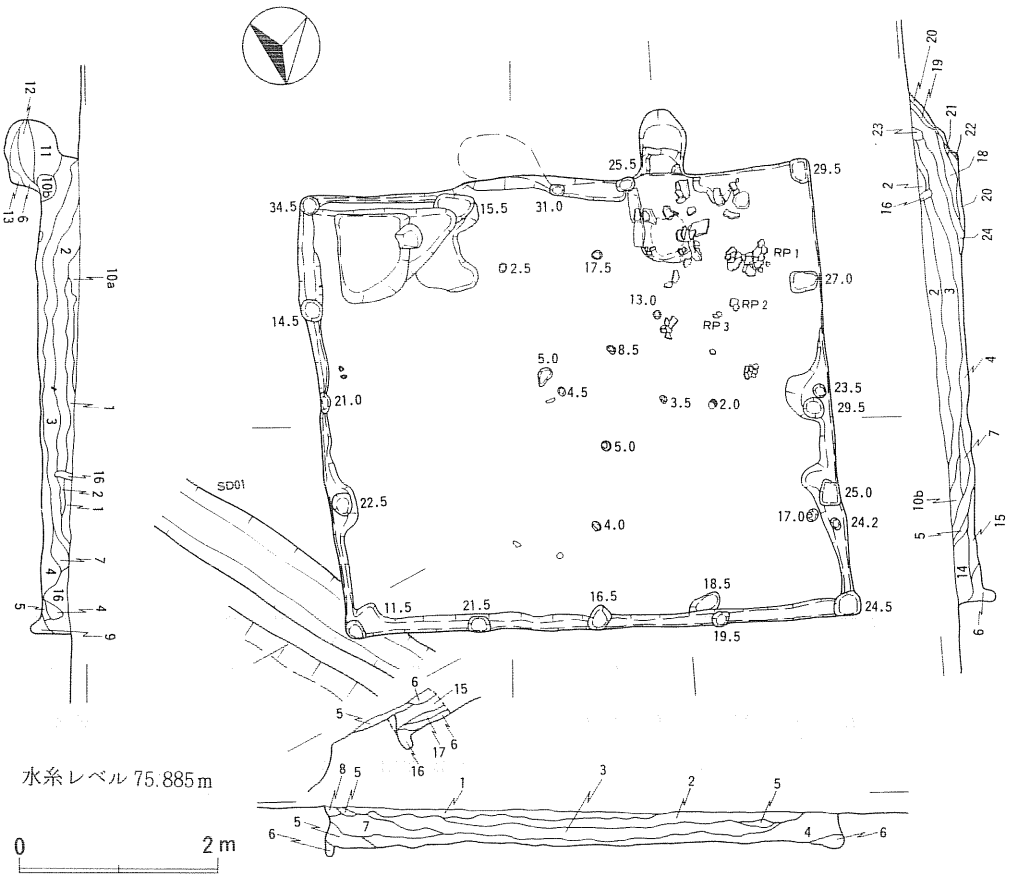
石器・石器剥片（第47図１～６・図版８）

１は、平安時代の竪穴住居跡（SI02）の覆土中から出土した。主要剥離面の両側縁に細かい調整を行っている。最大長11.8㎝、最大幅4.8㎝、最大厚4.8㎝を測る。２は、表採資料で最大長10.5㎝、最大幅5.8㎝、最大厚1.8㎝を測る。片側に２箇所、反対側に１箇所くぼみが観察される。３～６は、LS56グリッド出土で、いずれも自然面を残している。

２　平安時代

ＳＩ０１竪穴住居跡（第48図～50図・図版４）

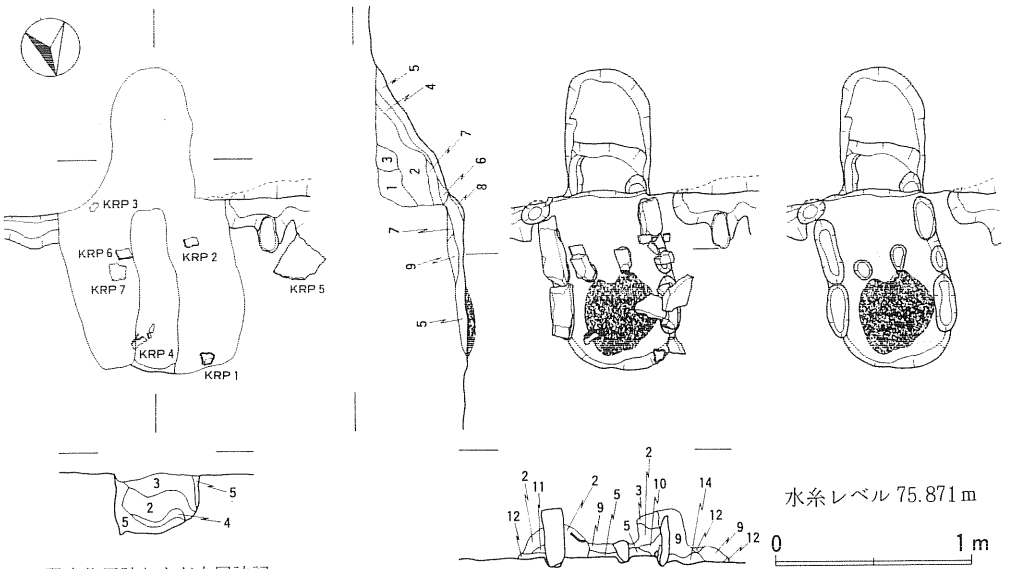
LT61～63、MA62・63の各グリッドにまたがり、ＳＤ０１と重複するが、ＳＤ０１が新しい。方形プランを呈し、南西隅部近くの南側壁にかまどが付設され、かまどの東側に貯蔵穴と思われる地下式の張り出し部が検出された竪穴住居跡である。主軸方位がＳ－１°－Ｅで壁長は南側518㎝、西側466㎝、北側517㎝、東側451㎝で、南北方向が若干長く、各壁面とも土圧のためか、内傾していた。プラン確認面から床面までの深さは、南側壁40～60㎝、西側壁30～40㎝、北側壁30～40㎝、東側壁50～60㎝を測る。埋土は17層に分層された（18～24層はかまど内の分層である）。床面は、よく踏み固められているが、南東隅部近くでは深さ65㎝の方形プランを呈する土坑が掘り込まれたあと埋め戻されていた。柱穴は各隅部と南側壁を除き各壁下に等間隔４等分するように配置されている。南側壁下は、付属施設のため柱穴間隔が乱れている。南西隅部を除き各壁下方には、深さ７～15㎝の壁溝が巡っている。南側壁中央からやや東側に幅90㎝、奥行70㎝、高さ50㎝の卵形を呈する地下式の張り出し部が付設されている。また、この張り出し部と南西隅部との間にかまどが付設されている。かまどの両袖部には板状節理の自然石を立



S I 01竪穴住居跡土層註記
1：黒色土　微細軽石粒を多量に含む　2：黒色土　1層よりさらに多量の軽石粒混入　3：黒色土　軽石粒子が、1層、2層より大きくなるが、混入量は少ない　4：暗黄褐色土　やや多めの黄褐色土粒混入　5：黒褐色土　黄褐色土粒少量混入　6：黒褐色土　黄褐色土ブロック混入　7：黒褐色土　浮石粒混入　8：黄橙色土　壁面の崩壊　9：黄褐色土　少量の黒色土を含み、黄褐色土をブロック状に堆積　10a：黒色土　10b：黒色土　黄褐色土少量混入　11：黒褐色土　黄褐色土粒、浮石混入　12：暗黄褐色土　サラサラの黄褐色土粒を多量に混入　13：暗黄褐色土　黄褐色土粒と同小ブロック混入　14：黒褐色土　多量の黄褐色土粒と同小ブロック混入　攪乱か　15：黒褐色土　黄褐色土小ブロックやや多めに混入　16：黒色土　根による攪乱　17：暗黄褐色土　暗褐色土やや多めに混入

第48図　S I 01竪穴住居跡実測図

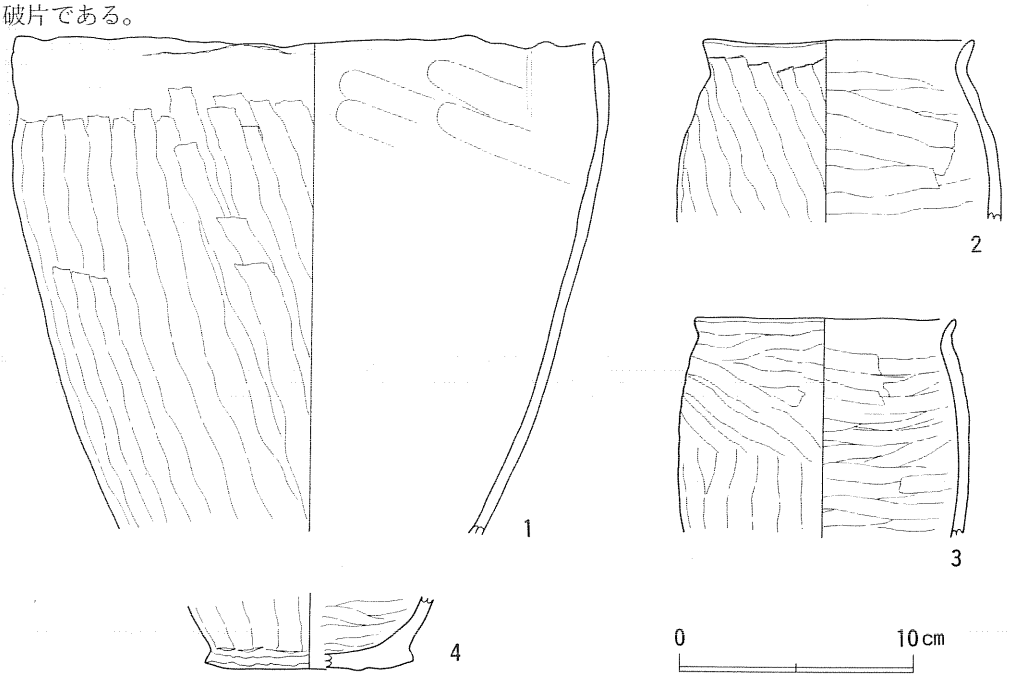
て並べて芯材とし、その周囲に粘質土を積んでいる。支脚にも自然石を使用している。煙道部は段差をもって掘り込まれているが、埋め戻しが行われ底面が急角度で上昇している。遺物は少なく、かまど前面西側で復原可能な甕形土師器１個体（１―RP１）の他、同破片数点が出土したにとどまる。１はRP１とKRP５が接合したもので口径24.2㎝、現現21.2㎝をはかる粘土紐巻上げ痕の残る甕形土師器である。外面を箆削りしている。胎土に多量の礫を混入し、にぶい橙色を呈するが、胴部外面に煤状炭化物が付着している。２（KRP６）は、胎土に砂粒を混入し外面箆削り内面箆なで調整され、にぶい橙色～浅黄橙色を呈する甕形土師器口縁部破片である。３（KRP７）も２と同じ調整がなされ胎土に砂粒を多く混入し浅黄橙色を呈する甕形土師



ＳＩ01竪穴住居跡かまど土層註記
１：暗褐色土（10Ｙ Ｒ 3/3）　地山ローム塊を若干混入する　２：淡黄色粘土（ 2.5Ｙ 8/4）　天井部及び袖部粘土か　３：明黄褐色土（ 2.5Ｙ 6/6）　粘土小塊、地山ローム塊を若干混入する　４：暗褐色土（10Ｙ Ｒ 3/3）　大湯浮石を多量に混入する　５：暗褐色土（10Ｙ Ｒ 3/4）　焼土小塊を若干混入する　６：明赤褐色焼土（５Ｙ Ｒ 5/8）　７：にぶい赤褐色粘土（５Ｙ Ｒ 5/4）　焼土塊（塼状）を多量に混入する。（天井下部熱変化部か）　８：褐色土（10Ｙ Ｒ 4/6）　地山ローム粒を混入する　９：灰白色粘土（10Ｙ 7/1）　天井部及び袖部粘土か　10：灰白色粘土（10Ｙ 7/1）　袖部粘土か　11：にぶい黄橙色粘土（ 7.5Ｙ Ｒ 7/3）　12：にぶい黄橙色土（10Ｙ Ｒ 7/4）　地山ローム粒を多く混入する　13：褐色粘土（ 7.5Ｙ Ｒ 4/3）　14：にぶい黄橙色粘土（10Ｙ Ｒ 7/4）　15：９に同じ

第49図　ＳＩ01竪穴住居跡かまど実測図

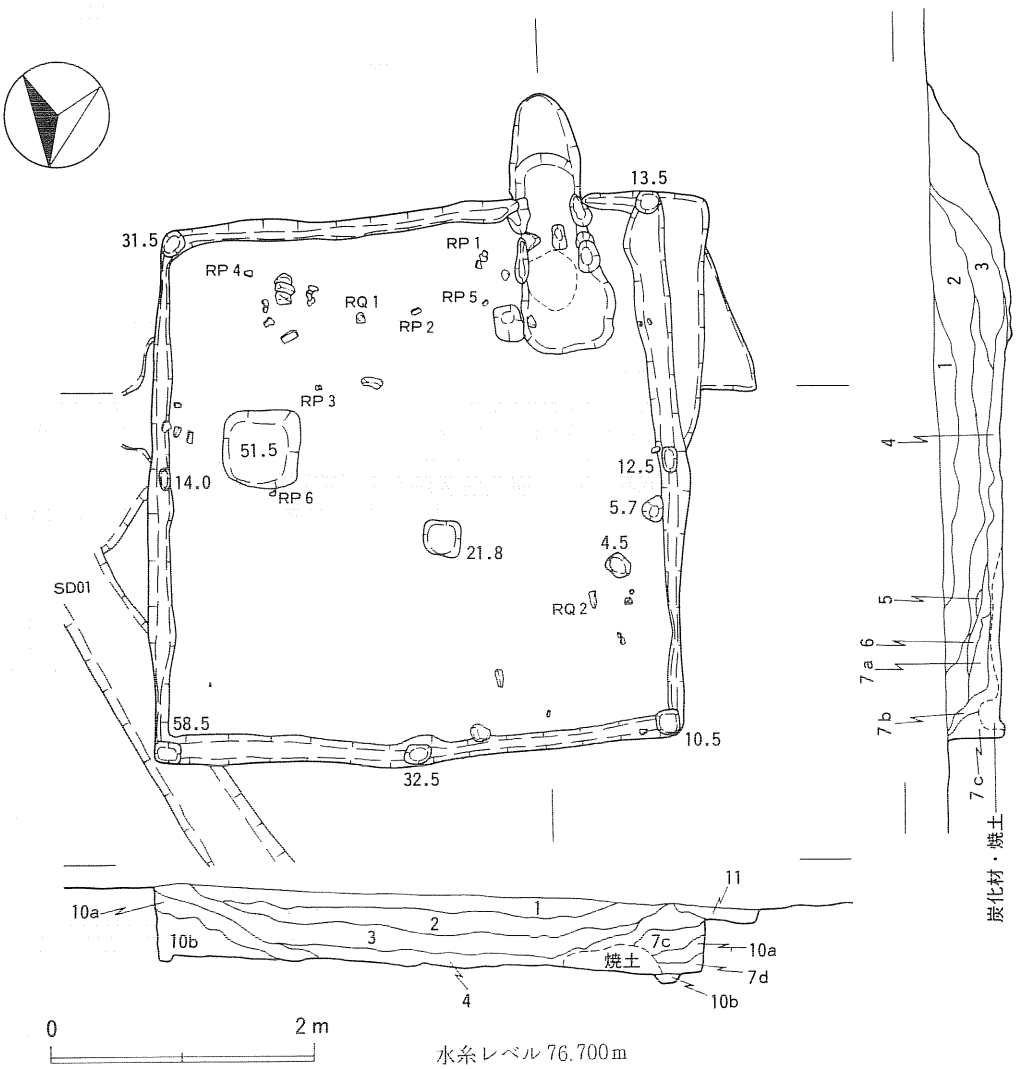
器口縁部破片である。４（ＫＲＰ１）は底部外面の全面に大粒の砂礫が付着する甕形土師器底部破片である。



第50図　ＳＩ01竪穴住居跡出土土器実測図

ＳＩ０２竪穴住居跡（第51図～第53図・図版４）

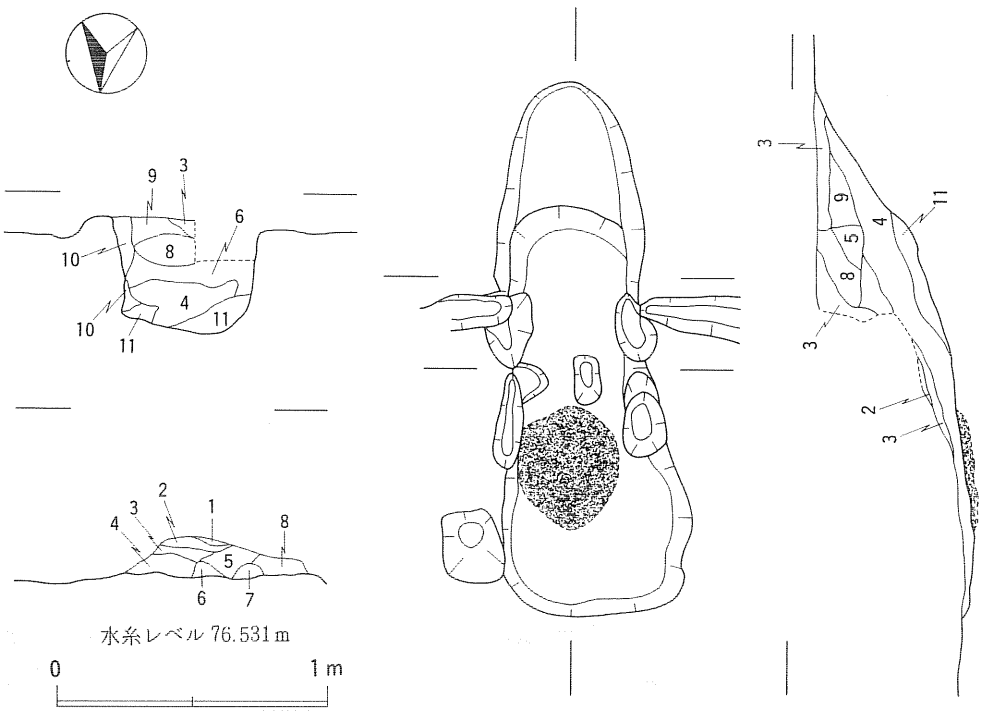
LS59、LT58・59、MA58・59の各グリッドにまたがり、SD01と重複するがSD01が新しい。方形プランを呈し、南西隅部近くの南側壁にかまどが付設されており、床面に炭化物が厚く堆積する竪穴住居跡である。主軸方位がＳ－８°－Ｅで、壁長は南側382㎝、西側414㎝、北側400㎝、東側406㎝をはかる。西側壁中央から南西隅部にかけて、１段高く、張り出しが検出されているが、これが当初の掘り込みプランであろう。プラン確認面から床面までの深さは、南側壁40



ＳＩ02竪穴住居跡土層註記
１：黒色土　軽石混入　２：黒色土　１層より軽石粒の混入が多い　３：黒色　軽石粒が混入し黒味が強い　４：黒褐色土　少量の軽石粒とローム粒混入　５：黒褐色土　少量のローム粒と多量の軽石粒混入　６：黒色土　ローム粒塊少量混入　７ａ：黄褐色土　ローム粒、塊と少量の軽石粒混入　７ｂ：暗黄褐色土　７ａよりローム塊が少なく、砂質褐色土の混入目だつ　７ｃ：暗黄褐色土　砂質褐色土を含むがローム塊が多く混入　７ｄ：７ｃに黒色土粒混入　８ａ：黄褐色砂質粘土　８ｂ：黒褐色土　黒色土粒と砂質粘土混入　９：黒褐色土　少量のローム粒混入　10ａ：黒褐色土　黒色土を主体として、少量のロームブロックと軽石粒を混入　10ｂ：黒褐色土　ローム粒と軽石粒を混入する

第51図　ＳＩ02竪穴住居跡実測図

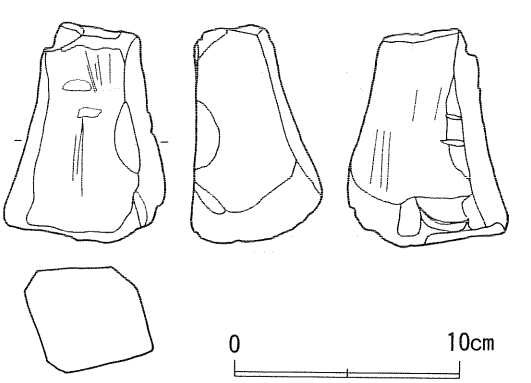
～60㎝、西側壁20～50㎝、北側壁30～40㎝、東側壁50～60㎝で、よく踏み固められている。埋土は14層に分層された。東側壁中央部近くの床面には、東西56㎝、南北58㎝、深さ51㎝の方形



ＳＩ02竪穴住居跡かまど土層註記
１：黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/1）　２：黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/2）　地山ローム粒を混入する　３：黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/3）　浮石粒、地山ローム粒を多量に混入する。ザラザラ　４：黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/2）地山ローム塊を少量混入する　５：褐色粘土（ 7.5Ｙ Ｒ 4/3）　粘土と地山（砂質）ローム粒の混合　６：黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/3）　地山の砂質ローム粒を多く混入する　７：黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/2）　８：にぶい橙色粘土（ 7.5Ｙ Ｒ 7/3）　地山ローム粒を混入する　９：にぶい黄橙色土（10Ｙ Ｒ 7/4）　粘土を混入する　10：黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/2）　間隙あり。パサパサ　11：暗赤褐色土（５Ｙ Ｒ 3/4）　焼土、地山砂質ローム粒を多量に混入する。ザラザラ

第52図　ＳＩ02竪穴住居跡かまど実測図

の掘り込みが検出された。柱穴は各壁隅部と南側を除く各壁中央部下方に７本検出されている。また壁下方には幅11～22㎝、深さ６～10㎝の壁溝が巡っている。西側壁下方の床面に炭化材と焼土が厚く堆積しているのが観察された。南側壁中央から南西隅部寄りに、かまどが付設されている。かまどは、両袖部分を長円形に掘り込んだあと手前の床面を幅70㎝、長さ70㎝の隅丸方形状に３～５㎝掘り下げている。両袖の掘り込み部に当初自然石を立てたかどうか、かまどの遺存状況が悪いので不明であるが、調査時には芯材としての石は確認できなかった。また支脚を

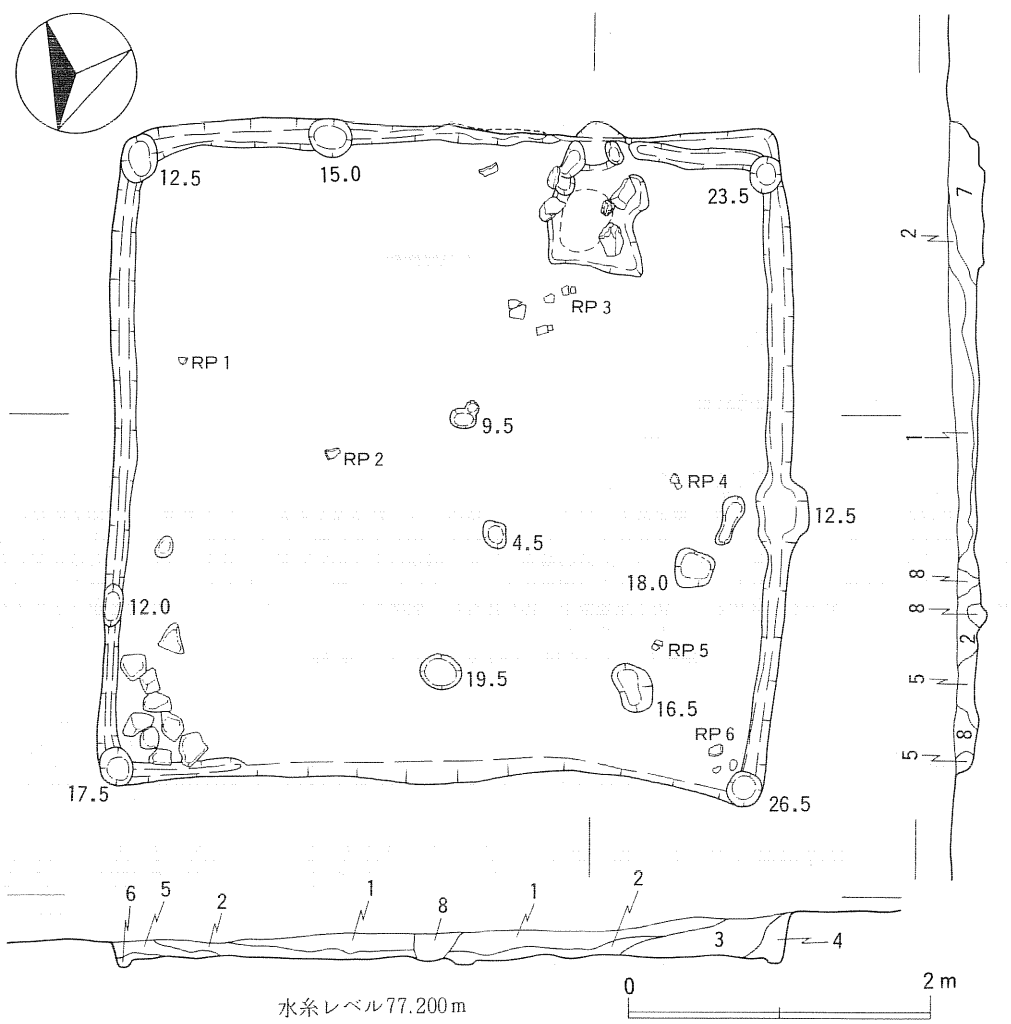


第53図　ＳＩ02竪穴住居跡出土砥石実測図

立てるためのくぼみも検出されたが、支脚は確認できなかった。支脚用くぼみのあたりから煙出孔に向って床面が急上昇する。遺物は少ないが、甕形土師器胴部破片の他、砥石1点（RQ1）と削器（スクレーパー）1点（RQ2）が床面近くから出土している。砥石は軽石製で4つの砥面をもっている。

ＳＩ０４竪穴住居跡（第54図～第56図・図版４・図版９）

LQ55、LR54・55、LS55・56の各グリッドにまたがり、方形プランを呈し、南西隅部近くの南側壁にかまどが付設された竪穴住居跡である。主軸方位がＳ－12°－Ｅ、壁長は南側426㎝、

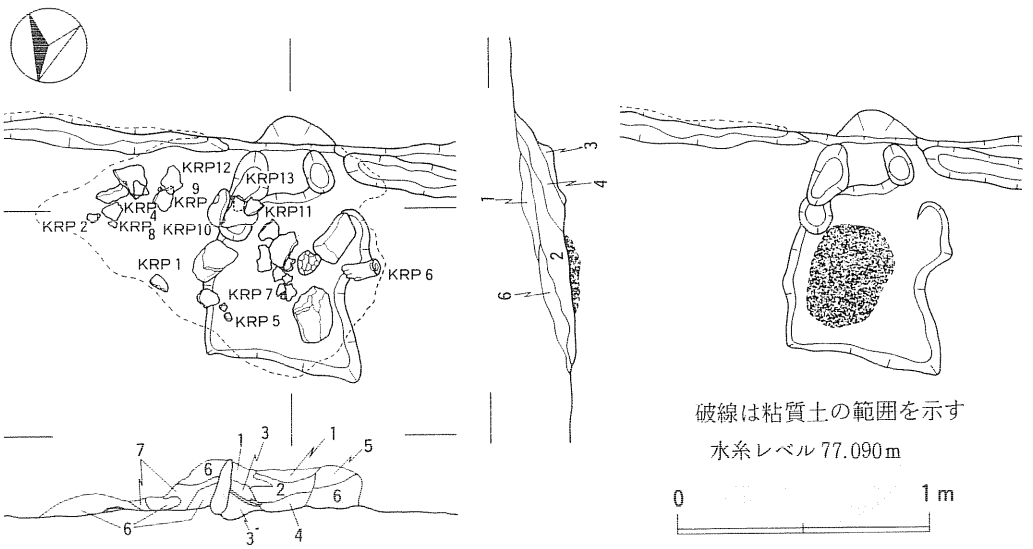


ＳＩ04竪穴住居跡土層註記
１：黒色土　軽石粒を少量混入　２：黒褐色土　ローム粒、塊を混入　３：黒褐色土　２層よりローム塊を多く混入する　４：暗黄褐色土　ローム大塊混入　５：黒褐色土　ローム塊少量混入　６：暗黄褐色土　ローム粒多量混入　７：黒褐色土　粘土質の土を含む　８：攪乱

第54図　ＳＩ04竪穴住居跡実測図

西側452㎝、北側429㎝、東側432㎝であるが南側と東側の壁面は土圧により内傾していた。プ

ラン確認面から床面までの深さは南側壁20～30㎝、西側壁10～15㎝、北側壁10～20㎝、東側壁20～26㎝をはかる。埋土は７層に分層された（７はかまど粘質土）。床面は、北西と北東隅部を除きよく踏み固められている。両隅部は攪乱があり軟弱となっている。柱穴は、各隅部と北側を除く各壁下に各１本の７本が検出された。また北西部側床面に柱穴が散在する。北側壁を除き各壁下方に幅８～16㎝、深さ５～10㎝の壁溝が巡らされている。北東隅部床面に長径20㎝

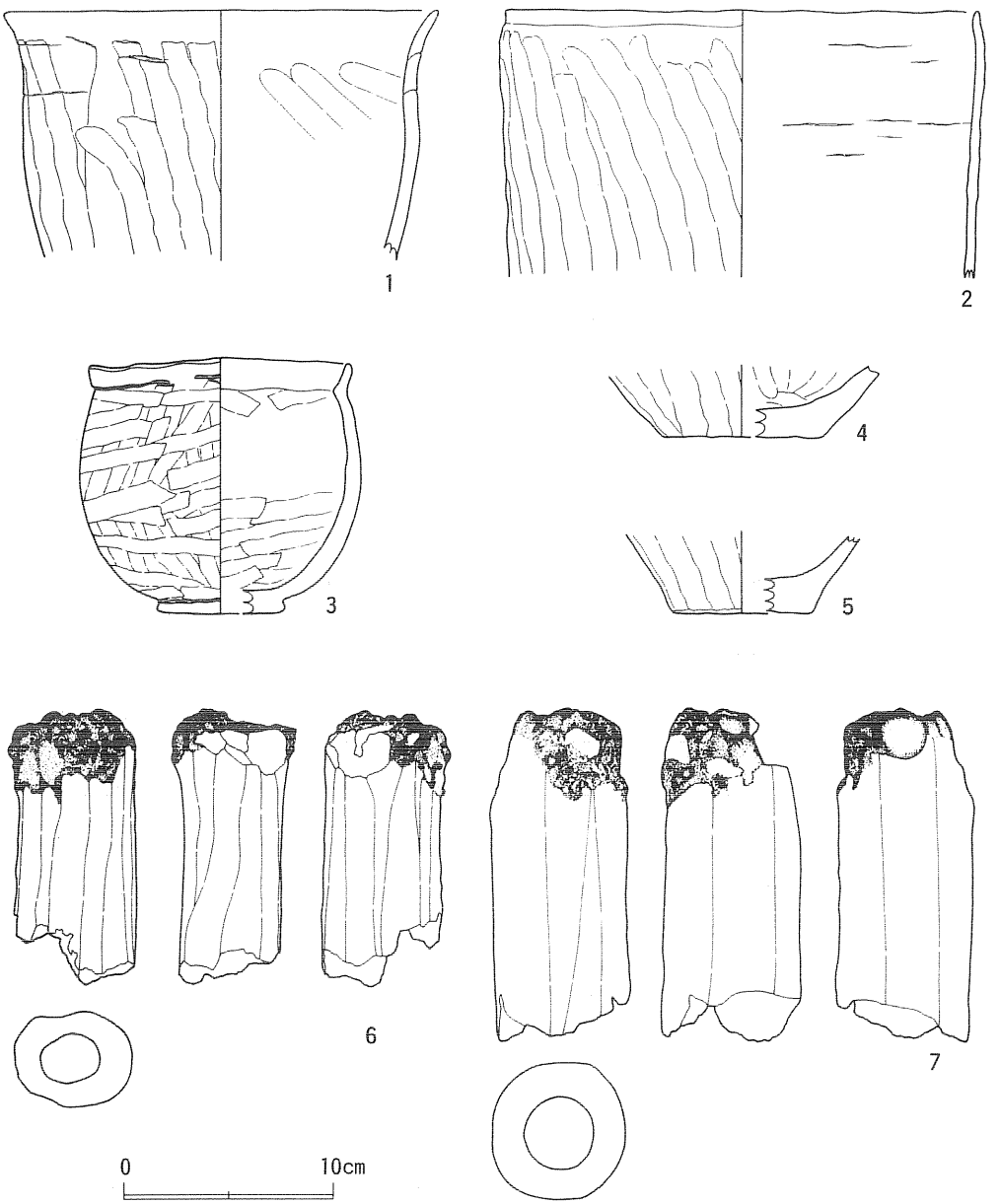


ＳＩ04竪穴住居跡かまど土層註記
１：黒褐色土（10ＹＲ3/2）　浮石粒混入、ザラザラ　２：黒褐色土（10ＹＲ3/3）　浮石粒、地山ローム粒混入　３：にぶい赤褐色粘土（2.5ＹＲ5/4）　４：黒褐色土（7.5ＹＲ3/2）　非常に堅い、地山ローム塊若干混入　５：黄橙色火山灰土（7.5ＹＲ8/8）　地山ローム塊　６：明褐灰色粘土（7.5ＹＲ7/1）　７：褐灰色粘土（7.5ＹＲ4/1）

第55図　ＳＩ04竪穴住居跡かまど実測図

の自然石が集中出土している。かまどは、南側壁中央からやや南西隅部寄りに付設されているが上部が崩壊し、粘質土が広く流れ出している。かまど付設部分の床面を３～５㎝掘り下げている。袖部芯材自然石用のくぼみも掘り込まれている。遺物は、床面上から羽口小破片（RP1）、甕形土師器小破片（RP2～RP6）と自然石が、またかまど流出粘土中から羽口２点（KRP1、６）、甕形土師器破片、かまど中からも甕形土師器破片が出土したがその量は少ない。１（KRP7）は粘土紐巻上げにより成形された甕形土師器の上半部で推定口径20.8㎝、現高12㎝をはかり外面を箆なでしている。胎土に砂礫を多く混入し淡橙色～にぶい橙色を呈する。２（KRP３）は、下半を欠失する甕形土師器である。砂粒を多く混入する粘土紐の巻上げにより成形され短かい口縁部が内傾後直立している。にぶい橙色～浅黄橙色を呈するが、口縁部から胴上半にかけて糊状炭化物が付着している。推定口径22.6㎝、現高12.8㎝。３（KRP5～7）は、口径11.2㎝、器高12.3㎝、底径6.0㎝で最大径を胴部にもつ甕形土師器である。外面を箆削り、内面を箆なで調整している。胎土に砂礫を混入し、にぶい橙色を呈する。４（KRP12）と５（KRP13）は、甕形土師器の底部破片であるが、底部外面の全面に砂粒が付着している。外面は箆削りさ

れている。胎土に砂粒を多く混入し、にぶい橙色～浅黄橙色を呈する。6（KRP6)と7(KRP1）は羽口破片である。一端に溶融物が付着している。6は箆で外面を面取りしている。灰色～にぶい褐色を呈する。

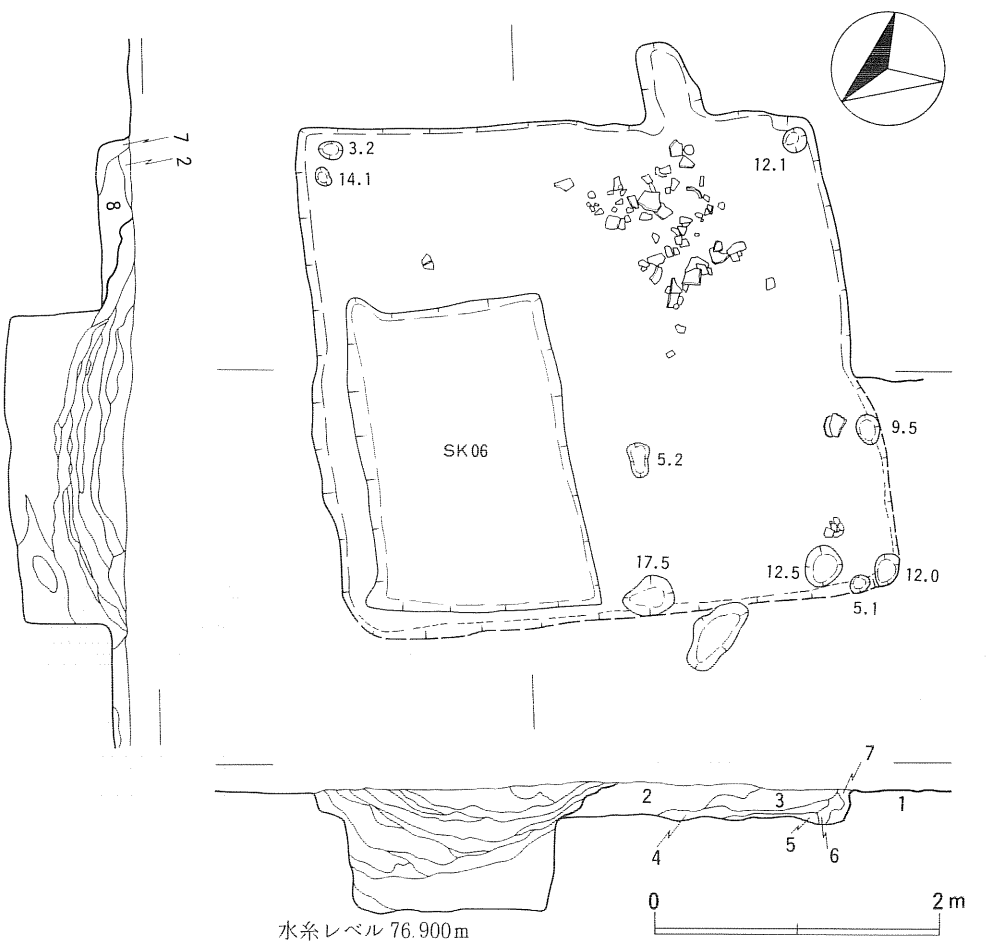


第56図　ＳＩ04竪穴住居跡出土土器・羽口実測図

ＳＩ０５竪穴住居跡（第57図・第58図・図版４・図版９）

LS55・56、LT55・56のグリッドにまたがっているが、プラン確認時、SK06土坑及びSKI06竪穴遺構と重複しており、黄褐色地山ローム塊が多く混入するため、プラン確定が困難であった。

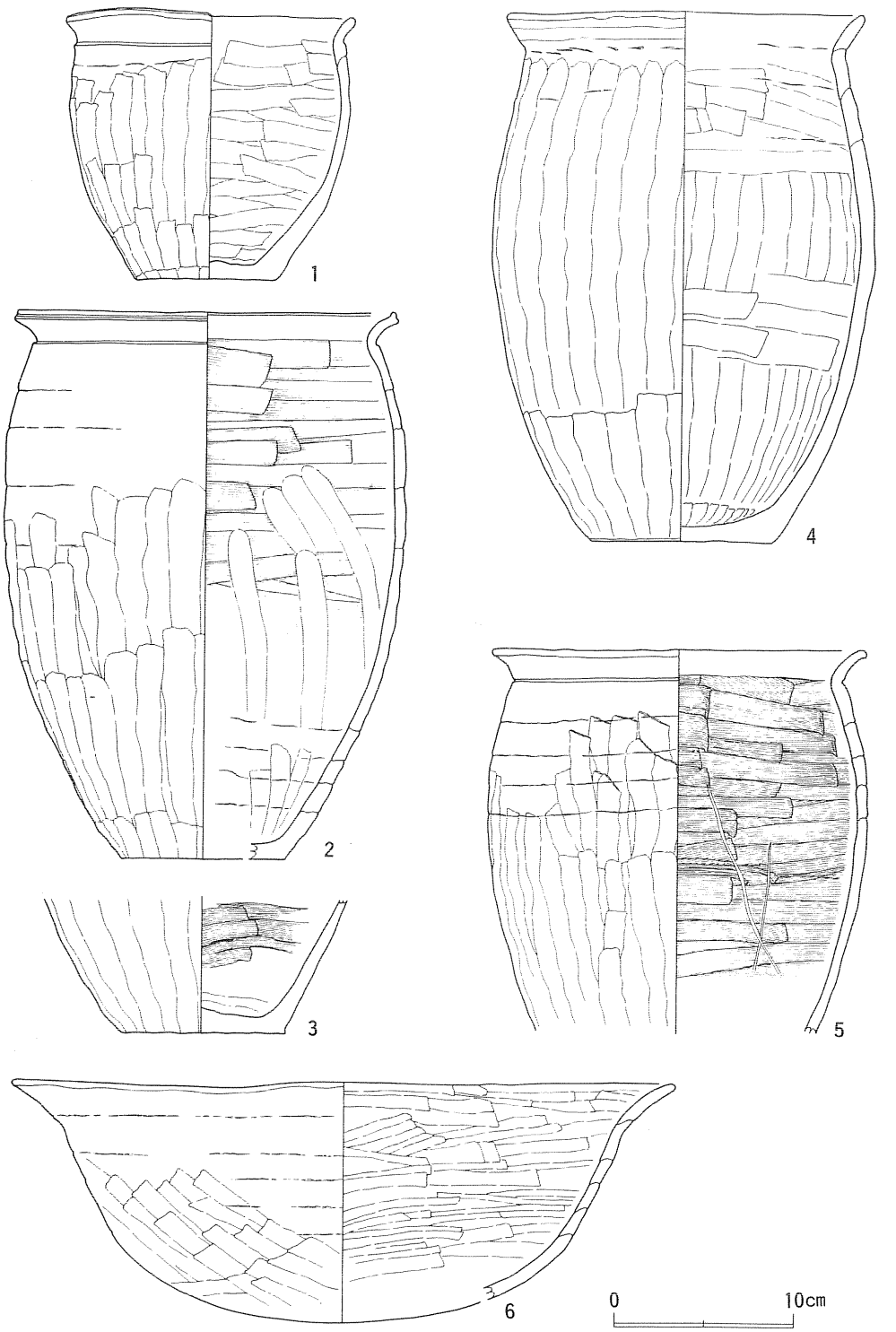
土層観察用ベルトでの確認により、SI05→SKI06→SK06の順で新しくなることがわかった。北側壁と西側壁の北半分をSKI06構築時に削平されているが、主軸方位がＳ―61°―Ｅ、壁長が南側362㎝、西側180㎝（推定330㎝）、北側推定390㎝、東側336㎝の方形プランを呈する。プラン確認面から床面までの深さは、南側壁15～20㎝、西側壁20～25㎝、東側壁15～20㎝で床面はよく踏み固められている。埋土は７層に分層されるが黄褐色ローム塊の混入が多い。これは、SKI06及びSK06掘り込みに伴う排土が堆積したことに起因すると考えられる。柱穴は北西隅部



ＳＩ05竪穴住居跡土層註記
１：暗褐色土　黄褐色土粒少量混入　２：黄褐色土　黄褐色土塊、灰褐色土粒混入　３：暗黄褐色土　黄橙色及び浅黄色土塊混入　４：暗黄褐色土　多量の微小軽石粒と黄褐色土粒を混入　５：黒褐色土　黄橙色土粒少量混入　６：黒色土　少量の軽石粒混入　７：黒褐色土　少量の黄褐色土粒塊を混入　８：浅黄色土　多量の微小軽石粒と浅黄色土粒を混入

第57図　ＳＩ05竪穴住居跡実測図

を除く各隅部と西、北側壁下方に検出された。壁溝は検出されなかった。かまどは、南側壁の中央から南西隅部寄りに付設されているが煙道部によりその存在を確認できた。床面に掘り込みや熱変化による赤色部分は認められなかった。遺物はかまど部分に多く出土した。１は、粘



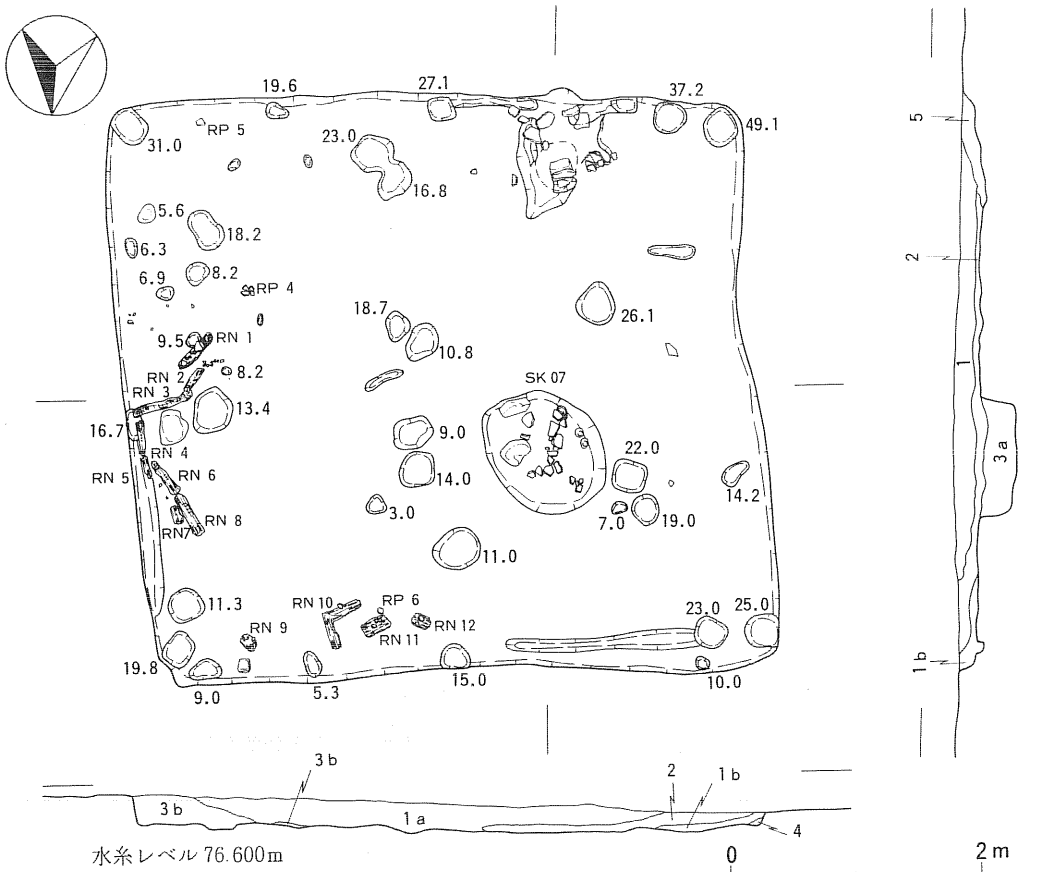
第58図　ＳＩ05竪穴住居跡出土土器実測図

土紐巻上げにより成形された口径 16.2㎝、器高14.8㎝、底径 7.7㎝をはかる甕形土師器である。外面を箆削り、内面と底部外面を箆なでしている。胎土に砂粒を混入し、にぶい橙色を呈するが肩部から胴上半に煤状炭化物が付着している。２は、口径21.2㎝、器高30.6㎝、底径 9.1㎝の甕形土師器である。粘土紐巻上げにより成形され、外面胴部下半と内面上半及び底部外面を箆なでしている。短かい口縁部は大きく外反しているが口唇は両側からつまみ出して横なでした結果として直立している。胎土に砂粒を混入し、にぶい橙色～浅黄橙色を呈する。３は、甕形土師器底部破片である。外面を箆削り、内面と底部外面には箆なでしている。胎土に砂礫を多く混入し、黄橙～にぶい黄橙色を呈する。４は、砂粒を混入する粘土紐の巻上げにより成形され、外面箆削り、内面と底部外面が箆なでされている甕形土師器である。口径19.8㎝、器高29.7㎝、底径10㎝で浅黄橙色を呈する。５は砂礫を混入する粘土紐の巻上げにより成形され、外面箆削り、内面箆なでされ口縁部が大きく外反する甕形土師器である。推定口径20.6㎝、現高21.4㎝で、にぶい黄橙色を呈する。６は、砂礫を混入する粘土紐を巻上げて成形した推定口径37㎝、現高12㎝（推定高13.5㎝）の鍋形土師器である。外面箆削り、内面を箆なでしている。浅黄橙色を呈するが、外面底部には黒斑が認められる。

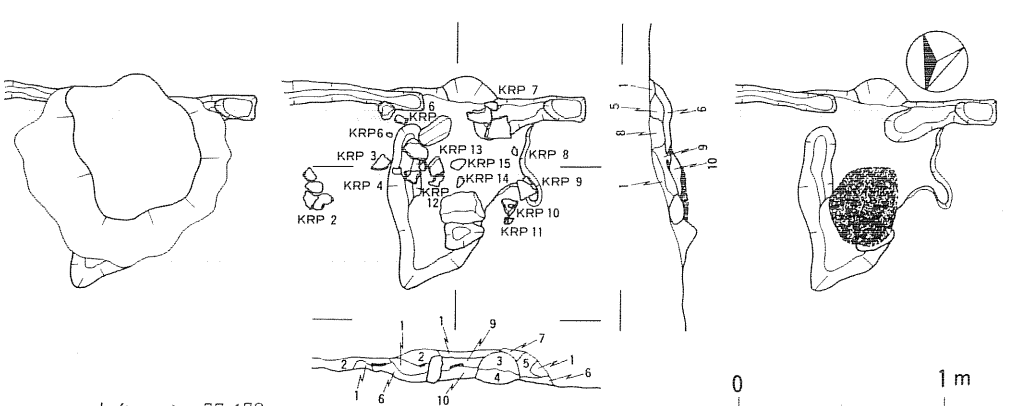
ＳＫＩ０７竪穴住居跡（第59図・第60図・図版４）

LS53、LT52・53、MA53・54のグリッドにまたがり、南側壁の南西隅部寄りに、かまどを付設した方形プランをもつ所謂焼失家屋である。主軸方位Ｓ－11°－Ｅ、壁長は南側497㎝、西側436㎝、北側480㎝、東側448㎝をはかる。プラン確認面から床面までの深さは、南側10～20㎝、西側10～15㎝、北側15～20㎝、東側15～20㎝で埋土は６層に分層された。床面は小さな凹凸があるがよく踏み固められている。床面中央やや北西寄りに縄文時代の土坑（SK07）があるが特に貼床をしていない。柱穴は四隅と西側を除く各壁に沿うように、穿たれているが壁から離れた床面にも多数の柱穴が検出されたが規則性はない。北側壁の下方中央部から北西隅部までと東側壁の下方、中央部から北東隅部近くまで幅12～18㎝、深さ６～10㎝の壁溝が検出された。東側壁下方の壁溝上方には幅20㎝（RN5）と30㎝（RN４）厚さ２～３㎝の炭化板材が直立していた。床面上にも炭化丸太材（RN1～3、RN10）、炭化板材（RN6～9、11、12）が出土した。かまどは南側壁の中央からやや南西隅部寄りに構築されている。かまど付設部分の床面は５～７㎝不整形に掘りくぼめられている。また、左袖部には、長円形の掘り込みがあり、芯材が立てられていたと考えられるが、右袖部には、芯材用の掘り込みが見られない。自然石が支脚として立てられている。かまど構築土中と、かまど中から甕形土師器破片が出土したが図化できるものはない。

ＳＩ07竪穴住居跡土層註記
１ａ：黒色土　少量のローム粒混入　　１ｂ：黒色土　ローム粒塊多量混入　　２：黒褐色土　ローム粒多量混入　　３ａ：黒褐色土　ローム粒と少量の焼土粒及び炭化物混入　　３ｂ：黒褐色土　ローム粒少量混入　　４：暗黄褐色土　ローム粒と少量のローム小塊混入　　５：黒褐色土　ローム粒と暗褐色砂質土混入



第59図　ＳＩ07竪穴住居跡実測図



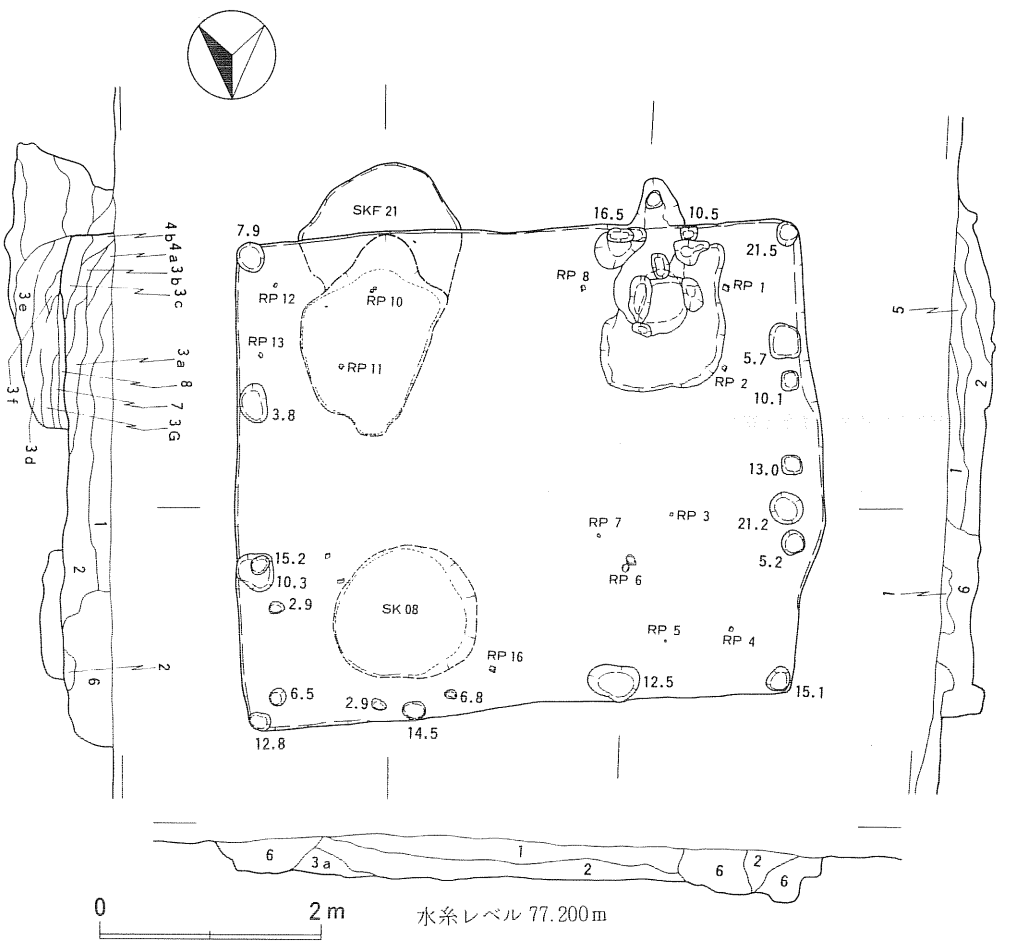
ＳＩ07竪穴住居跡かまど土層註記

1：にぶい褐色粘土（7.5ＹＲ5/4）　2：黒褐色土（7.5ＹＲ3/1）　浮石、ローム粒を多く混入する　3：灰白色粘土（10ＹＲ7/1）　4：暗褐色粘質土（10ＹＲ3/4）　5：にぶい黄褐色粘土（10ＹＲ5/3）　地山ローム粒を混入する　6：黒褐色土（10ＹＲ2/2）　非常に堅い　7：黒褐色土（10ＹＲ2/2）　浮石、ローム粒を混入する　8：暗赤褐色土（5ＹＲ3/4）　焼土塊を多く混入する　9：にぶい赤褐色土（5ＹＲ5/3）　粘土、焼土を混入する　10：暗赤褐色焼土（2.5ＹＲ3/4）

第60図　ＳＩ07竪穴住居跡かまど実測図

ＳＩ０８竪穴住居跡（第61図～第63図・図版４）

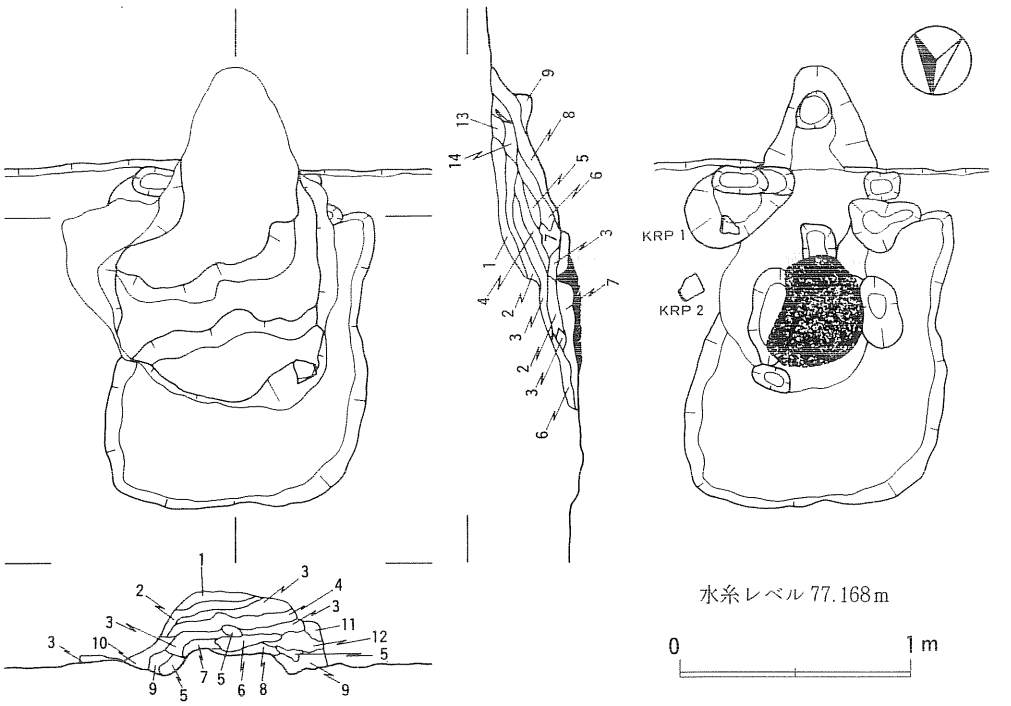
MA51、MB50・51、MC50・51にまたがり、SKI09竪穴遺構、SK08土坑、SKF21フラスコ状土坑と重複する。これらの新旧関係については、SK08、SKF21が縄文時代、SKI09は本住居跡より新しいことが土層断面観察で確認されている。主軸方位Ｓ－10°－Ｅ、壁長は南側502㎝、西側422㎝、北側484㎝、東側433㎝をはかる方形プランを呈する。プラン確認面から床面までの深さは、南側壁25～35㎝、西側壁20～30㎝、北側壁10～30㎝、東側壁20～30㎝をはかる。埋土は、８層に分層された。床面はSKF21と重複する部分で一度掘り込みが行われたあと埋め戻して上部に貼



ＳＩ08竪穴住居跡土層註記
１：黒色土　軽石粒多量混入　２：黒褐色土　やや多量の軽石粒と少量の黄褐色土粒、塊混入　３ａ：黒褐色土　黄褐色土塊少量混入　３ｂ：黒褐色土　黄褐色土粒塊を混入　３ｃ：黒褐色土　多量の黄褐色土粒、塊を混入　３ｄ：暗黄褐色土　黄褐色土大塊を混入　３ｅ：黒褐色土　黄褐色土粒、塊と少量の白色粘土を混入　３ｆ：黒褐色土　やや多量の黄褐色土粒、塊混入　３ｇ：黒褐色土　多量の黄褐色土粒、塊混入　４ａ：黒色土　軽石粒と黄褐色土塊を混入　４ｂ：黒色土　５：黒色土　黄褐色土粒、塊少量混入　６：攪乱　７：暗黄褐色土　多量の黄褐色土塊混入　８：黒褐色土　黄褐色土少量混入

第61図　ＳＩ08竪穴住居跡実測図

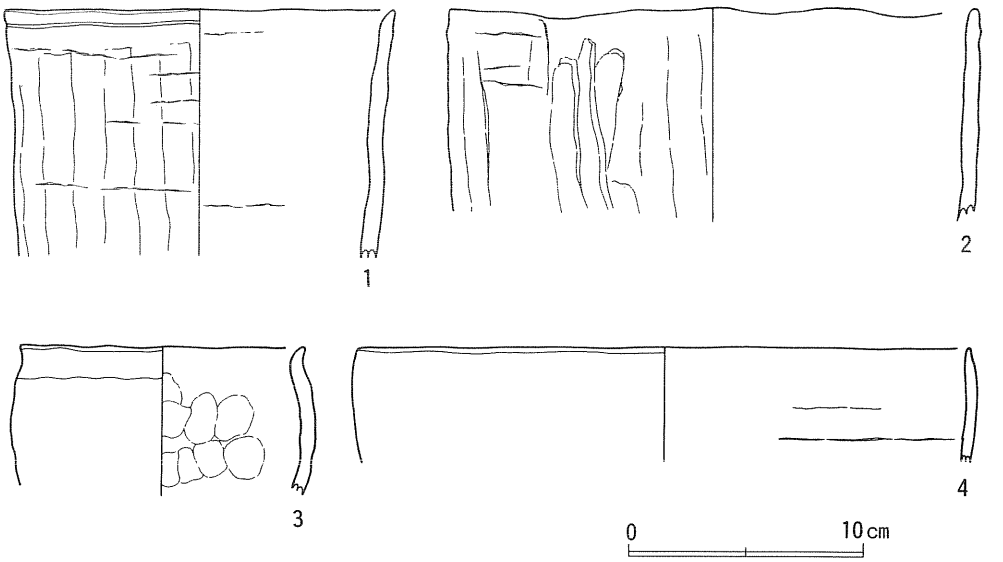
床、SK08と重複する部分で挙大の軽石が混入する黄褐色土が充塡されている以外は、小さな



ＳＩ08竪穴住居跡かまど土層註記
1：灰白色粘土（５Ｙ7/2）　地山ローム粒塊を少量混入する　2：灰黄褐色土（10ＹＲ5/2）　地山ローム粒を少量混入する　3：灰白色粘土（５Ｙ7/2）　4：黒褐色土（10ＹＲ3/2）　地山ローム粒を少量混入する　5：明赤褐色焼土（2.5ＹＲ5/8）　塼質化した塊を含む　6：にぶい赤褐色焼土（2.5ＹＲ5/3）　粘土が多い　7：灰黄褐色粘土（10ＹＲ5/2）　焼土塊・地山ローム塊を混入する　8：黒色土（10ＹＲ2/1）　堅くしまっている　9：黒褐色土（10ＹＲ3/2）　地山ローム塊を混入する　10：黒褐色土（10ＹＲ3/2）　地山ローム粒、塊を多く混入する　11：浅黄橙色粘土（10ＹＲ8/4）　12：暗褐色土（10ＹＲ3/4）　地山ローム粒、塊を多く混入する　13：橙色粘土（2.5ＹＲ7/6）　熱変化した粘土　14：にぶい橙色粘土（５ＹＲ7/3）　熱変化した粘土

第62図　ＳI08竪穴住居跡かまど実測図

凹凸は見られるがよく踏み固められている。柱穴は四隅部と各壁面下方に穿たれている。壁溝は検出されなかった。かまどは南側壁の中央からやや南西隅部寄りに構築されている。かまど部分の床面は竪穴掘り込み段階で傾斜をつけて残されている。両袖部分と支脚設置部分を長円形に掘り下げたあと、前面と右袖部外側を幅90㎝、奥行130㎝の略長方形に２～５㎝掘り下げている。芯材と架構材になる石材は出土しなかった。煙出孔近くの底面に径20㎝、深さ３㎝の掘り込みが認められる。遺物は、床面上から縄文時代の板状土偶（RP６）１点と甕形土師器片、かまど中から甕形土師器破片が出土したが量的には少ない。１（RP１＋KRP１）は推定口径16.6㎝、現高10.6㎝で粘土紐巻上げにより成形され、口縁部に１条の沈線状箆なでのある甕形土師器である。外面は箆なでされ浅黄橙色を呈する。２（KRP２）は細砂粒を多く混入する粘土紐を巻上げ成形した甕形土師器で推定口径22.6㎝、現高9.1㎝をはかる。外面箆なでされ淡黄色を呈する。３（RP10）は、推定口径12.2㎝、現高6.3㎝をはかる甕形土師器でにぶい黄橙色を呈するが内面に指腹の圧痕がみられる。外面糊状、内面煤状の炭化物が付着している。４



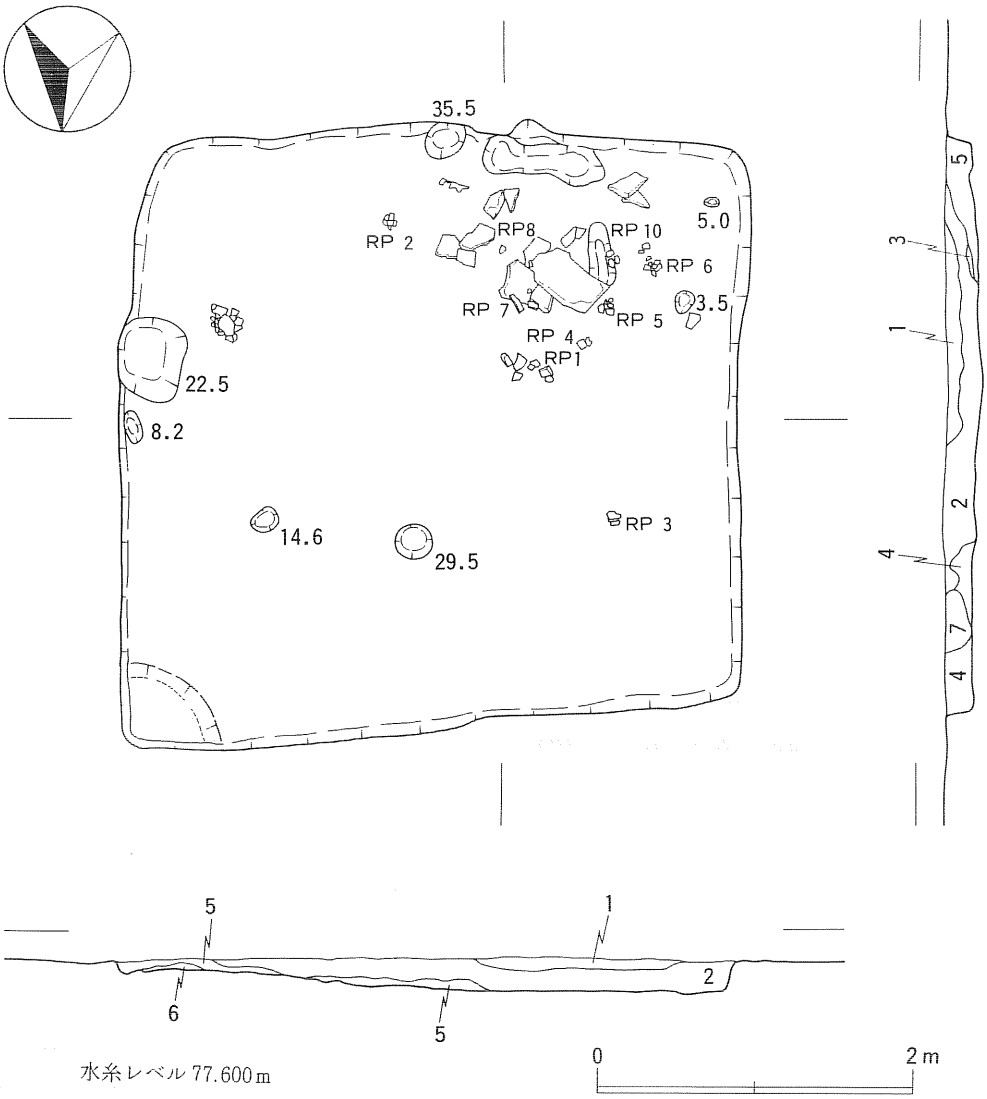
第63図　ＳＩ08竪穴住居跡出土土器実測図

（RP４）は砂礫を多く混入する粘土紐を巻上げて成形したもので口縁部が内反気味に立ち上る甕形土師器である。淡橙色～浅黄橙色を呈する。

ＳＩ１３竪穴住居跡（第64～第66図・図版４）

MD46・47、ME46・47のグリッドにまたがり、北東隅部がSKF26フラスコ状土坑と重複して確認された方形プランを呈する竪穴住居跡である。主軸方位Ｓ－６°－Ｅ、壁長は南側368㎝、西側340㎝、北側388㎝、東側374㎝をはかる。プラン確認面から床面までの深さは、南側壁５～20㎝、西側壁15～20㎝、北側壁10～14㎝、東側壁４～10㎝で埋土は７層に分層された。床面はよく踏み固められている。柱穴は７ケ所に検出されたが、規則性を認めない。壁溝は検出されなかった。かまどは南側壁中央からやや南西隅部寄りに構築されている。壁下方に幅42㎝、長さ152㎝、深さ８㎝の構状の掘り込みと右袖部に幅15㎝、長さ45㎝の長円形の掘り込みの外、床面にかまど構築のための掘り込みをしていない。袖部は粘土のみで作られているが天井部は板状節理の石材を架構材として使用したらしく折損して残っていた。

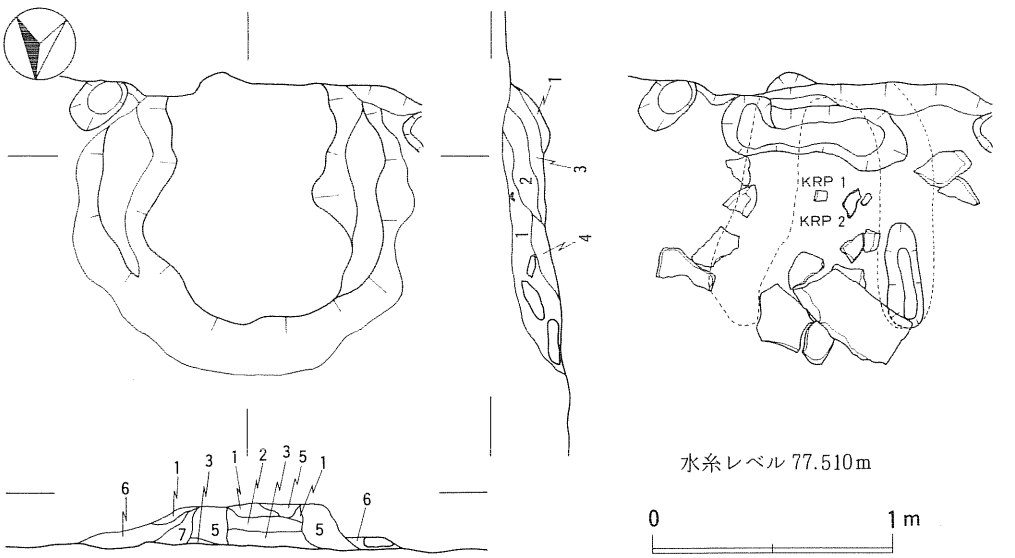
遺物は、床面上から溶融物の付着する羽口破片（RP4、RM1）、内耳土器の耳部（RP6）甕形土師器（RP１、２、５、７、８）の他、用途不明の土製品（RP３）が出土し、かまど粘土上から羽口小片（KRP１）、甕形土師器口縁部破片（KRP２）が出土した。１（RP7とKRP2の接合）は、推定口径21㎝、現高8.3㎝で胎土に砂礫を多く混入する甕形土師器である。外面箆削りのあと指なでしている。暗灰黄色を呈する。２（RP6）は、内耳土器の接合部で剥落した耳部破片である。粘土紐２本を合わせて左撚り後箆削り整形している。浅黄橙色を呈する。3、4（RP３）は、蝶ネジのような形態を呈する土製品である。浅黄橙色を呈する。



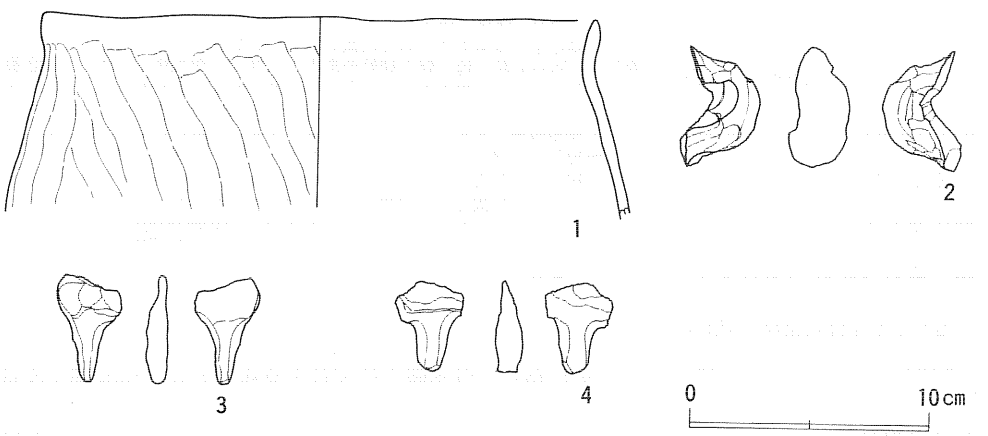
ＳＩ13竪穴住居跡土層註記
１：黒色土　焼土・炭化物・ローム小塊混入　２：黒褐色土　ローム粒塊混入　３：灰白色粘土　かまど粘土　４：黒褐色土　ローム大塊混入　５：灰白色粘土　ローム粒混入　６：暗黄褐色土　ローム塊混入　７：攪乱

第64図　ＳＩ13竪穴住居跡実測図

ＳＩ 13竪穴住居跡かまど土層註記
１：黒褐色土（10ＹＲ3/1）　地山ローム粒・塊・浮石粒を多く混入する　２：灰白色土（2.5Ｙ8/1）　シルト質、サラサラしている。（灰層か？）　３：暗褐色土（10ＹＲ3/4）　堅くしまっている　４：焼土　博質化している　５：灰白色粘土（５ＹＲ8/2）　６：灰白色粘土（2.5Ｙ7/1）　地山粒と浮石粒を混入する　７：灰白色粘土（2.5Ｙ8/1）　地山ローム粒を混入する



第65図　ＳＩ13竪穴住居跡かまど実測図



第66図　ＳＩ13竪穴住居跡出土土器等実測図

(2)　竪穴遺構・土坑

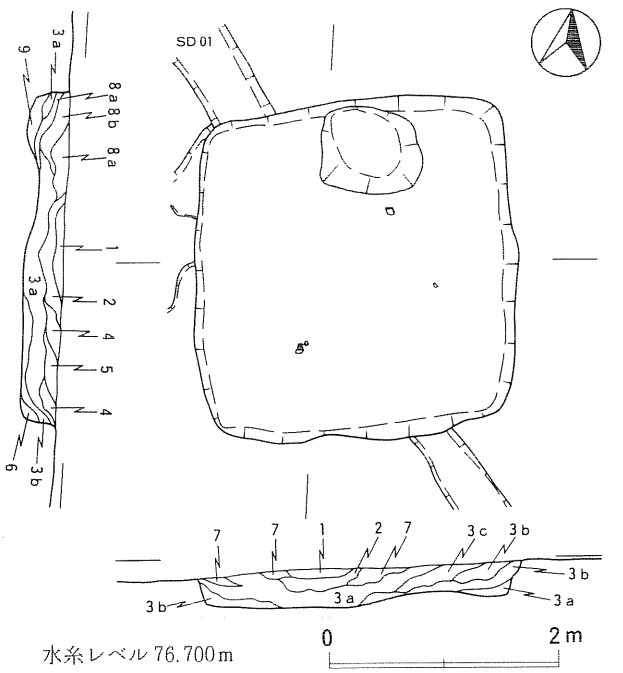
ＳＫＩ０３竪穴遺構（第67図・図版４）

LS58、LT58のグリッドで、SD01溝状遺構と重複して検出したが、SD01が新しい。長軸方位N－13°－W、壁長は、北側252㎝、東側267㎝、南側246㎝、西側259㎝を測るが各壁とも胴張りがみられる。プラン確認面から床面までは30～35㎝の深さがあり、埋土は12層に分層された。床面は、ゆるやかな凹凸があるが、よく踏み固められている。北側壁中央の下方には、長辺90㎝、短辺74㎝、深さ30㎝の略方形の掘り込みが検出された。遺物は、床面に数点の自然石が出土したにとどまる。

ＳＫＩ０６竪穴遺構

（第68図・図版４）

LS56、LT56、MA56のグリッドでSI05竪穴住居跡・SK06土坑と重複しているが、SI05より新しく、SK05より古い。プラン確認時、地山ロームの大塊が多量に堆積していたため、平面プランの確認が出来ず、南東側壁を削平してしまった。長軸方位Ｎ―61°―Ｅ、壁長は、北西側506㎝、南西側414㎝、南東側現長174㎝（推定510㎝）、北東側280㎝をはかる。略台形プランを呈する。プラン確認面から床面までの深さは、10～20㎝であるが、床面の凹凸が激しく、柱穴類似のくぼみがみられるが、掘り下げ時の道具痕と思われる。遺物は出土しなかった。



ＳＫＩ03竪穴遺構土層註記
１：黒色土　少量のローム粒、微細軽石粒を混入。ＳＤ01の埋土　２：黒褐色土　ローム粒、塊、軽石細粒を混入　３ａ：黒褐色土　ローム塊と軽石粒を混入　３ｂ：黒褐色土　ローム粒と微細軽石を少量混入　３ｃ：黒褐色土　４：黒褐色土　ローム細粒を多く混入し、微細軽石を部分的に混入　５：黒褐色土　４層よりローム粒の混入が多く、微細軽石を全体に混入　６：黄褐色土　壁の崩落土　７：黒褐色土　ローム細粒を少量含む　８ａ：暗黄褐色土　黄褐色土、少量のローム塊混入　８ｂ：暗黄褐色土　焼土塊を混入　９：黒褐色土　少量のローム粒、焼土粒を混入

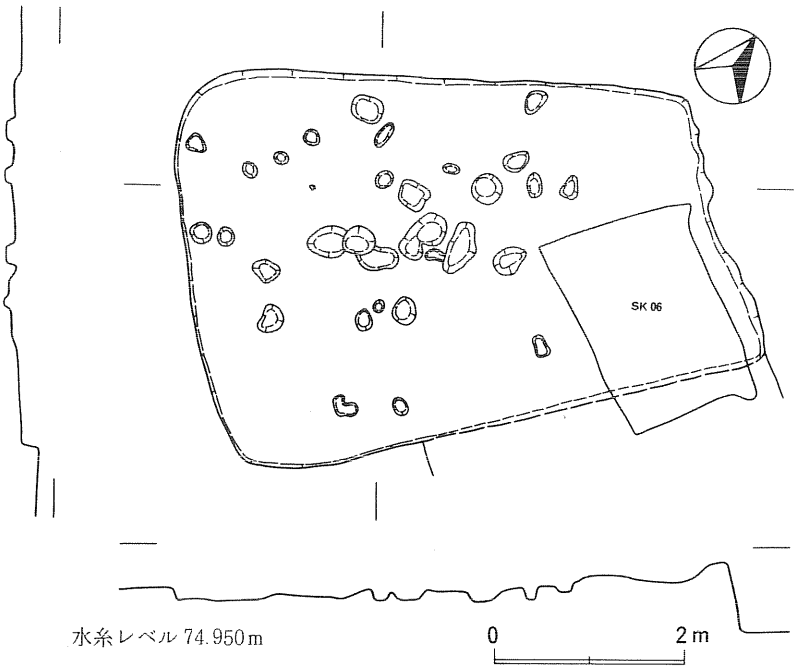
第67図　ＳＫＩ03竪穴遺構実測図

ＳＫＩ０９竪穴遺構（第69図・図版４）

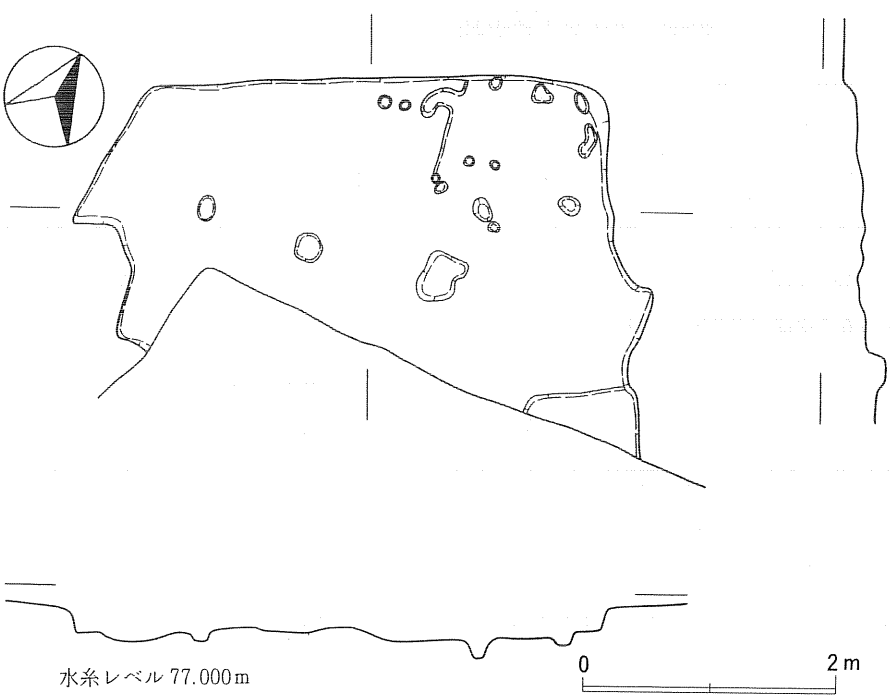
MB51・52、ＭＣ52のグリッドにまたがり、SI08竪穴住居跡と重複するが、SI08埋土を掘り込んで構築しているので、SKI09が新しい。調査時、プランが明確でなかったため、SI08埋土掘り込み部分（南側壁部分）を掘りすぎてしまった。北側壁長354㎝、東側壁現長296㎝、西側は、プランそのものが不明確であるが、最長210㎝をはかる。プラン確認面から、床面までは約20㎝であるが、凹凸が激しい。また、このため、柱穴と判断できるものはない。遺物は出土しなかった。

ＳＫ０６土坑（第70図・図版４）

LS56、LT56のグリッドにまたがり、SI05竪穴住居跡・SKI06竪穴遺構と重複しているが、土層堆積状態の観察によりSI05竪穴住居跡→SKI06竪穴遺構→SK06土坑と新らしくなることが確認されている。長軸方位Ｎ―62°―Ｗ、壁長は北東側207㎝、南東側136㎝、南西側222㎝、北西側156㎝をはかる。長方形プランを呈し、プラン確認面から底面までの深さは80～90㎝であ

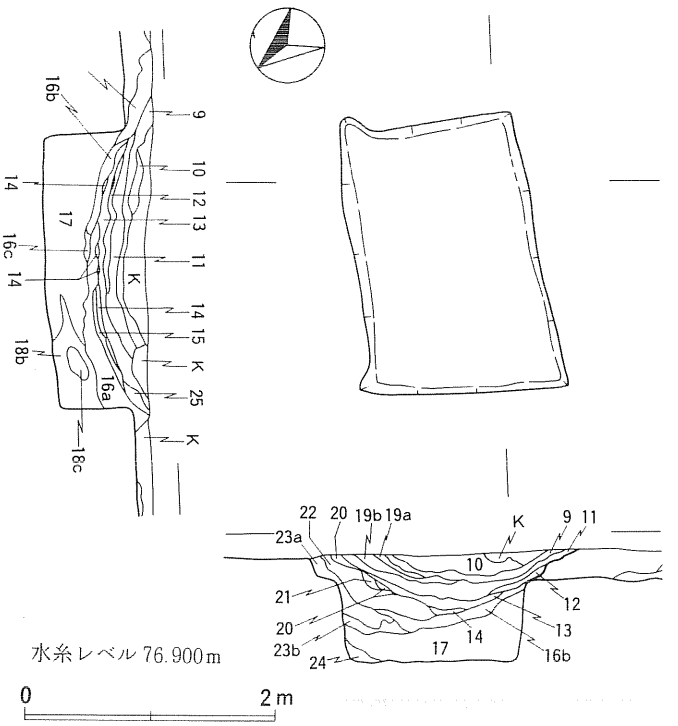


第68図　SKI06竪穴遺構実測図



第69図　SKI09竪穴遺構実測図

る。埋土は23層に分層されたが、第14層は層厚２～５㎝で白頭山起源の所謂苫小牧火山灰である。遺物は出土しなかった。



ＳＫ06土坑土層註記
9：黒色土　少量の軽石粒混入　10：黄褐色土　黄褐色土塊と軽石塊混入　11：褐灰色土　多量の微細軽石粒混入　12：褐灰色土　多量の微細軽石粒混入　13：黒色土　軽石を多く混入　14：浅黄色土　シルト質の火山灰　15：黒褐色土　16a：褐灰色土　軽石を多く混入　16b：褐灰色土　黄褐色土粒を多く混入　16c：褐灰色土　灰白色土粒の混入が多い　17：灰白色粘質土　18a：灰白色砂質土　18b：灰白色砂質土　18c 灰白色砂質土　19a：黒褐色土　細砂粒と若干の黄褐色土粒混入　19b：黒褐色土　軽石粒少量混入　20：暗黄褐色土　黄褐色土小塊混入　21：黒褐色土　砂粒少量混入　22：褐色土　少量の砂粒とやや多量の軽石粒混入　23a：黒褐色土　多量の砂粒とやや多量の軽石粒混入　23b：黒褐色土　24：黒褐色土　灰白色粘質土粒混入　25：黒色土　黄褐色土粒と砂粒を少量混入

第70図　SK 06土坑実測図

3　時期不明の遺構

ＳＤ０１溝状遺構（第71図）

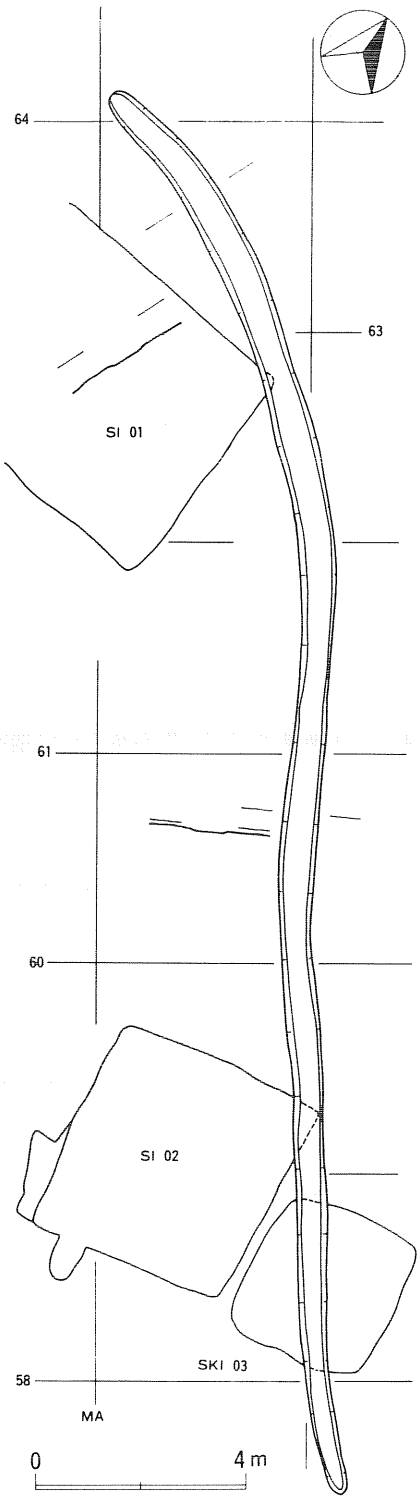
LS57～62、LT57～64のグリッドにまたがり、長さ28ｍ、幅40～80㎝、深さ５～10㎝の溝状遺構である。底面が非常に堅い。埋土は、ローム粒の混入する黒褐色土である。SI01・02各竪穴住居跡、SKI03竪穴遺構の埋土上面を掘り込んでつくられているのでこれらより新しい。

ＳＤ０２空堀（第72図・図版７）

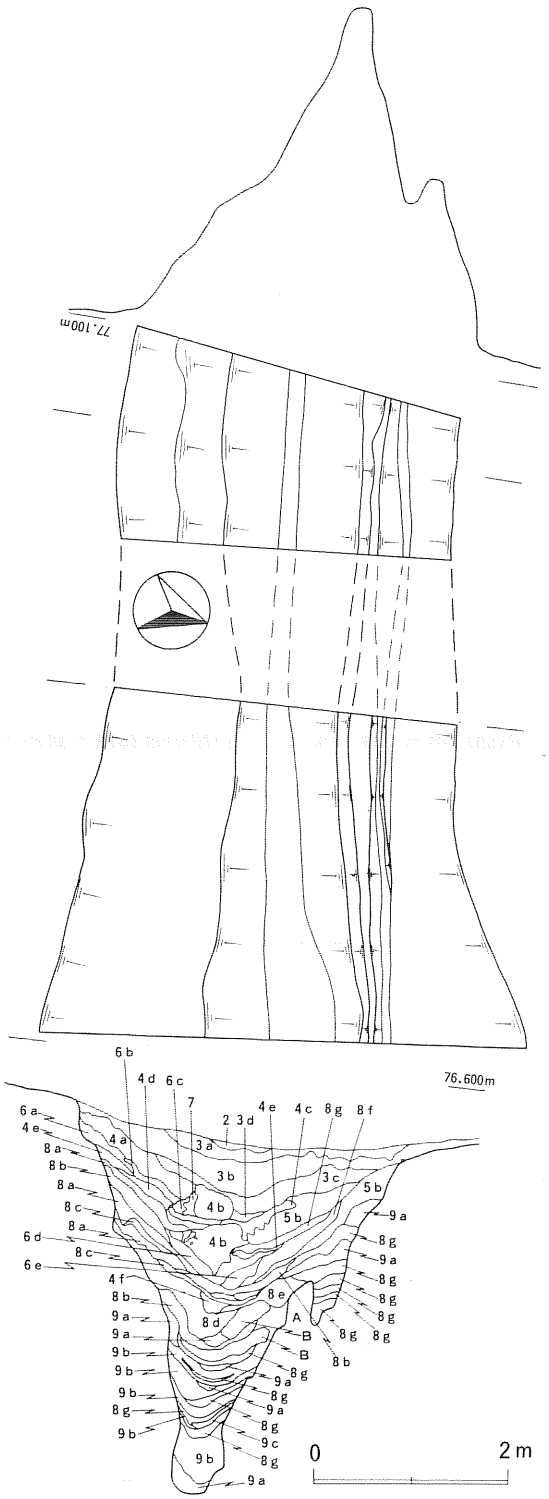
MD43、ME42・43、MF43・44のグリッドにまたがり検出された空堀である。現況でも遺跡の在る台地を南北に区画するように浅い帯状のくぼみであることから、空堀ではないかと思われていた。また、現農道開削前は、この帯状のくぼみが道路として使用されていたという。

上幅350～370㎝、深さ330～380㎝、下底幅20～30㎝の箱薬研状を呈するが、北側側面の中間に箱薬研状の溝を有する。この溝の南側立ち上り部分は、崩壊しているが、埋土中にそのまま残っている(土層B)ことから原形を推察することができる。地山がシラスであることから、雨水により開削時よりも深く開析されている可能性がある。調査した長さは、730㎝である。

ＳＤ02空堀土層註記
１：明褐色土　明褐色土粒塊　２：黒褐色土　やや多量の明褐色土粒混入　３ａ：黒褐色土　少量の明褐色土粒と黄色土粒を混入　３ｂ：黒褐色土　少量の黄色土粒と軽石粒を混入　３ｃ：黒褐色土　少量の黄色土粒塊と軽石粒を混入



第71図　ＳＤ 01溝状遺構実測図



第72図　ＳＤ 02空堀実測図

３ｄ：黒褐色土　黄褐色土粒と黄色土粒をやや多く混入　４ａ：黒色土　黄褐色土大塊をやや多く混入　４ｂ：黒色土　少量の黄褐色土粒塊混入　４ｃ：黒色土　やや多量の微細黄褐色土粒と少量の同粒塊を混入　４ｄ：黒色土　少量の黄褐色土粒と褐灰色土粒を混入　４ｅ：黒色土　やや多量の褐灰色土粒を混入　４ｆ：黒色土　少量の褐灰色土粒を混入　５ａ：暗黄色土　黄色土粒塊を混入　５ｂ：暗黄色土　やや多量の黄色土粒塊と少量の黄褐色土塊を混入
５ｃ：黄色土　５ｂ：黄色土　黄色土粒と褐灰色土粒をやや多く混入　６ａ：暗黄褐色土　褐灰色土粒をやや多く混入
６ｂ：黄褐色土　少量の褐灰色土粒を混入　６ｃ：黄褐色土　６ｄ：黄褐色土　黄褐色土粒と同砂質土を多量に混入　６ｅ：黄褐色土　黄褐色土小塊と褐灰色土を混入　７：褐色土　少量の黄褐色土粒と軽石を混入　８ａ：褐灰色土　少量の青白色砂粒と褐色土粒塊を混入　８ｂ：褐灰色土　やや多量の青白色砂粒を混入　８ｃ：褐灰色土　多量の青白色砂粒を混入　８ｄ：褐灰色土　多量の褐灰色土粒塊、少量の青白色砂粒塊を混入　８ｅ：褐灰色土　８ｆ：褐灰色土　砂粒と黄褐色土小塊を混入　８ｇ：褐灰色砂質土　褐灰色土粒と青白色砂粒がほぼ同量混入。ザラザラしている
９ａ：青白色砂質土　少量の黄褐色土を混入　９ｂ：青白色砂質土　やや多量の褐灰色土粒を混入　９ｃ：青白色砂質土　多量の褐灰色土粒を混入　Ａ：青白色砂質層と褐色土層又は褐灰白土層が交互に積み重なった地山層　Ｂ：Ａの地山層が崩落したもの

第３章　ま　と　め

本遺跡で検出・出土した遺構・遺物については前章で述べたが、本章では若干のまとめと問題点を述べてみたい。

縄文時代

竪穴住居跡について

中期後半の所産であるＳＩ14竪穴住居跡１軒のみであり、しかも半分近く削り取られて遺存状態はよくないが、馬蹄形の石囲炉について、更に述べてみたい。遺構の遺存状態の悪さから、単純な炉か、複式炉か判断できないが馬蹄形に東側に開いた床面をみると、削り取られたものとは異なる傾斜角で落ち込んでいく部分が観察される。これが前庭部の掘り込み部分だとすると、複式炉である可能性がある。

土坑について

土坑６基とフラスコ状土坑25基を検出している。

台地の一部を調査しただけであるため、台地全体における位置づけは困難である。土坑の構築位置はＳＩ14竪穴住居跡の周辺に散在するもの（ＳＫ01、02、07、08）と、調査区南端に離れて位置するもの（ＳＫ03、04）に分けられる。いずれも住居跡との関係は不明であるが、時期的には中期後半に位置づけられるものと思われる。

フラスコ状土坑については、いくつかに分類することができる。ここでは、底部ほぼ中央にピットを有するかどうかにより分類される。底部ピットを有するものは、25基中11基と半数近くを数える。底部ピットを有する例は、萱刈沢貝塚、館下Ｉ、杉沢台などの各遺跡で確認されているものの、その機能については特定されていない。今回の調査でも、底部ピットの機能について明らかにし得る資料は得られなかった。11基のフラスコ状土坑の底部ピットを観察すると、深さが４～16㎝といずれも浅く、逆木を立てたものとは考えにくい。むしろ、上屋構造や

第2表　　フラスコ状土坑一覧表

遺構名	平面形	断面形	頸部の有無	規模(cm) 口径	深さ	底径	頸部径	底部ピットの有無	底部ピットの規模(cm) 口径	深さ	底径	出土遺物
SKF 1	楕円形	フラスコ形	有	188×204(推)	91	203×246	132×176(推)	無				
SKF 3	円形	フラスコ形	無	71×66	147	161×165		有	43×39	16	27×31	
SKF 4	楕円形	フラスコ形	有	146×176	159	127×131	71×66	有	32×31	9	16×16	
SKF 5	円形	フラスコ形	有	128×141	194	198×197	96×90	有	44×43	12	24×24	土器、石器
SKF 6	楕円形	フラスコ形	有	107×129	167	152×151	58×63	有	31×31	4	24×23	
SKF 7	楕円形	フラスコ形	有	98×90	86	79×79	61×65	有	25×21	9	19×15	
SKF 8	円形	フラスコ形	有	135×138	156	180×181	120×104	無				土器
SKF 9	円形	フラスコ形	有	128×118	66	163×172	119×114	無				土器、石器
SKF 10	円形	フラスコ形	有	125(推)×118	163	160×165	90×80	有	36×39	15	23×23	
SKF 11	楕円形	フラスコ形	有	97×79	116	156×159	66×56	有	38×36	10	29×28	
SKF 12	円形	フラスコ形	無	69×67	100	157×153		有	20×21	8	13×14	
SKF 13	円形	フラスコ形	有	165(推)×162	156	213×231	165(推)×163	無				土器、石器
SKF 14	円形	フラスコ形	有	149×144	112	132×129	99×83	無				
SKF 15	円形	フラスコ形	有	175×162(推)	105	172×165	156×137(推)	無				土器
SKF 16	円形	フラスコ形	有	85×97	80	191×190	82×92	無				
SKF 17	楕円形	フラスコ形	有	178×127	82	136×87	80×78	無				土器
SKF 18	円形	ビーカー形	(有)※	238×226	140	205×163	188×168	無				
SKF 19	円形	ビーカー形	(有)※	183×192	124	169×175	159×167	無				土器、石器
SKF 20	円形	フラスコ形	有	87×90	157	167×139	87×77	無				
SKF 21	円形	フラスコ形	有	65×62(推)	91	165×135	76×75(推)	有	27×28	7	12×12	
SKF 22	円形	フラスコ形	有	91×84	157	135×131	76×71	有	26×25	4	16×14	
SKF 23	円形	フラスコ形	有	100×83	141	129×143	85×65	有	30×28	5	13×16	
SKF 24	円形	ビーカー形	(有)※	145×148	126	135×133	120×126	無				
SKF 25	楕円形	ビーカー形	(有)※	126×158	75	100×91	108×118	無				土器、石器
SKF 26	円形	フラスコ形	無	70（推定）	58	99×113		無				土器

※（有）…… 頸部というよりむしろくびれのある場合。

第３表　土坑一覧表

遺構名	平面形	断面形	規模 (cm) 口径	深さ	底径	出土遺物
ＳＫ　０１	楕円形		１４２×１２０	３５	１３４×１０９	土器
ＳＫ　０２	円　形		１６３×１６８	１６０	１１４×１１７	
ＳＫ　０３	円　形	すり鉢形	２６５×２４６	１１５	４６×２６	土器
ＳＫ　０４	円　形	ビーカー形	２７３×２６９	１５８	２５６×２３６	土器
ＳＫ　０７	楕円形		１１２×８９	２８	９８×７２	土器
ＳＫ　０８	円　形		１３２×１２０	２１	１１６×１１４	

出入のための昇降施設に関するものと考えたほうが、より現実的と思われる。

フラスコ状土坑の埋土で特徴的であったのは、灰白色粘土、黄橙色土の順に堆積していたことであった。これは地山の堆積のちょうど逆の状況を示している。このことから他の土坑を掘る時に出た土の捨て場として既存のフラスコ状土坑が利用された可能性がある。

出土遺物について

縄文時代早期の貝殻文の施文された尖底土器は、米代川流域では鹿角市一本杉遺跡(註１)、大館市鳶ケ長根Ⅳ遺跡(註２)、野沢岱Ｃ遺跡(註３)で出土しているが、３遺跡とも米代川右岸に位置しており、左岸からの出土例は本遺跡が最初である。

ＭＢ51グリッド（ＳＩ08床面）から出土した板状土偶は、土偶製作技術の一端を窺せるに十分な内容をもっている。脇の下から肩にかけての溝状の痕跡は、脇の下から肩まで貫通している孔である。類例としては、鹿角市天戸森遺跡出土のもので、脇の下から肩まで貫通する孔と頭部両端にも孔を有する(註４)。製作時に脇下から肩に禾本科植物の茎を埋め込み、焼成したものである。断面に付着している煤は、そのことを示している。この貫通孔は紐を通して土偶を吊り下げることを目的としたものか不明であるが、もし吊り下げ用であれば土偶祭式にかかわる問題として類例と比較検討する必要がある。

天戸森遺跡出土例では、文様施文後に乳房を貼り付けているが、本例では、貼り付け後に文様を描いており逆である。

文様については、縄文等の地文は観察されず、沈線と刺突によって構成される。

平安時代

竪穴住居跡・竪穴遺構について

７軒検出した竪穴住居跡をＡ：規模　Ｂ：柱穴配置　Ｃ：かまど形態　Ｄ：壁溝の４点から分析してみたい。

Ａ：規模　　７軒の竪穴住居跡の規模は、次の３つのグループに分けることができる。Ａ―

１：長方形を呈する比較的規模の大きな竪穴住居跡で、01、07、08がこのグループである。Ａ－２：方形を呈し、中規模な竪穴住居跡で04が相当する。Ａ－３：方形を呈し比較的小規模な竪穴住居跡で02、05、13がこのグループである。

Ｂ：柱穴配置　　４つのグループに分けることができる。Ｂ－１：各壁長を４等分するように柱穴が各壁下方に配置される竪穴住居跡で01、07、08が相当する。Ｂ－２：柱穴が各隅部と各壁中央部下方に配置される竪穴住居跡で02、04、05が相当する。Ｂ－３：柱穴が各隅部に配置される竪穴住居跡で05が相当する。Ｂ－４：柱穴の配置に規則性がみられない竪穴住居跡で13が相当する。

Ｃ：かまど形態　　かまどの構築にさいして住居床面の掘り込みの有無、掘り込みの規模により３つのグループに分けることができる。Ｃ－１：かまど構築にさいし、床面を掘り込まない竪穴住居跡で05、13が相当する。Ｃ－２：かまど本体部分のみ掘り込むグループで01、04、07が相当する。Ｃ－３：かまど本体部分と焚口部前の床面も掘り込むグループで02、08が相当する。

Ｄ：壁溝　　壁下方に掘り込まれる溝の有無、溝が一巡または大部分に存するか、部分的かにより３つのグループに分けられる。Ｄ－１：溝がない竪穴住居跡で05、13が相当する。Ｄ－２：溝が一巡または大部分に存するグループで01、02、04が相当する。Ｄ－３：溝が局部的に存する竪穴住居跡で07が相当する。

以上の個別分類の結果から相関関係を求めると、規模Ａ－１が柱穴Ｂ－１と関係が認められるだけである。住居の「設計」という面からみると、規模Ａ－１グループである01、07、08は同一の基本設計プラン（モデュール）に基づくように推察される。同じようにＡ－３も同じモデュールで掘り込まれているように推察される。この住居モデュールの問題は同時存在あるいは変遷なのか詳細に検討しなければならない。SI02の床面に穿たれた方形の掘り込みは、貯蔵用器を入れるための土坑ではないかと考えられる。これについてはSKI03竪穴遺溝の掘り込みとSI01、08の床面の「埋め戻し」部分もその可能性がある。

竪穴遺構としたＳＫＩ03、05、06、09のうち06、09の２軒は、竪穴住居跡より新しい時期のものであるが、埋土が地山ローム塊であり、遺物が全く出土していないためその年代については不明である。SKI03は、かまどの付設されない竪穴住居跡あるいは竪穴倉庫のようなものかとも考えられる。

火山灰について

SK06土坑の埋土中に堆積していた火山灰層は、山本郡八森町土井遺跡第２号・第４号竪穴住居跡で確認された朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の白頭山を噴出源とする所謂苫小牧火山灰層と同一のものである。(註５)この火山灰の噴出年代について近年10世紀前半・大湯浮石（十和田

α降下火山灰）降下後あまり年数を経ずに降下したと考えられるようになってきた。このことから、SK06土坑と重複関係にあるSI05竪穴住居跡出土土器群は、少くとも10世紀前半以前という年代観が与えられる。

時期不明の遺構について

SD02空堀の形態は、青森県南津軽郡大鰐町砂沢平遺跡第2号・第3号堀に類似するものである(註6)。砂沢平遺跡は、古代と中世の遺構が検出された館跡であるが空堀の開削時期は明確ではない。館跡という名称は、中世を想起させる用語で、不適当と思われるが、このSD02空堀の形態は、館跡の防御施設としての機能をもっていたものと考えられる。開削時期を明らかにする根拠がないため時期不明の遺構としているが、横沢遺跡の所在するこの独立丘が所謂館状地形を呈していること、中世的遺構・遺物が皆無であることからこの空堀の時期を竪穴住居跡群と同じ平安時代と想定することもできる。

横沢遺跡調査の成果と課題について

わずか1,390㎡の道路予定部分のみの調査であったが、大館盆地内において米代川左岸から縄文早期の貝殻文尖底土器の出土は初めてのことであり注目されよう。また白頭山起源の苫小牧火山灰層については、大湯浮石降下後の毛馬内火砕流、所謂シラス洪水との関係(註7)で検出は難しいと思われていた。この火山灰が確認できたことから広域的な遺構・遺物の対比が可能となる。また、館跡との伝承や、字切(あざきり)図に館跡関連地名も残っていないが、横沢遺跡の所在する独立丘が館跡である可能性がある。ただし、その時期を前述の通り中世に必ずしも求める必要はなく、古代の堡塁集落的館跡と認識することができる。この点については今後資料の比較検討がなされねばならない。

註1　秋田県教育委員会　「一本杉遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』　秋田県文化財調査報告書第99集　1983（昭和58年）

註2　秋田県教育委員会　「鳶ケ長根Ⅳ遺跡」『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第84集　1981（昭和56年）

註3　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』　1976（昭和51年）

註4　鹿角市教育委員会　『天戸森遺跡発掘調査報告書』　鹿角市文化財調査資料26　1984（昭和59年）

註5　秋田県教育委員会　『土井遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第111集　1984（昭和59年）

註6　青森県教育委員会　『大鰐町砂沢平遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第53集　1980（昭和55年）

註7　平山次郎・市川賢一　「1,000年前のシラス洪水～発掘された十和田湖伝説～」　『地質ニュース』第140号　1966（昭和41年）

図版１　遺跡周辺の航空写真　（昭和61年10月27日撮影）

（上）調査区中央から南側　　（下）調査区中央から北西側

図版２　袖ノ沢遺跡遺構完掘状況

1

2

3

左：プラン確認状況

1　中央部から北西側
2　北西側から中央部
3　中央部から南東側

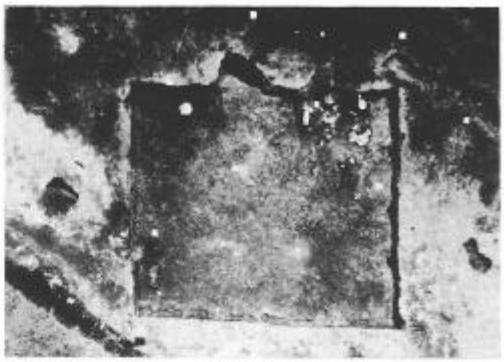
右：完掘状況

1　中央部から北西側
2　中央部から西側
3　中央部から南西側
4　中央部から南東側

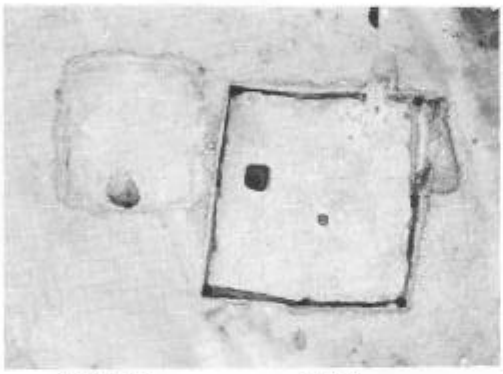
4

図版 3　横沢遺跡遺構配置状況

SI14

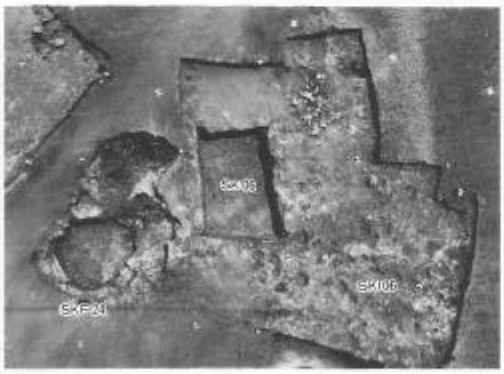


SI01

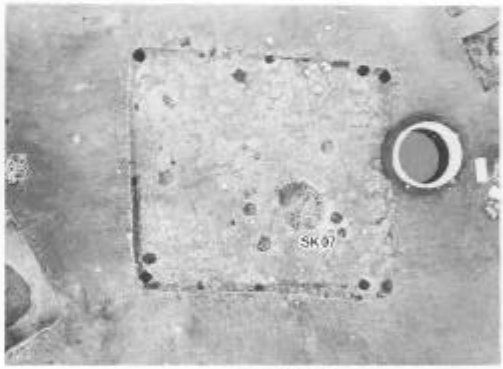


SKI03　　SI02

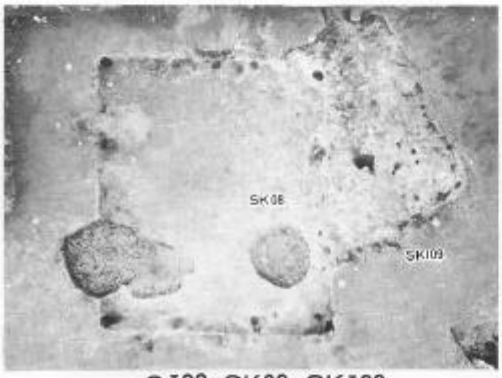
SI04



SKF24・SK06・SKI06・SI05



SI07・SK07

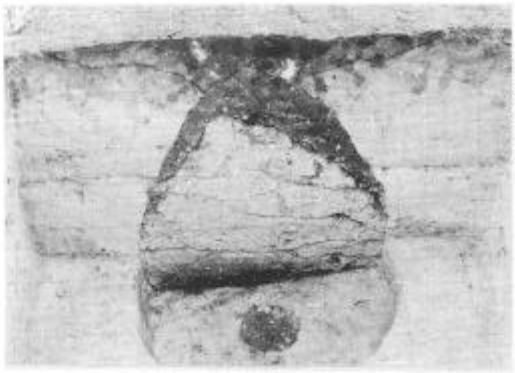


SI08・SK08・SKI09

SI13・SKF26

図版4　各遺構完掘状況

SKF03

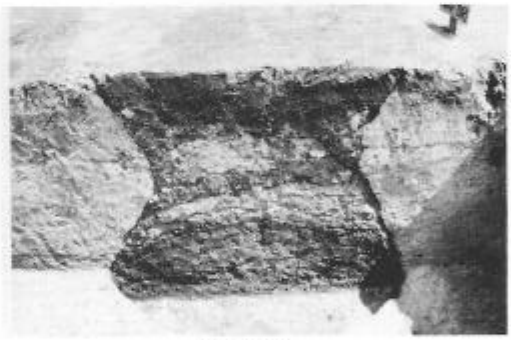


SKF04

SKF05

SKF06

SKF07



SKF08

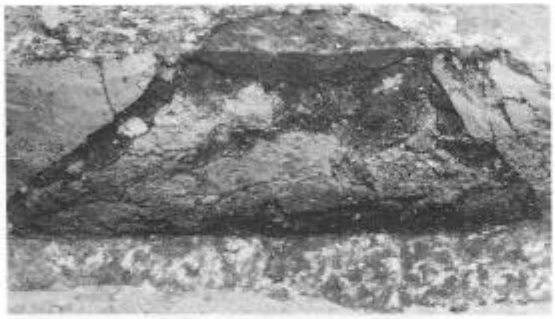
SKF10

SKF11

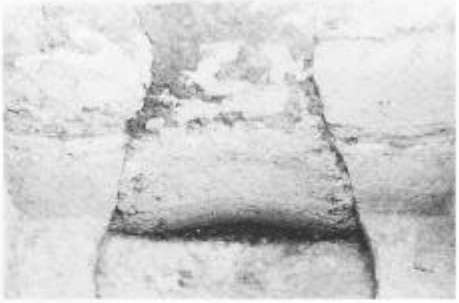
図版5　フラスコ状土坑埋土堆積状況

SKF12

SKF14



SKF16



SKF22

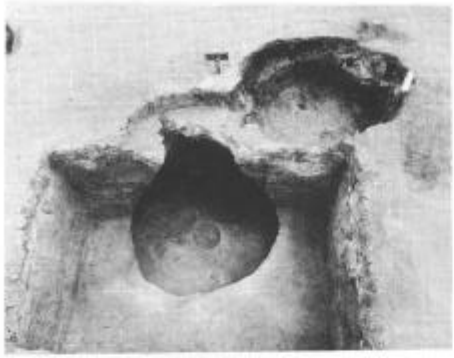
SKF23

SKF03

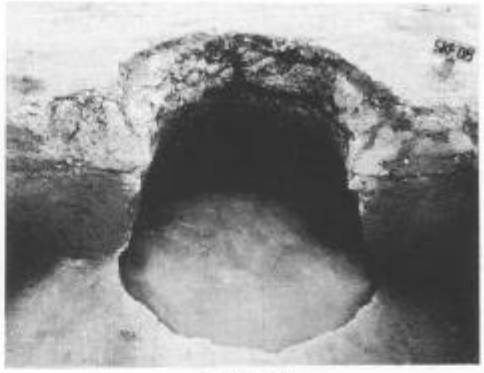
SKF06

SKF07

図版6　フラスコ状土坑埋土堆積状況・完掘状況



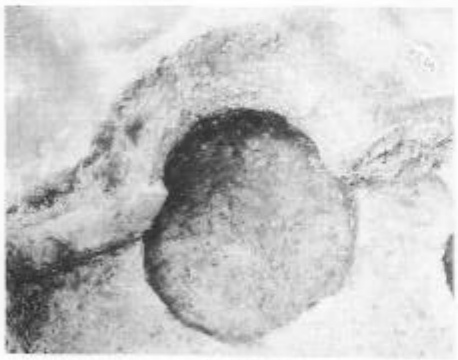
SKF06・SKF25



SKF08

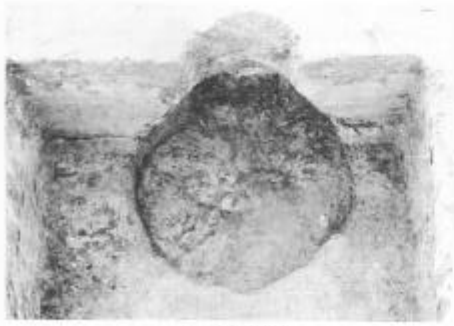
SKF10

SKF11



SKF14

SKF22



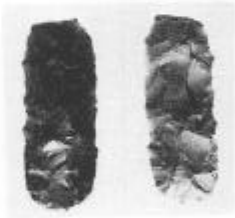
SKF23

SD02

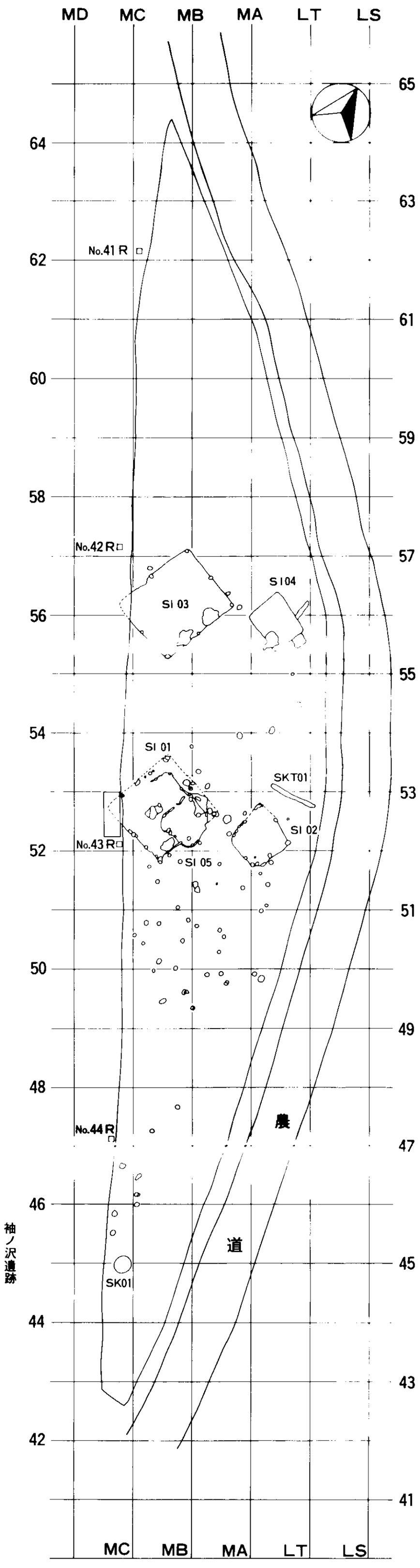
図版7　フラスコ状土坑完掘状況・空堀埋土堆積状況

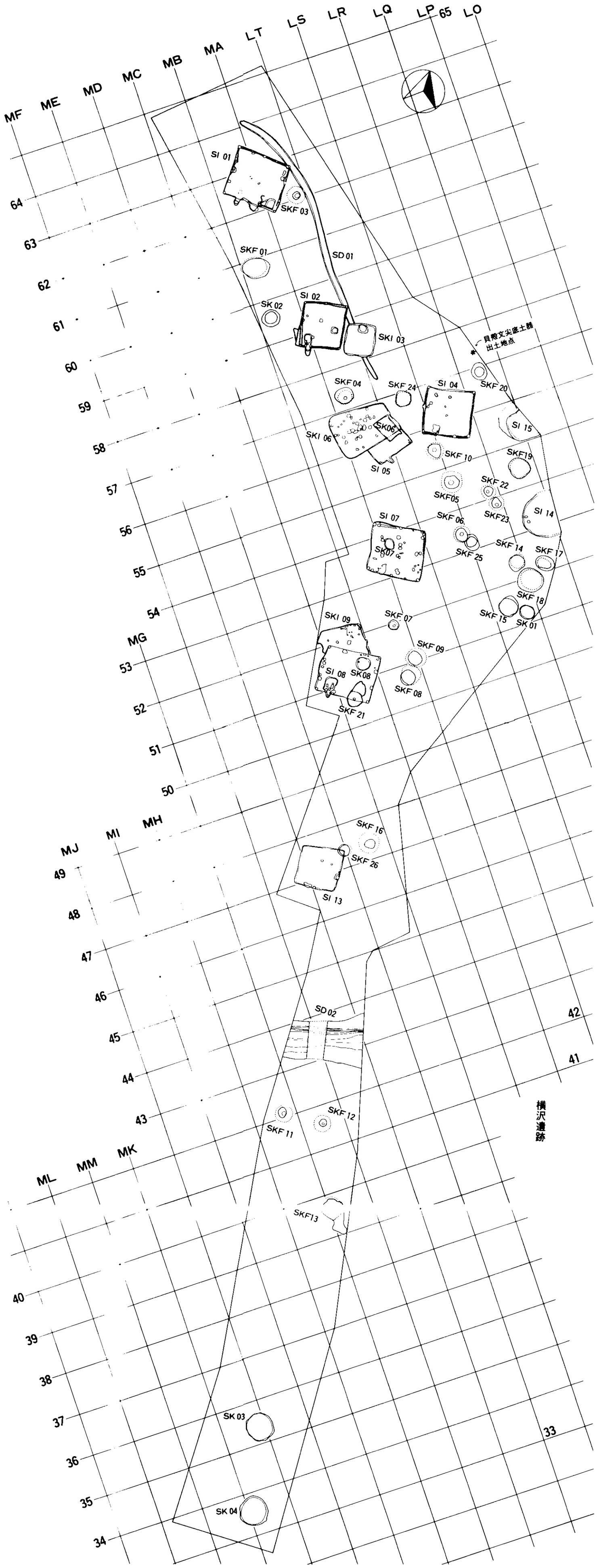
横沢遺跡

SI14



図版 8　縄文時代遺物





付図　袖ノ沢遺跡・横沢遺跡遺構配置図（グリッドは１辺４m）